

# 大魔王ハルカ（改）

秋月あきら

## 第1話 赤身のマグロ大作戦！

「にゃーっ!？」

朝起きたら猫でした。

鏡に映った自分の姿を見て、ハルカは発狂してしまった。  
視線の向こうでこつちを見ているナマモノ。マヌケ面でちょ  
こんと座る、黒い毛並みの小動物は、まさしく黒猫。

ハルカ・イズ・ア・パニック！！

もちつけ……じゃなくて落ち着け！

ここはどこだ？

家だ！

自分の部屋だ！

焦ることはない！

いや、焦ることはある！

どつちだ!？」

ここはひとつ、崇拜するヘヴィメタルバンドのポスターに祈  
りを捧げてみるか？

「バカじゃないの、そんなことで解決するわけじゃないじゃ  
ないの！」

自分の行動をバカ呼ばわりして否定。

### 3 大魔王ハルカ（改）

突然、部屋のドアが開いて、謎の少女が飛び込んできた。

「お姉ちゃん！ まさか帰ってきたの!？」

サプライズな表情で入ってきたのは、ハルカの妹のカナタだった。もちろん二足歩行の人間だ。

部屋を見渡すカナタの視線。

黒を基調にした部屋に並ぶスカルコレクション。トゲトゲしたアクセヤ、ゴスゴスした服がベッドに投げ捨てられている。

「……いつか家出するんじゃないかと思ってたけど……帰ってきてお姉ちゃん」

「（アタシここにいるんだけどなー）」

心で存在を主張しながら、ハルカはそーっとカナタの足元をすり抜けた。

気配に気づいてカナタが振り返った。

目と目が合う瞬間。

黒猫はまん丸な瞳に涙を浮かべ逃亡した。

「（今のままじゃ帰れない）」

そんなこんなで家を飛び出したハルカ。

猫のままじゃ家に帰れない。

途方に暮れて歩き出すハルカの瞳が見開かれる。

道路の向こうから爆走してくる箒に乗った黒髪の美女。

現代日本の住宅街では非常に珍しい光景だ。

「ありえないし！」

叫んだハルカは次の瞬間、ぶつかって来た箒に跳ね飛ばされた。

#### 4 大魔王ハルカ（改）

しかも、運が悪いことに、ハルカの落下地点には口を開けたマンホールが……あっ、落ちた。

ハルカ落下。

「にやーっ！！」

叫び声は真つ暗な穴の中に吸い込まれていった。

急ブレーキで止まった筈の美女が呟く。

「なにか撥ねたような気がするが……ふふっ、気のせいかな」

遠くからパトカーのサイレンとランプが見えた。それを見た

美女は再び幕を走らせたのだった。

てゆーか、暗い闇の中に落ちたハルカの運命はいかに！

シーマス運河が地平線の先まで伸びている。

その上空を羽の生えた爬虫類のような生物が滑空し、丘の上に聳え建つ立派な城が見下ろす王都アステアへと降りていく。

市場で活気付く中央広場を見下ろす大聖堂。天突く大聖堂を一周して、石畳のメインロード上空を、なぞるように羽の生えた爬虫類　ドラゴンが飛翔する。

世界三大魔導国家と名高い王都アステア。治安も比較的よく、裕福な階層が多く住む。魔導国家というだけあって、魔導関連の仕事に就いている者も多い。

古くからの外観を守る石造りの家が主流で、三角屋根を乗せた三階建てや四階建ての建物が目に付く。

その場所を離れ、東居住区に向かうと、庭付きの平屋建てや、二階建ても多く見られるようになる。

5 大魔王ハルカ（改）

ドラゴンが飛翔した風の煽りを受け、ポストからはみ出すくらい溜まっていた手紙が、ひらりひらりと道路にばら撒かれた。

地面に落ちた手紙の宛名を見ると、『ルーファス・アルハザード様』と書かれてあった。

手紙の先に目をやった庭着き平屋建ての借家が、魔導士ルーファスの家だ。

ドツカーン！

突如、ルーファス宅から、通りまで鳴り響くが爆発音が木霊した。

慌てて近所の住民たちが、外に飛び出してくる様子もない。

道路で遊んでいた子供たちが無邪気に笑う。

「やったあ、またへつぽこが失敗したぞ！」

「近所では『へつぽこさんの家はどこですか？』で通じてしまふ。大人から子供まで、お隣さんの猫まで、知らぬ者のいない、それがへつぽこ魔導士ルーファスだった。

ルーファス宅の中は非常に汚い。

部屋の中はカビや薬品臭く、とにかく散らかっている。

リビングを埋め尽くす書物や魔導具やら、脱いだままの服など、バザーが開けるくらい選り取り見取りだ。簡単に言うてしまふと足の踏み場がない。

テレビはつけっぱなしになってるし、ソファに座るには大規模な発掘作業が必要で、ホントにこんな秘境に人類が住んでるんですか？

と、頭が痛くなりそうだ。

表札には“ルーファス”とあるが、この部屋には人の気配がない。

辺りを見回すと、洞窟発見！

違った。地下室に下りる薄暗い階段だった。ある意味人工洞窟だ。

地下の魔導実験室で、コソコソ動く影あった。

ロウソクの明かりを反射して、巨大な眼が光った。

まさか、洞窟に棲むモンスター出現かっ！

違った。まん丸メガネを掛けた人影だった。

マント付きの魔導衣に身を包み、生気の抜けたような灰色の長髪を、首の後ろでテキトーに結わいている。ご近所でも挙動不審で有名なルーファスその人だ。

今日のルーファスは一味違う。普段のルーファスを知らない人にはわからないが、気合いの入りようが違うのだ。

しかも、なんだかプンプン怒っている。

「今日の今日こそあいつらをギャフンと言わせてやる」

遡ること数時間前、魔導学院でドジったルーファスは、今日もバカにされて帰ってきた。そんなのいつものことだが、ちりも積もれば山となる。ついに山は噴火の時を迎えたのだ。

汚名返上のため、ルーファスはビックな召喚の準備をしていた。それもかなり無謀極まりない召喚だ。

大魔王ルシファアの召喚。邪神七将に名を連ねるルシファアの召喚は、未だかつて成功例のない難易度の高い召喚だ。

この大魔王を召喚しちゃって、自分のパシリとして顎で遣えれ

## 7 大魔王ハルカ（改）

ば、ルーファスの名は超ミラクル天才大魔導士ルーファス様として、世界にその名を轟かせることができるだろう。万が一、奇跡の運命連鎖が起きちゃった場合の話だが……。

軽く咳払いをして、ルーファスは召喚に備えた。

分厚い魔導書を片手にルーファスのメガネがキラリーンと輝く。

「えーと、なにになに……ライラライラ……闇よりも暗き者……

……されど……陽よりも……黄金の翼……」

メガネが輝いたわりには、自信なさ気にボソボソと、しかも棒読みだ。

しかし、呪文詠唱をはじめたと同時に、地響きが地下室を襲い、棚に並べてあった赤青緑の薬ビンが、次々と床に落ちて激しく割れた。

ゴクンと硬いツバを呑み込み、ルーファスは最後だけ大声を腹から出した。

「出でよ大魔王ルシファー……さん」

床に描かれた幾何学模様の魔法陣が黄金の輝きを放った。

ドーン！

爆発と閃光が辺りを包み、カエルが鳴いた！

「グエツ」

カエルじゃなくて、カエルのように地面に這いつくばるルーファスだった。

そんなルーファスの上に座る二本の角を生やしたシルエツト。「痛いじゃないの！ なにここどこ、アンタだれ？」

立ち上がった謎のシルエットが、這いつくばるルーファスのわき腹に蹴った。

「ぐわっ！」

痛みで顔を歪ませながら、ルーファスはゆっくりと立ち上がった。

そして、硝煙をバツクに立つシルエットを見つめた。

「ここ、これが……大魔王なのかな？」

とどこどこ破れた網タイをはく脚が、黒いスカートから伸び、仁王立ちのポーズを決めている。角に見えたのはピンク色をしたツインテールだった。

顔はどう見ても、十五、六歳の少女だ。

少女を前にして、まだルーファスは召喚されたのはルシファだと、頑張って信じようとしていた。

「（け、けど、格好はなんか悪魔的というか、仔悪魔っぽいぞ。ベルトみたいなチョーカーとか、トゲトゲのリストバンドとか）」

大魔王（仮）を見ながら、ルーファス意を決して質問タイム！

「（よし、ここは直接本人確認が確実だ）あ、あのお、あなたルシファーさんですか？」

吊り上がった瞳でルーファスを睨む大魔王（怒）。

「ここどこなの？」

ツインテールを揺らしながら、女の子（もしかしたら大魔王）は、グローブを嵌めた手でルーファスの胸倉に掴みかかっ



た。

「なんでアタシここにいるの!? なに拉致監禁されたわけ、ちよーウザイんだけど」

「（なんか怒ってるっばいぞ。いや、パニック状態か？ しかも僕のこと誘拐犯扱いしてる？）あ、あの、その、ここは私の家の地下室でして……」

「やっぱり誘拐犯！」

怒りの鉄拳炸裂！

少女のパンチがルーファスの顔面に炸裂した。

吹っ飛んだルーファスは鼻を押さえながら怯む。

「ちがつ、違う、そんな大それた真似、私にはできないよ（完全に勘違いされてるよ）」

「ここどこ？ アンタなにっ？（マンホールに落ちたとこまで覚えてるんだけど）」

「私の名前はルーファス、ルーファス・アルフェラッツ。ここはアステア王国の王都アステア。日時までついでに言っただけだと、十三月六日サラマンダー」

「十三月ってなにっ!? うるう年の親戚かなんか？」

「……ええっと、時間もついでに言おうか？」

袖を少し捲り上げて、ルーファスは腕時計を確認して言葉を続けた。

「午後六時十三分二五秒だよ（あつ、そろそろ夕飯の支度しなきゃ）」

「わかんないし、バカじゃないの！」

10 大魔王ハルカ（改）

「わかんないって言われても……あなたルシファーさんですよ  
ね？」

「ルシファーって誰だか知らないけど、アタシの名前はハ・ル  
・カ！」

「やっぱりというか、召喚は失敗だった。ここまで粘ったルー  
ファスはエライ。」

「（ぐわーっやっぱり。生贄を人の代わりにマグロの刺身にし  
たのが原因かな。せっかくふんばつしてマグロにしたのになあ  
……赤身だけど）」

当たり前である。召喚の手順は正しに越したことはない。  
しかも、マグロの刺身（赤身）を生贄にする魔導師なんて前代  
未聞だ。たぶん。マグロの値段が高かろうが安かろうが大し  
た問題じゃない。どちらにしろ大失敗するのだから。

眼を尖らせながら辺りを見ているハルカに、ルーファスは重  
たい声をかける。

「あゝっ、立ち話もなんだから、上の部屋でゆっくり話そう……  
か？（生まれてこの方、召喚術がまともに成功したためしがない）」

なのに、大魔王を召喚しようとしたルーファスはエライ。い  
や、無謀だ。

そんなこんなでハルカは一階に案内されたのだった。

聖カツサンドラ修道院の宿舍で、空色ドレスが振り返った。  
中性的な顔に浮かぶ二つの瞳はエメラルドに輝き、その奥には

五芒星が宿っている。

「イーマの月、アースより来たれり者……（ふにふに）」

空色ドレスの麗人は窓の外を眺めていた。

空は青ではなく、日が落ち闇に染まり、箒星が次々と尾を引いて流れていた。

古来から箒星は厄災の象徴。

空色ドレスの麗人が見つめる空の彼方、同じ空を見ていた黒髪の女性は嫌そうに呟く。

「だからウチが停電になったのか……ふふっ」

黒髪の女性は箒に跨り、再び夜空をバツクに飛びはじめた。

また別の者を導かれるように空を読んでいた。

「イーマの月にアースから来たれり者……」

その言葉を発したのは、ボンテージ姿の女に抱かれた幼児だった。

幼児は口におしゃぶりをしゃぶっているが、その口ぶりも表情も妖々しく大人びていた。

そして、幼児の瞳の奥には六芒星が輝いていた。

「さてエセルドレーダ、行くとするか」

エセルドレーダと呼ばれた女は、背に力を込めて蝙蝠のような羽を生やした。

「御意」

と短く従い、幼児を抱いたエセルドレーダは空に舞い上がった。

空を流れる箒星は、何を暗示しているのだろうか？

第2話 へっばこ魔導士ルーちゃん

ルーファス宅の一階に到着したハルカ。

そこでハルカが目当たりにしたモノは！！

「……ふ、腐海の森？（スゴイ散らかってる。アタシも片付け  
苦手だけど、ここまでじゃないしー）」

「足もと気をつけてね、すごく散らかってるから。その辺りに  
座って」

「えっ？（座る？ 何に？）」

床に散乱するアイテムの数々が大地を創り、山を創り、森を  
創り、天地創造 まるでここは箱庭レベルの世界縮小模型を  
見ているようだった。

ちなみにルーファスが指さしたのは、巨大なガレキの山。

なかなか座らないハルカを見て、少し考えたルーファスは発  
掘作業を開始。ソファを掘り当てると、改めてハルカに席を勧  
めた。

「どうぞ、どうぞ座って」

「う、うゝん」

再びハルカの前で発掘作業をはじめると、今度はハ  
ルカの向かい側で一人がけのソファを掘り当てた。遺跡発掘か、  
宝探しの勢いだ。

「どっこいしよ」

年寄り臭い声を出して座ったルーファスが、すぐにハルカの瞳を見つめるようで見つめない。本人はハルカの顔を見ようと努力しているのだが、眼が好き勝手に泳いじやっている。

「あー、えーっと、なにかから話したらいいのかな（うわあ、僕のことずっと見てるよ。眼で殺されそう。早めに謝ったほうがいいかなあ）」

「ここどこなの？　なんかわかりやすく言ってくんない？（わけわからなくてムカつくし、あーっもおサイテー）」

「ここはアステア王国にある私の家。あなたは私に召喚されてこの場所に……（間違つて来ちゃったみたい）」

完全に床を凝視するルーファスの顔を、キレ気味のハルカの眼が睨む。

「召喚ってどういうこと、意味わかんない」

「つまりですねー、他の場所からのこの場所に召喚したわけなんだけど（召喚ってポピュラーな言葉だよな、なんで通じないの？）」

「わかんないし、バカじゃないの！（召喚ってアニメとかのアレ……なわけないじゃん、ありえないしー、こいつバカ？）」

「あー、えっと、だからね。大魔王を召喚しようとしてですね。そのね、だからね、間違つてさ……召喚しちゃった、えへっ」

ルーファスの爽やか笑顔炸裂！

が、その口元はブルブル震えていた。ムリしちゃってるの丸わかり。

「大魔王って意味不明だし。てゆか、アンタの格好なんなのこ

スプレ？ アタシ変態コスプレ野郎に誘拐拉致監禁？」

「だーっただだだーから違うって、ごめんね、間違っつて召喚しちゃったんだってば。ごめんね、ごめんね、ごめんなさい！」

ひたすら謝るルーファスは、そのままソファを飛び降りた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

ゴン、ゴン、ゴン！

ルーファスは土下座しながら、床におでこを強打していた。

痛々しいというか、イタイ人だ。

自虐傾向に走るルーファスを見ながら、ハルカは見下した態

度で仁王立ちしていた。

「謝ればいいと思ってるわけ？」

ハルカの爪先がルーファスの体を突付く。

なんかこれって、嬢王様とマゾ男の構図だ！

「ごめんなさい許してください。根っからのダメ人間なんです、生まれてきてごめんなさい（ああ、母さんごめんなさい）」

「だったら死ね」

「うわあ〜ん！」

ゴン、ゴン、ゴン！

再び頭を床に打ち付けるルーファス。釘を打てそうな勢いだ。激しさを増す日曜大工の音色に、だんだんハルカも不安を覚えてきた。

「あのさー、ウザイからもうやめてくんない？」

真っ赤なおでこを上げたルーファスは鼻水も垂れ流していた。

「許してくれるの？」

「許すもなにも、まだなんかよくわかんないし。今回は特別に許してあげてもいいかなあーとか」

プイッとハルカはそっぽを向いて、ルーファスから視線を外した。なぜかハルカは恥ずかしそうな顔をしていた。

そのハルカの表情を見逃さないルーファス。

「（その表情……萌えだ……だ、だめだ、また出会ったばっかのコに恋しそうになっちゃった）あーっ、紅茶いれてくるね。

ちよつと待ってて（人を好きになるクセ直さなきゃなあ）」

ルーファスは土下座でずれたメガネを直し、仕切り直しにキツチンに姿を消してしまった。

ひとり部屋に残されたことで、ハルカは周りをぼんやり見つめながら冷静さを取り戻してきた。

「（全部悪夢なのかも。アイツ変な服だし、アステア王国ってどこそれ。てゆーか、普通に言葉だつて通じんのオカシイ）」

マンホールに落ちた記憶まではある。そのあとは気付いたらカビ臭い地下室だった。

ま、まさか下水道に落ちて知らない国まで流された!?

なんて非現実的なことはないだろう。

しばらくして、ルーファスが湯気の薫るカップをトレイの乗せてやって来た。

「熱いから気をつけてね」

「うん、ありがと」

ハルカは無愛想にカップを受け取り、入念に息を吹きかけながら一口飲んだ。

次の瞬間。

ブフォーッ！

ハルカの口が紅茶の噴水を吹き上げた。

「マズーっ！ 砂糖と塩間違えたんじゃないの、バカでしょ！」

紅茶だと思ったものが紅茶の味ではなかった。油断した。真後ろから鈍器で撲殺されるくらい不意打ちで不覚だ。

唇から滴る紅茶を手で拭いながら、ハルカはふと目線を上げた。

そして、凍りつく。

レンジでチン

ハルカは解凍された。

「うはっ、マジごめん！」

紅茶を噴出してしまったこともそうだが、それによって引き起こされた悲劇が重大だった。

顔をびっしょり紅茶で濡らしたルーファスが、肩を震わせて引きつった笑みを浮かべている。怒っているのではない。ネジが外れて壊れているのだ。

「へっへっへっ……ぜんぜんへーき。えへへ、僕みたいな奴は紅茶なんかで顔を洗って出直したほうがいいから、気にしないで（紅茶にもカテキン入ってるっけ。カテキン効果で雑菌退治。あはは、僕は雑菌か……）」

「……紅茶がマズイのが悪いのよ、アンタのせい」

「それは僕の過失だよ、あはは（いつも砂糖と塩の容器間違



えるんだ）」

「もーしょーがないなあ。拭いてあげるから顔出して」

そのままハルカは、濡れたルーファスのメガネを取った。

「……マジ？」

「どうかしたの？」

メガネを取ったルーファスの顔を覗きこむハルカ。

「（……イケメン）」

ハルカは頬を桜色に染めて、そつぽを向いてしまった。

そつぽを向かれたルーファスは、すぐにハルカからメガネを奪い取って掛け直した。

「はあ、みんな僕の顔を見ると、なぜか顔を背けるんだ。そんなにヒドイ顔なのかあ、ふふふっ」

メガネを掛けたルーファスを再び見るハルカ。分厚いメガネで、ボサボサの髪を結わいた冴えない男。

「そうよ、アンタなんて別に……その……なんでもないんだから！」

メガネを掛けたルーファスには、かなり強気の態度だ。

ハルカは脳裏から“記憶映像”を消すために、駅前でもらったポケットティッシュを取り出し、力いっぱいゴシゴシはじめた。

拭かれているルーファスはなんか言いたそう……。

「あ、あのさ（痛い）」

それでもハルカは手を止めようとしなかった。なにかに取り憑かれている勢いでゴシゴシ。

「よし、これでオツケー」

腰に手を当ててハルカは満足げにしている。

ティル掃除でもする勢いで拭けば、紅茶は一滴も残っていないだろう。

しかし！

ルーファスの顔はティツシユのカスでスゴイことになっていた。

顔にティツシユカスを付けたまま、急にルーファスは真顔になつた。

「そういえばさ、ハルカつてどこから来たの？」

「日本だけど、それがなに？」

「ん？（ニホンつてどこだろう）」

「なんで首傾げるわけ、地球とでも言えばいいのウチュー人さん？」

「チキュウ？（ニホンという国のチキュウつて都市？）」

「はあ、なんで通じないわけアンタバカ？ 英語だったら通じるの、アースよアース」

その発言を受けてルーファスは動きを止めた。そして爆発するように身を乗り出した。

「……な、なんだつて!?（アースつてアースのこと!）」

驚きで顔がぶつ飛ぶ勢いで、ルーファスは唾を飛ばした。

ティツシユのついたままの顔で、ルーファスはグワつとハルカに詰め寄る。

「アースというのは伝説の楽園の名だよ。でもね、楽園というのは名ばかりで、大きな戦争のあとにそこは地獄よりヒドイ場

所になつたらしい。ま、全部おとぎ話だけどね」

「地球滅びてないし、だつてアタシここにいるし。地球じゃない星にいるわけアタシ？ ばつかじゃないの」

「一から説明しようか？ この世界はガイア、今私たちがいるのはウーラティア地方のアステア王国の王都アステア」

「そんなことどーでいいから、早く家に帰しなさいよ！」

ハルカはルーファスの胸倉を掴んだ。

ルーファスの視線の先で、握られた拳が震えていた。今にもあの拳でグーパンチが来そうだ。

「だ、だからね帰してつて言われても。間違つて召喚したとはいえ、契約内容が生きている場合は、その契約を果たさないとあなたは帰れないわけで……（この子だったらルシファアの代わりになるかも）」

「どうしたら帰れるわけ？」

「大魔王を召喚しようとして間違つたつて言つたつけ？」

「それがなに？」

「その召喚した理由つて言うのが……世界征服なんだよねえ、あはは」

「なにそれ、いい歳して子供みたい……ばつかじゃないの」

子供の夢ならまだしも、十七にもなつて世界征服を本気で考えるなんて、脳内が子供だ。それとも、よほどの自信が……ルーファスにあるはずがない。

「子供みたいで悪かったですねー。私はこれでも真剣に世界征服をして、世間を見返してやろうと思つたんだよ」

「じゃあアタシが世界征服でもすれば帰れるの……バカらしい」

「……たぶん（あんまり後先考えてなかった）」

「たぶんじゃ困んのよバカ！」

ついにグーパンチ炸裂！

鼻血をピューと吹きながらルーファスは側倒した。

猛烈に鼻血を垂らしながら、ルーファスは真顔でハルカを見つめた。

「ごめんね、私のせいでこんなことになって。私が責任をもつて君を帰してあげるから、心配しないで」

鼻血ブーしているが、その真剣な言葉にハルカは胸を打たれた。

そして、膨れっ面をしながらも、目頭が熱くなっているのを感じた。

ルーファスの手がハルカの顔にそっと伸び、瞳から零れ落ちた一滴を優しく指で拭った。

「ごめんね」

「気安く触らないでよ」

ハルカはルーファスの手を払いながらも、その行動は強がっているようにも見えた。

ルーファスは俯き、静かに言葉を漏らした。

「でもね……実はさ……ぜんぜんあなたを帰す方法がわからないんだよ。アースから来たなら、私には絶対ムリかなみたい……あはは」

急に態度を変えて軽く笑い出すルーファスに対し、ハルカの  
中で突発的な憎悪が生まれた。

「シネツ！」

瓦礫の山からハルカは魔導書を取り、そのまま大きく振りか  
ぶり風が唸る。

ゲオオオオン！

魂の剛速球だあああっ！

分厚い本がルーファスの顔面に炸裂した。

顔を変形させながらルーファスはぶっ飛び、そのまま意識が  
ブラックアウトしてしまった。

第3話 へっばこ殺人事件簿

空から箒に乗って舞い降りた妖女は、長髪を風に揺らし、ついでに胸のファスナーから覗く巨乳も揺らした。

ライダースーツとドレスを組み合わせたような姿。魔女プラス走り屋だ。

妖女が降り立ったのはルーファス宅の前。ノックもせずに玄関をそつと開ける。

家の中に不法侵入して、普通の歩き方なのに足音を立てていない。まるで猫足だ。

ふと、足を止めて妖女はニヤリとした。

物陰から妖女は見た。

部屋の中では、ハルカが顔に焦りの色を走らせていた。猛ダツシュだ。

ハルカの視線の先に転がるマナモノはルーファス。ピクリともしていない。

「……死んだふり、死んだふりしてるんでしょ！」

被害者はルーファス、犯人はハルカ、凶器は分厚い魔導書。

「不可抗力だし、無実だし、ねえ返事しなさいよ！」

ハルカは床に両膝を付き、ルーファスの身体を揺さぶった。

「起きて、ほら名前……そうルーファス、ルーファス起きて！」

返事がない。気を失っているようだ。

焦りに焦ってハルカはルーファスの上半身を起こし、肩をガシツと掴んでルーファスの身体を揺さぶる。

ブルブル、ブルブル局地地震に襲われるルーファス。首がガツクンガツクン揺れている……骨折れてませんか？

「返事しろってばバカ、死ね！ ……死んじゃダメだ、生きて！」

第10話 今日からキミが神様だ！

ハルカは思っ。

「（殺っちゃったかも……ショックー）」

ハルカ大ショック！

そんな光景をずっと影から見守っている謎の妖女。人の秘密を見てしまったときの優越感。そんな艶やかな笑みを浮かべている。

ハルカは誰かに見られているとも知らず、絶望感ですーっと身体から力が抜け、支えを失ったルーファスの身体が床に転がった。

ゴン！

床に後頭部強打。

「（……殺っちゃった）」

灰色の世界が辺りを包む。

ハルカはまばたきすらせず、首だけをゆっくりと機械的に動かす、床に転がるルーファスを見下ろした。

「……るーふあす……生キテル？」

ハルカの呼びかけに対して、返事がない……ただの屍のようだ。

「あああああッ！ 殺っちゃった！  
叫びながらハルカの脳内がフル回転。」



「どうしよう、どうする、なにが!？」

いつ（When）

「今日…」

どこ（Where）

「この家！」

誰が（Who）

「アタシが！」

なにを（What）

「ルーファスを殺した！」

なぜ（Why）

「不可抗力で！」

どのようにして（How）

「分厚い魔導書で殴打！」

なんてこつたい！（Oh My God!）

ハルカは完全にパニックっていた。

「（どうするアタシ……!?!）」

選択肢のカードが出るわけもなく、困り果てるハルカ。

しかし、ここでピカーンと脳細胞が、ハルカ的に完璧な作戦を考え出した。

作戦はこうだ。

まずハルカちゃんは物置に行きます。

そこでスコップを見つけて出して庭に行きます。

庭にいたら大人がひとり入れる穴を掘ります。

掘った穴に先ほど殺害してしまったナマモノを投げ入れましよう。

そしたら、土をかぶせてあげましよう。

作業を終えたら、手を綺麗に洗い、凶器の魔導書を焼き捨てて証拠隠滅しましよう。

全部の過程を終わらしたら、何食わぬ顔をして紅茶でも飲んで一休みしましよう。

「か、完璧！」

ぎゅつと拳を握り締め、ハルカは眼を輝かせると、さっそく作戦実行に移った。

まずはスコップの入手だが、これは案外簡単に見つかった。

次は被害者Rの移動だ。

身動き一つしないRの足首をガシツとつかみ、ハルカは力いっぱい気持ちいっばいいいぱい、とにかく強引にRの身体を引きずった。

「……重いし」

そのまま廊下を進もうとすると、ハルカの手伝に伝わる振動と、鈍い音が聴こえてきたけど、気にしない、気にしない。だって相手は死んでるんだから、エヘッ

「にやはは、早く穴掘んなきゃ」

先を急ぐハルカの真後ろで人の気配がいた。ルーファスではない、別の気配だ。

《見たぞ……ふふふふつ》

低い女性の声に心臓が飛び出るくらい驚き、ハルカはすぐに真後ろを振り向く。

「誰っ？」

《貴様なに者だ？》

黒髪の妖女は手に箒を持って、蒼白いかに浮かぶ唇で艶笑している。

その姿を見てハルカは思った。

箒を持ったミステリアスな女性は。

「家政婦さん！」

家政婦を見た。いや、見られた。

ルーファスを運ぼうとしているところ、そして5W1Hによる犯行自白。

全てを知られてしまった。

なんてことより、ハルカは別のことで、もっとパニックしていた。

言葉がわかんない！

そう、相手の言葉がなにがなんだかサツパリなのだ。

「ふうーあーゆうー？」

《なにを言っているのだこの娘は》

「日本語は通じますかあ？（ぜんぜん通じてないかも）」

《ふむ、言葉がわからぬようだな。仕方ない》

謎の妖女はハルカの傍らに近づくと、そのまま顔をハルカの耳とに近づいた。

艶やかな妖女の唇から、熱い吐息がハルカの耳に吹きかけら

れる。

「はう」

敏感な部分を刺激され、膝がガクンとなったハルカの身体を  
すぐさま妖女が支え、そのまま顔と顔が重なる。

ぶちゅっ！?

女性の濃厚なちゅーがハルカの唇に覆いかぶさった。

唇を奪われたハルカは驚き、妖女の身体を突き飛ばして、唇  
を拭って後退りをした。

「にや、にやにするの、変態！」

「術をかけたただけだ案ずるな、妾にそっちの趣味はない」

「あつ、えつ、言葉がわかる！」

「だから術をかけたと言ったであろう（この娘、頭が弱いな…

…ふふっ）」

実はあの熱い吐息は言語を理解できるように、キスは言語を  
話せるようにする術だったのだ。

まだまだキスの動揺を隠せないハルカ。顔を真っ赤にしなが  
ら、うつむき加減でクチビル泥棒に尋ねる。

「アンタ……アナタ誰？」

「人の名を尋ねるときは、自分の名を先に名乗れ。だがな、妾  
から乗ってやらないこともない。妾の名はカーシャ」

「……カーシャ。アタシの名前はハルカ」

「おまえ、ルーファスの彼女か？（ま、まさか、へっぽこ魔導  
士に彼女ができる……なんてな、ふふっ）」

「ち、違うし！ てゅーか、ルーファスが急に倒れちゃって、

んでアタシはこれから病院に連れて行くのかなって（埋めようとしてたなんて口が裂けても言えない）」

「案ずるな、弱っているが生命反応が視える。放置しておけば、そのうち意識を取り戻すだろう。それよりもだ」

カーシャが音もなく動き、ハルカの眼前まで迫った。音はな  
いが巨乳は揺れる。

「おまえ、なぜルーファスの家にいる？（ついに女に飢えたルーファスが少女拉致監禁か？）」

「間違つて召喚されたらしくって（アタシもよくわかんないけど）」

「（さすがはルーファス、間違つて召喚か）それで、どこから来たのだ？」

この質問にハルカは少し戸惑ったが、正直に答えることにした。

「……アースから、かも」

「アースからだと!?（……のはずがないな。ただのパンク姿の不良娘だ）」

「だから、かもつて言つてんじゃない」

「アースからというのは嘘だな。おまえは頭の可笑しい妄想癖のある娘だ（そうとしか考えられない）」

「アタシのことバカにしてんの!」

「しているが、そんなことは妾にとってはどうでもよいことだ。おまえがこの辺りの者ではないのは、見ればすぐにわかる。それだけが事実だ」

「てゆーか、家に帰りたんだけどー。帰り方がわからなくて困ってた」

「……ふふふ、おまえが本当はどこから来たかは知らぬが、妾もおまえが帰れるよう協力しよう（ルーファスがまたおもしろいことをしてくれたようだな。アースから来た娘、成り行きを見なければ損だな……ふふっ）」

妖艶な笑みを浮かべたカーシャは内心ウキウキ気分だった。ルーファスの近くにいれば、人生に退屈せずに過ごせる。それがカーシャの持論だった。

未だ床で気を失っているルーファスの腹に、カーシャの強烈な蹴りが炸裂した。

「ぐっ！」

「起きろルーファス魔導学院に行くぞ」

腹を押さえて床でもがくルーファス。脳が活性化する前にカーシャが襟首を掴み、そのまま無理やり立たせた。

状況の把握できないルーファスが喚く。

「腹を蹴ったのカーシャだろ！」

「そんなことはどうでもいい。それよりも、まずはお茶と菓子を出せ」

「はあ？」

「一休みしてからクラウドス魔導学院に行くぞ」

「はあ？」

「ハルカのためだ。魔導のことなら、まずはあそこに行くのがいいだろう」

「はあ？」

「とにかくまずは妾に茶を出せ」

「はい、わかりました」

キツチンに向かおうとしたルーファスがクルツと反転。

「ちよつと待つてよ、今から魔導学院に行くつて、夜だよ？」

「うむ、それはそうだな」

納得して頷いたカーシヤは、ハルカの腕をガシつと掴んだ。

「ではこの娘を借りていくぞ」

なにがなんだかハルカは目を白黒だ。

「なんで、なに、意味不明！」

「いいから来い、ふふ」

不敵な笑みを浮かべてカーシヤはハルカを連れ去った。

部屋の残されたルーファスがボソリ。

「……カーシヤなにしに来たの？」

お茶も飲まずに帰って行ったカーシヤ。

部屋は嵐が過ぎ去ったように静けさに包まれていた。

#### 第4話 悪魔の借金取り

その日の内にハルカは帰って来なかった。それどころかカーシャと連絡がつかない。まさか、借パクかつ！

そんなことで夜は明け、今日もいつものように学校がある。

ルーファスは乗合馬車で学院まで通い、いつものように教室の座席に着いた。

いつものよーな光景だ。

キンコンカンコン鐘が鳴り、巨乳を揺らしながら教員が入ってきた。

教壇に立ったのはカーシャだ。

「さて、今日はクラスに新しい仲間が増えるぞ」

季節外れの転校生。カーシャはその名を呼んだ。

「さあ、入って来いハルカ」

教室に入ってきたのはハルカを見て、ルーファスは啞然とした。

ネコミミ装着！

入ってきたのはハルカに間違いないのだが、頭にはネコミミ、口にはパーティーグッズの人工クチビル。そして、ちようちんアンコウみたいないなアンテナが頭に生えていた。

「私ノ名前ハはるかデス」

自己紹介がコテコテのロボットだ。



ハルカになにがあつた？

どんな改造手術を受けたんだ？

自己紹介を済ませたハルカは硬い動きで歩き出した。直角移動をして、ルーファスの横の席に座った。

ルーファスは驚きながらハルカの横顔をじーつと眺めた。

「……ハルカ？」

返事はなかった。ハルカは瞬きもせずに教壇をじつと見つめている。

「ハルカ、なにがあつたの！」

ルーファスが声をあげると、パチコーン！

カーシャの投げたチョークがルーファスのおでこにヒットした。

「黙れルーファス。というわけで朝のホームルームは以上だ」

カーシャはさっさと教室を出て行ってしまった。

慌ててルーファスはハルカの手を取り、カーシャを追って廊下に出た。

「カーシャ待って！」

めんどくさそうにカーシャは振り向いた。

「なんだ？」

「なんだじゃないだろ、ハルカになにしたんだよ？」

「見てのとおりだ」

ネコミミ、クチビル、ちょうちんアンコウ。

「私ノ名前ハはるかデス」

見てのとおり変だ。

「見てのとおりじゃないでしょ、なんでネコミミが生えてるのさ」

ルーファスが詰め寄るとカーシヤはめんどくさそうに答えた。

「耳は共通語の翻訳機だ。唇は共通語を話すためにある」

「アンテナは？」

「さて……知らんな」

とぼけた！

絶対なんかあるぞアンテナ。

ルーファスはハルカのアンテナを掴んだ。

「このアンテナ明らかに怪しいでしょ、ハルカになにしたのさ！」

勢い余ってルーファスはアンテナを引っこ抜いてしまった。

ハルカが急に瞬きをして、目をパチクリさせた。

「……アタシ……ここどこ!?」

声をあげて辺りを見回すハルカ。

カーシヤは舌打ちをする。

「チツ……（洗脳が解けたか）」

ハルカはなにがなんだかサツパリだった。カーシヤに連れ去られたあとの記憶が、プツツリサツパリ抜けていた。

「……思い出せない」

思い出そうとすると頭が重くなる。

ハルカはルーファスの襟首に掴みかかった。

「ねえ、アタシになにがあったの！」

「私に訊かれても困るから……カーシヤに訊いてよ」

ルーファスの視線を追ってハルカはカーシャを見た。

「アタシになにしたの！」

「掻い摘んで説明するとだな、今日からおまえはこの学院の生徒だ」

「ハア？」

余計に意味がわからない。

仕方なさそうにカーシャが補足。

「つまりだ、妾が公文書偽造しておまえを当学院に裏口入学させたわけだ」

だからなぜ？

悩むハルカを放置して、カーシャの背後に忍び寄り二つの影。

「聴きましたよカーシャ先生、なあロス？」

「おう、すっかり聴いたぜオル」

カーシャが振り向くと、そこには二対の生徒が立っていた。

赤い魔導衣と青い魔導衣を着た双子の兄弟。風紀委員のオル  
&ロス兄弟だ。

オル&ロスは短いロツドを構えた。

「我らは風紀委員」

双子のステレオサウンドだ。

「学院を守るため、我ら兄弟は特権を交付されている。不正入学を耳にしたからには、許さないぞカーシャ先生！」

廊下に駆け抜ける緊迫した空気。

周りにいた生徒たちがそーっと教室に非難をはじめ。

カーシャの口に浮かぶ冷笑。魔力のこもった黒瞳が風紀委員

を凝視した。

「おまえら小僧に妾が倒せると思うてか？」

勝負はすでに決まっていた。

カーシャに凝視されたオル&ロスの身体に変化が起きた。

見る見るうちに身体が縮み、短いピンクの毛が身体を覆った。

「ブヒッー！」

あっという間に、オル&ロスはピンクの子豚に変身してしま  
った。

ブタに変えられた双子は、ブヒブヒ鼻を鳴らして逃げていっ  
た。負け犬ならぬ、負けブタの遠吠え。見事なやられ役だ。

相手に攻撃の隙すら与えずに勝利。

しかし、次なる気配がカーシャに迫っていた。

「おはよう、カーシャ先生」

耳に張り付くような陰湿な男性の声。

そこには鏡や羊皮紙や宝玉やら、魔導具をジャラジャラ身に  
付け、肌まで浅黒の黒尽くめの魔導衣姿が立っていた。

黒魔導教員ヨハン・ファウストだ。

「私のクラスの生徒を可愛がってくれたようですねえ」

「（朝っぱらから、なぜこいつの顔を見なくてはならん  
だ）」

あからさまに嫌そうなカーシャは、隠し持っていた鉄扇を構  
えた。

この二人は学院でも有名な犬猿の仲。顔を合わせるたびにい  
ざこざを起こす。

その根底にある要因はこれだ！

「カーシャ先生に貸した一〇〇〇ラウル、返していただけるなら、教え子にしたことを水に流しましょう」

「知らんな、おまえに金など借りた覚えなどない（妾は決して認めんぞ。認めたら、負けだ）」

絶対に借りた金を踏み倒す気らしい。

「（あくまでシラを切るつもりか）返済期限が五年近くも過ぎていることは、再三申し上げているのでご存知ですね？」

「記憶にないな（五年近くもネチネチ器が小さいぞ）」

こうやって五年近くもの間、カーシャはファウストから借りたお金を踏み倒そうとしているのだ。

ファウストが腰の羊皮紙に手を掛けた。

「記憶になくとも、この際宜しい」

「ほう、なにをする気だファウスト？（ファウストのManaが上昇している。なにか仕掛けて来るな）」

Manaとは魔法を使うときに発生するエネルギーのことだ。

「一〇〇〇ラウルを返さぬというのなら、契約の名のもとに冥府に送って差し上げますよ」

「（たかが一〇〇〇ラウルで目くじらを立ておって）」

向かい合う二人の間に電気を帯びたピリピリした空気が流れる。

緊迫と沈黙。

カーシャVSファウストの構図がわかりやすくできあがってしまった。いた。

激しい戦いが繰り広げられようとしていた！

教室に避難した生徒たちの中に、ハルカも混ざっていた。ちなみにネコミミ&クチビル装備だ。

廊下側の窓から様子を窺う。

「なんかスゴイ展開になりそう」

魔導士でもない凡人のハルカに、どーすることもできない。たとえ魔導士だとしても、二人の戦いを阻止するのは難しいかもしれない。学院の生徒たちは腰が引けている。

ファウストの身体からは、悶々とした黒いオーラが発せられている。その手に持った羊皮紙の契約書が、風もないのに国旗のように揺れた。

カーシャの身体の周りに浮かぶ蒼いマナフレア。空気が氷結し、学院の廊下に白い霜を下ろした。

物陰からルーファスはカーシャの冷笑を見て、背筋がゾツとする思いだった。ルーファスが決して口外してはいけない史実。

旧支配者 氷の魔女の正体。

揺れる契約書をファウストがカーシャに突きつける。

「カーシャ、早く一〇〇〇ラウルをお返しなさい」

「借りてもないのに返せるか！」

カーシャはキツぱりハツきり断言した。

嘘は認めたが最後。

これがカーシャの信条なのだ。

契約書の一節にはこう記されている。『契約を破りし場合は

魂を持って償う』と。それはつまり、契約を破ったカーシャは殺されちゃうということだった。

契約書にただならぬ邪気を感じ、カーシャは 氷の魔女王ならぬ発想をした。

「……うむ（焼くか）」

氷の魔女王 が“炎”を使う。この時点で反則ワザっぽい  
が、“焼く”ということは契約書をなかつたことにするという  
意味だ。そう考えると、もつと反則ワザだ……というか、セコ  
イ。

カーシャの右手が空を薙いだ。

その手から放たれた炎の玉が、契約書を焼き尽くそうと飛ぶ。  
しかし、その間に謎の障害物が出現。

「ちよつと二人とも止めてよ！」

謎の障害物 ルーファスに炎の玉が見事ヒット！。

「あちいっ！」

ルーファス炎上。炎の玉はルーファスの服に引火した。

すぐさまカーシャが魔法で水を放射して鎮火させた。

シューっという音を服から立てながら、立ち上がるルーファ  
スを見てカーシャが小さく呟く。

「チツ……外したか（契約書を燃やしてしまおうと思ったのだ  
が）」

ここまでくれば言つまでもないが、カーシャは自己中である。  
「契約書を燃やそうとしましたねカーシャ？ 契約書により制  
裁を下しましょう。出でよ、闇の眷属よ！」

悪魔の笑みを浮かべたファウストの持つ契約書から、黒い影が呼び出された。

威圧感を放つ存在。それはデビルだった。契約を破った制裁として、契約書に宿りしデビルが、この世に召喚されたのだ。

赤黒い筋肉質なボディに獣の頭部を乗せたデビルは、金色に輝く眼でカーシャをギリリと睨みつけた。きつと強そうだ。

だが、カーシャが負けを認めるはずがない。断固として認めない！

冷めた瞳でデビルを一瞥したあと、すぐに口元を歪ませた。危険を察知したルーファスはしゃがんだ。彼の判断は正しかった。

カーシャの口が言霊を紡ぎ出す。  
「ホワイトプレス！」

氷系の高位魔法をぶつ放した。カーシャは学院内 しかも廊下で強力呪文をぶつ放したのだ。

ブオオオツツツ！  
濃縮された吹雪がデビルを凍らす。おまけにルーファスの心

も凍る。

周りの被害などを考えずにやりたい放題の子供の喧嘩かつ！  
「カ、カーシャ！ なにすんだよ！（死ぬかと思った！）」

だが、ルーファスの言葉なんてカーシャの耳に届かない。残像をその場に残しカーシャの姿が霞み消えた。

身動きひとつしない氷の彫像と化したデビルの前にカーシャが立つ。

「ふふ、儚く散れ！」



巨乳をバウンドさせながら、カーシャの回し蹴りが炸裂！  
角度によってはパンチラだったかもしれない！

粉々に砕け散るデビル。散った氷の結晶が煌くその先で、フ  
アウストは微笑していた。

「なかなかやりますね」

舞い散る結晶の中、カーシャは冷笑を湛える。

「もう終わりか？」

「いいえ、カーシャ先生が死ぬまで、制裁は続きますよ。早く  
一〇〇〇ラウルをお返しなさい（ただが一〇〇〇ラウルと言え  
ど、契約を破った者は許しませんよ）」

「借りた覚えなどない（こいつ、ただが一〇〇〇ラウルで妾を  
殺す気か）」

「こんな足踏み状態のやり取りが、“五年近く”続けられてい  
るのだ。」

二人のトンデモ魔導士が戦いを繰り広げる中、教室の中も危  
ないと判断したルーファスが、啞然としているハルカを連れ出  
そうとしていた。

「ハルカ逃げよう、ここも危ない」

「あの二人いつもあんななの？」

「そうだよ、カーシャったら早く一〇〇〇ラウル返せばいいの  
に」

「ねえ一〇〇〇ラウルって高いの？」

「長い因縁と壮絶なバトルの根底にある一〇〇〇ラウル。その  
通貨価値とはいかほどか？」

「ーラウルチョコが一〇〇〇個買える（一〇〇〇個も食べたら鼻血ブーだなあ）」

「例えが悪い（ーラウルチョコって五円で売ってるチョコみたいなのかな？）」「

「じゃあさ、うめえぼうが五〇〇個買えるとか（うゝん、これも食べきれないな）」

「だから、わかんないってば（うめえぼう……これも聞いたことあるような名前）」

こんな呑気な会話なんてさて置いて、カーシャとファウストの戦いはとどまることを知らないようだ。

カーシャは両耳の蒼い宝玉のイヤリングを外した。

「ふふ……ここままではラチがあかない（滅却してくれるわ）」

滅却！

刹那、カーシャの身体が蒼白き光を発しはじめた。その輝きは冷たく辺りを包み込み気温をグッと下げる。冬空の下でパンツ一枚になる体感温度だ。

そして、カーシャの瞳は黒から蒼に変わり、唇は赤から紫に、髪は漆黒から白銀に変わっていった。

廊下は完全に凍りつき、先の尖った氷柱が次々と飛び出す。

ハルカは絶叫しながら身を屈め、ルーファスは『つ』や『と』の形に身体を曲げて氷柱を避ける。この中でファウストだけが漆黒の炎を身にまとい平然と立っていた。

「なにをする気ですかカーシャ？（急激なマナの増加。クロウ

リー学院長に匹敵するかもしれない、危険だ」

カーシャ 砲準備OK！

氷の結晶　　マナフレアがカーシャの身体に集められていく。  
暴走しちゃったカーシャは誰も止められないのか？

「カーシャいい加減にしてよ！」

ドゴツ！

「ぐっ！」

ゴオオオツツツ！

天井に開いた大穴から青空を見える。今日もいい天気だ。

なんてことはさて置いて、なにが起こったのか説明しよう。

まず、カーシャは学院ごとふっ飛ばすくらいマナを溜めて  
撃とうとした。

それから、ルーファスが掃除用具入れから取り出したモップ  
で、カーシャの後頭部を強打。

そのときの効果音が『ドゴツ！』。

殴られたカーシャは『ぐっ！』と言ってバランスを崩しバタ  
ンと床に倒れた。

撃とうとしていた魔法は中途半端なまま、天井を突き破り上  
空に放たれたのだった。

以上説明でした。

床に大の字で倒れたカーシャの髪の毛の色は元の漆黒に戻っ  
ていた。打ち震えるカーシャはなにかを小声で言っている。

「……ル……ファス……（死！）」

気迫とともに立ちがるカーシャ。その目はキレていた。

凍りついた廊下に緊張が猛ダツシユする。

無言で妖艶な笑みを浮かべるカーシャの手が動いた。

動いた！

動いた！

そしてまた動いた！

カーシャの手から放たれる氷の刃がそこら中に突き刺さる。

ルーファスは紙一重で避けるが、明らかに刃はルーファスに向けて放たれている。

殺る気だ！

「カ、カーシャ、落ち着いて！（殺される！）」

「ふふ……（死！）」

キレちゃったカーシャの容赦ない攻撃は続く。狙われているのはもちろんルーファス。

なかなか的に当たらないことに業を煮やし、カーシャの意識はルーファスだけに注がれていた。その隙についてファウストが攻撃を仕掛ける。

「ダークフレイム！（魂をも焼き尽くせ）」

漆黒の炎が渦を巻きカーシャに襲い掛かる！ 瞬時にカー

シャは魔法壁を張る。

「アイスシールド！」

氷の壁がカーシャの姿を隠し、ダークフレイムの直撃を受けて碎けながら溶けてしまった。その先にカーシャの姿はすでない。カーシャは教室の中に逃げ込もうとしている最中だった。

教室内で身を潜めていた生徒たちを人質にする気だ。

ファウストもカーシャを追って教室に駆け込む。

これはチャンスだ！

ハルカがルーファスの袖を掴んで引つ張る。

「今のうちに逃げよ」

「そうだね」

「早く！」

「ハルカ危ない！」

「にやつ!?」 どっかから飛んできた氷柱がハルカを襲う。

ルーファスの身体がハルカを庇うように覆いかぶさった。

「くっ」

ハルカの前で歯を食いしばったルーファス。魔導衣の袖が裂け、腕に紅い鮮血が滲む。

「大丈夫ルーファス！」

「ハルカこそ平気？」

真剣な眼差しでハルカを見つめるルーファス。

「う、うん……（アタシのために……）」

「よかった」

ニッコリと微笑むルーファス。

モーソー！ トキメキ！ ロマンズ！

ハルカの瞳に映るルーファスは120パーセント美化されて輝いていた。

微かなトキメキが胸をくすぐる。

が、次の瞬間。

爆発音と一緒に飛んできたモップに後頭部を殴打されて、ル

「ルーファスは顔面から床に沈んだ。

「ルーファス……ダサッ！」

この辺りが、ルーファスがへっぽこと言われる由縁かも知れない。

ズバリ不幸体質。

第5話 きつとみんな変態なんです

ドーにかこーにか、意識朦朧のルーファスを引きずりながら、ハルカは戦闘地帯を逃げ出していた。

「どうしてアタシが変なことに巻き込まれなきゃイケナイの！」

「ごめん、全部僕のせいだ……僕が、僕が……うわあ〜ん」

泣き出すルーファス。

拳を握るハルカ。

「泣き止まないと殴るからね！」

「うわあ〜ん！」

余計に泣いた。

「泣くな！」

ルーファスを殴ろうとしたハルカの手がピタリと止まった。

誰かに見られている。

夜の静寂のような気配。その中に潜む闇の気配。そして、闇に浮かぶ星の気配。

廊下の先に幼児を抱いたボンテージ姿の女が立っていた。

泣き止んだルーファスの目を限界まで見開かれた。

「クロウリー学院長！」

「誰が？ あの女の人？」

羽を生やした女を指さすハルカの手を、グイグイとルーファ

スは動かして、抱かれています幼児の方に向けた。

「抱かれています方だよ」

「マジで、あのガキが!？」

稲妻のごとく影が走り、鋭い爪がハルカの首に突きつけられた。

「我が君をガキ呼ばわりするなど言語道断、万死に値するぞ！」

殺気立つ女を否めたのは抱かれていクロウリーだった。

「許してあげたまえエセルドレーダ」

「御意」

しつけされた犬のように、エセルドレーダはすぐに身を引いた。クロウリーの命令は絶対なのだ。

クラウス魔導学院、学院長アレクスター・クロウリー。学院長をいう職に就きながらも、生徒の前に姿を現すことは稀で、魔導研究や海外視察などで学院を空けていることが多い。その実力は世界でも五本の指に入ると云われるほどで、アステア王国では揺ぎなく一位の座を誇っていた。

幼児にしては大人びた表情。絵師が渾身の筆で描いたような眉、彫刻家が魂を込めた鼻梁、誰をも魅了する瑞々しく紅い唇、深い黒瞳はこの世の全て見据えているようだ。

が、口に加えたおしゃぶりがシュールで仕方ない。ハルカが装着している“クチビル”といい勝負だ。

クロウリーは地面に足を付け、一步一步ハルカに近づいた。他を圧倒する威圧感が、具現化して風となり吹き荒れた。



「この世界の者ではないな？」

言葉そのものに魔力がこもっている　　魅言葉。

ハルカは聴かれたことに頷いて返すことはできたが、声を発することはできなかった。そうさせない威圧感が、クロウリーからは放たれていた。

目の前の威圧感で隠されてしまっているが、傍らのエセルドレーダも色香とともに威圧感を放っている。

ハルカが少し視線をエセルドレーダに向けると、緋色の瞳が睨むようにハルカを見ていた。

身体を小さくさせながら、ハルカは一步下がって後ろを振り返った。

ルーファスの姿がない？

あった！

中庭の植え込みに身を潜めている。ハルカに見られていることに気づくと、ルーファスは頭をかいて笑いながら出てきた。

「こ、こんにちはクロウリー学院長先生（や、やっぱりこの人苦手だ）」

「ルーファス君、久しぶりだね。私の愛するローゼンクロイツとは仲良くしてくれているかね？」

「は、はい」

「その娘はルーファス君の連れかね？」

「は、はい」

クロウリーの深い黒瞳に緋色が差し、その眼に五芒星が浮かんだ。

命令を受けずともエセルドレーダは、どこからか古びた表紙の本を取り出し、それをクロウリーに手渡した。

手に持たれた本は自動的に表紙を開き、風でも吹いたようにページがパラパラと捲られた。

そして、とあるページで止まった。

クロウリーは口元を艶っぽく歪ませ、ハルカを射抜くほどに見つめた。

「君の名は？」

「あつと、ハルカ」

「どの世界から来た？」

「それは……アースから？」

クロウリーは自分の持っていた本のページをなぞる。そこは白紙でなにも書かれていなかったページだが、クロウリーが指でなぞった瞬間、記号が浮かび上がり輝きだした。

「イーマの月にアースから来たれり者、世界に」

続きは言わなかった。

クロウリーは途中で言葉を止め、本を閉じてエセルドレーダに渡した。

「今の古い預言書だ。宇宙の真理に比べれば他愛もない戯言が羅列されている。真に戯言なれば興味はない。言葉は力を持つて意味を成す。死とは復活だ。救世主とは善にも悪にもなる。わかるかね？」

意味不明だった。クロウリーは電波に違いない。どつからか電波を受信しているに間違いはない。きつと頭の可笑しな人なん

だ！

などと思っても、ハルカとルーファスは口には出さなかった。影のように寄り添うエセルドレーダをクロウリーは見上げ言

う。  
「知っているかね。悪魔界などの異界からきたものは申請書を出さなくてはならない。ここにいるエセルドレーダも悪魔であり申請書を役所に提出してある。だが、アースからきたとなれば認められないだろう。アースからきた者は災いをもたらす」

それが言葉の続きだった。

イーマの月にアースから来たれり者、世界に災いをもたらすであろう。

そうクロウリーの持つ預言書には書かれていたのだ。

この伝承は古くからあるもので、ガイア聖教のみならず、他宗教でも多く云われていることだった。

ふわつと宙に浮いたクロウリーは、同じ目線に立ったハルカの頬をそつと撫でた。

「アースからきたということが真実ならば処刑もありえる」

「マジで？」

ハルカが驚いて視線を泳がすと、なぜかエセルドレーダに睨まれていた。なんか知らない内に嫌われたらしい。

自然と足が後ろに動いてしまったハルカは、そのままルーファスの傍らに立ち、彼の魔法衣の袖をぎゅつと掴んだ。

そんなハルカの姿を見てルーファスは萌えた。

自発的に声を出せなかったルーファスは勇気一〇〇倍。

「ク、クラウス国王は聡明な方です。御伽噺を鵜呑みにして、ハルカを処刑になんてするはずがないですよ（声を出すために息をしただけで咳しそう）」

妖しげにクロウリーが笑った。

「ルーファス君はクラウス国王とも古い付き合いだそうだね。若くして王になった者には敵が多い。その御伽噺を信じる保守的な宗教家も多く存在する。この国にいる大司教も異質なモノを嫌う保守派だと聞いたぞ」

アステア王国で多く割合を占めている宗教はガイア聖教だ。ガイア聖教の保守派と進歩派の争いは、血を流すほどに激しく根深いものである。

王都アステアにも多くの保守派がいる。

その意味を理解したハルカは暴力的な恐怖を感じた。

「アタシはこの世界の敵かもしれない……だったらやってやるうじゃないのよ！ だってアタシのこと大魔王……うぐッ！」

ルーファスはハルカの口を押さえた。大魔王の召喚を試みて失敗しなんて言えやしない。

「大丈夫、大丈夫、この国の王は進歩的だから平気だよ。ハルカがどんな子かってわかってもらえば、絶対そんなことないから」

ルーファスは苦笑いで場を凌いだ。

なにか想いクロウリーは呟く。

「たしかに……」

クロウリーの指先が、自分でも気づかないうちに流れたハルカの涙を拭った。

「そのとおりだ。ルーファス君の言うとおり。現に悪魔であるエセルドレーダにもビザが発行され、職業につく権利も与えられている。悪魔とておぞましいものだけではない。美しい悪魔はいくらでもいる、ここにいるエセルドレーダのように」

エセルドレーダは雇い主と秘書という関係よりも、絶対的な忠誠心によってクロウリーに仕えているように思える。

ここでクロウリーがハルカにある提案を持ちかけた。

「私がこの子を匿おう。安全で不自由な暮らしを保障しよう」  
答えはハルカではなく、ルーファスが出した。

「いいえ、ハルカは私が責任を持ちます」

ボランティアや援助活動や社会福祉など、社会への貢献も多々しているクロウリーだが、魔導に関しては黒い噂が多々ある。それに実際に会ってみればわかる。傍にいただけでクロウリーの発する鬼気に当てられ、気分が悪くなって咽返りそうになる。魔導力が強すぎて、他者が影響を受けてしまうのだ。それは有害物質を大気に垂れ流しているのと、なんら変わらない。

歩く公害だ！

なんて思っても、本人を前にしては口が裂けて言えないし言わない。

ルーファスは一度うつむき、ゆっくりと顔を上げてクロウリーの眼を見つめ……ようとしたが、相手の眼力が強すぎて、眼は泳ぐし、舌がうまく回らない。

「実はハルカを召喚してしまったのは私です、失敗から召喚してしまったわけです、自分のせいだから自分で責任を取らなくてはいけないというか、私が責任を持って帰してあげると約束したから」

自分でも言葉が整理できないルーファス。感情だけが先走り、言葉がうまく出せない。ハルカを自分の世界に帰してあげたい気持ちは本物だった。

悔しそうに下を向いてしまったルーファスの耳元で、男とも女ともつかない声があった。

「なるほどねルーファス（ふにふに）。また魔導で失敗したんだね（ふっ）。しかも、前にも召喚術で悪魔に取り憑かれたことがあったよね（ふにふに）」

驚いたルーファスが声を上げた。

「ローゼンクロイツ、なんでここに!？」

この場にいた全員の視線が、空色ドレスを着た可愛い顔に注目された。

日傘を差し直射日光を避けるその人物は、白色と空色を基調にしたふわりとしたドレスに身を包み、耳が隠れるくらいの空色をしたショートカットの襟足を指でクルクル弄んでいた。

どこか中性的な顔立ちの不思議な魅力を持つ人物。それがルーファスの幼馴染みのローゼンクロイツだった。

「ボクがなぜ、ここににいるか（ふにふに）。それは人間の真理の追究に他ならないよ（ふあふあ）」

質問とは大きく的外した　人はなぜ存在するのか。なん

てことをローゼンクロイツが長々と語りだすのを前にルーファスが止めた。

「ごめん、私の質問が悪かった。今日も遅刻だね」

「うん、流れる雲と一緒に歩いていたら遅刻した（ふあふあ）」

「ウソでしょ？」

「そうだよ（ふあふあ）」

一瞬だけ人を小ばかにしたような表情をしたローゼンクロイツ。その表情もすぐに無表情に戻る。無表情が標準表情なのだ。ハルカの率直な感想。

「（ネジ外れてると思ったけど、実は腹黒い?）」

ローゼンクロイツの姿を確認したクロウリーは、横にいたルーファスを跳ね除けてローゼンクロイツに飛びついた。その顔は無邪気な子供だった。

「嗚呼、愛しの愛しのローゼンクロイツ。最近はなかなか私に顔を見せてくれないので心配していたよ」

発言は子供っぽくなかった。

「理由は簡単だよ（ふにふに）。何度も言ってるケド、ボク、キミのことキライ（ふっ）」

顔に一切感情を浮かべず、ローゼンクロイツはそう切り捨てた。

だが、それを承知でクロウリーはローゼンクロイツの身体を強く抱きしめたまま、この上ない至極の笑みを浮かべている。

「いいのだよ、たとえ君がなんと言うおうと構わない。私が君

を愛することには変わりないのだから、愛しているよおおつ  
ローゼンクロイツ！」

食べてしまいたいくらい好き。そんな雰囲気をクロウリーは  
醸し出していた。

そんな二人の姿を見るエセルドレーダの視線は、ローゼンク  
ロイツに明らか敵意を示していた。

「我が君、ローゼンクロイツ様とは、いつでもお会いになるこ  
とができます（こんな偶然でなければ、アタシが絶対に近づけ  
ないのに）。それよりも今は騒ぎの収拾をしなくてはなりません」

騒ぎとは？

どっかから響いてくる爆発音。どっかの誰かさんたちが、ど  
っかでまだケンカをしていようだった。

「それは違うぞエセルドレーダ。ローゼンクロイツは私を避け  
ているからね、偶然でもない限り逢えないのだよ。なあローゼ  
ンクロイツよ？」

眼前でクロウリーに微笑を贈られ、背筋に蟲が走ったローゼ  
ンクロイツは彼の身体を投球した。

「キライ（ふっ）」

投げられたクロウリーは小さな身体を器用にひねって着地した。  
「愛とは障壁があるほどに燃えるのだよ！」

アブナイ人なクロウリーは再びローゼンクロイツに抱きつこ  
うとした。

が、ローゼンクロイツはバッチ付き手帳を突きつけて静止さ



せた。

「勝つ裁判するよ（ふにふに）」

ローゼンクロイツが提示したのは、アステア王国で発行される弁護士手帳だった。

「それ以上近づいたらセクハラで訴えるよ（ふにふに）」

この発言にエセルドレーダが黙っていなかった。

「我が君を訴えるなど、アタクシが許さんぞ！」

「キミは公然わいせつ罪で訴えるよ（ふっ）」

真昼間つからボンテージ姿のムチムチボディを露わにするエセルドレーダ。

ふとローゼンクロイツは上空を見上げた。

「加えて彼らは器物破損（ふあふあ）」

上空では激化した戦いが繰り広げられている。カーシャとフアウストだ。

箒に乗り宙を飛ぶカーシャ、方や腕から漆黒の翼を生やし舞うフアウスト。戦いは空中戦へと持ち越されていたのだ。

クロウリーは自分の身体よりも大きい赤黒いマントを翻した。

「愛しいローゼンクロイツに怪我あつてはいけぬ。ここは我が城、ここで起きた問題は私に解決する義務がある。騒ぎの鎮静には私は赴こう　　霸ッ！」

## 第6話 丸く治まってくれませんか

柄の長い箒に跨りカーシャが飛空する。

「ファウスト負けを認める！（くそっ、あのときルーファスの邪魔が入れねば早々に決着がついたものを）」

「貴女が一〇〇〇ラウルを返せば全て丸く治まるのですよ。

（空中戦に持ち込まれたのは不利だ。どうにか広い地上に）」腕輪から漆黒の翼を生やし、その力により空を飛ぶファウスト。その手の自由が利かずに、残った腕だけの戦いを強いられていた。今使っている魔導は場所から場所への移動用であり、戦闘向きの術ではなかったのだ。

飛行速度に関してカーシャの方が早かった。

旋回しファウストの背後を取ったカーシャが仕掛ける。

「アイスニードル！」

鋭く尖った氷柱がファウストの背後から心臓を射抜こうとする。

「甘いですよカーシャ、イージスの盾！」

巨大な魔法盾が出現し氷の氷柱を跳ね返した。その後ろに隠れていたファウストがすぐに呪文を唱える。

「シャドーボルト！」

魔法盾が消えてすぐに、後ろから暗黒の稲妻が空を横に奔る。的に向かいながらも変則的に折り曲がって進む稲妻に、カー

シヤは急旋回するも避けきれず自ら箒から飛び降りた。

地面に落下するカーシヤの元に箒がすぐさま追いつき、箒の柄にぶら下がったカーシヤはそのままファウストに速攻を決める。

「喰らえファウスト！」

「それはこちらのセリフですよ！」

二人が決着をつけようとしたとき、赤黒い羽根で覆われた六枚の翼を背中に生やした巨大な影が、地上から空中の二人めがけて飛翔してきた。

至近距離で攻撃を仕掛ける寸前だったカーシヤとファウスト。その間に割って入ったクロウリーが魔導力を開放した。

「霸ツ！」

魔導力を帯びた爆風がカーシヤとファウストの身体を大きく吹き飛ばした。

生唾を喉で鳴らし呑み込んだ音が二カ所から聴こえた。

今の自分たちとは魔導力に差がありすぎる。

普段、汗など絶対にかかぬカーシヤの握られた手に汗が滲む。

「邪魔をするなクロウリー！（息苦しいまでのプレッシャーだ。手に汗を握るなど何百年ぶりか……というのは言いすぎか、ふっ）」

「邪魔はしない。しかし、これ以上の破壊はやめてもらいたい」

地上を見下ろすクロウリーの視線の先では、煙が立ち巨大な穴が開いた魔導学院の建物が見えた。「これ以上、我が君の

城を侵すのであれば、アタクシが今すぐ貴女を殺すわ」

背後に淫靡な女性の声と殺意を感じたカーシヤはすぐさま振り返った。そこには、なんと翼を大きく広げ羽ばたくエセルドレーダの姿があった。

「いつの間に妾の背後に!?（……ふふ、忍者かこやつ）」

「我が君にばかり気を取られているからよ」

なんて説明など聞かず、エセルドレーダの隙を突いてカーシヤは動かずにいるファウストに速攻を決めた、

「（今なら勝負がつく!）ブリザード!」

ちよっぴり卑怯だが、これがカーシヤのやり方だ。

だが、突如として放射されたブリザードとカーシヤの前にクロウリーが立ちはだかる。

「霸ツ!」

クロウリーが気合いを入れただけで、ブリザードは一瞬にして蒸気になり消えてしまった。それでもめげずにカーシヤは次の行動に移ろうとしたが、身体が動かない!

「なぜだ!」

カーシヤは見た。クロウリーの瞳が黒から緋色に変わり、その中に五芒星が浮かんでいるのを。

「貴様、魔眼の使い手だったのか!」

「ご名答だカーシヤ君」

運命の子として生まれた者が授かるといふ魔眼。後天的に目覚める者もいれば、生まれたときから持つ者もいる。それは魔の象徴とされ、この瞳を持つものは強大な魔力を持つと云われ

ている。

魔眼に魅つめられ、身体が動かせないカーシャ。それでも無理やり動かし、どうにか片腕が動いた。けれど、そのためには魔眼に打ち勝つ膨大な魔導力と、鉛ようになった腕を動かすような物理的な力、それに刺すような痛みが全身を襲う。

「たかが魔眼ごときに妾の自由は奪えぬ（……威勢は張ってみたが、腕を少し動かすのが限界だ……ふふっ、笑えん）」

必死に動こうとするカーシャを、冷笑で見守るクロウリーの妖しい口元が、小さく動かされて小声でなにかカーシャに話しかけた。

「さすがは古の支配者 氷の魔女王。神の娘だけのことはある」

「なにっ!? なぜそれを知っている、ルーファスがバラしたのか！」

「ルーファス君とカーシャ君の関係も少しは見抜いている。私を甘く見ないでもらいたい」

「妾の素性を知るのなら、妾のことも甘く見るな若造が！」

魔導力を解放しようとしたカーシャの髪が黒から白に変わる途中、それは起きた。

木材が折れるような音が宙に木霊し、カーシャの顔が激しい苦痛に歪む。

「くっ！」

魔法を唱えようとクロウリーに向けられていた腕が、背後から忍び寄っていたエセルドレーダによってへし折られたのだ。

「我が君に危害を加える者は許さないわよ（我が君が止めなければ殺せたのに）」

エセルドレーダを魅つめるクロウリーの瞳が、カーシャ抹殺を寸前で止めていたのだ。

「すまないカーシャ君。私の番犬はしつけがなくなって、すぐに人を傷つけてしまう。しかしだ、次に私に歯向かうようであれば、エセルドレーダではなく私が君を殺す」

「妾を殺すだと、下賤な人間風情が！」

「私を甘く見るなど言っただろう。神はまだ殺したことはないが、マスタードラゴンなら殺して喰らったことがある」

長い時を生きたドラゴンの中でも、智慧と知識と力を持つものをマスタードラゴンと云い。そのマスタードラゴンをも凌ぎ、身体に精霊を宿したマスタードラゴンの中のマスタードラゴンを 精霊龍 と云う。その存在は半ば伝説と化し、この世界でもつとも神に近い存在とされている。

精霊龍 には及ばないものの、マスタードラゴンを喰らうことは、人を遥かに超えている。

他の者が云えば誰もが嘘というだろう。

「私の言葉を信じぬかね？」

「妾には興味のないことだ（まさかと思うが、ありえないことではないと思わせる力が、こやつの内からは感じられる。まだまだ内に力を隠しているな……逃げるが勝ち、ふふっ）」

カーシャは重い腕を必死に上げ、クロウリーの後ろを指して叫んだ。

「ローゼンクロイツが裸踊りをしているぞ！」

「!？」

そんな馬鹿など誰も思うが、クロウリーは思わず後ろを振り返ってしまった。唯一の弱点がここかもしれない。ローゼンクロイツ溺愛病。

魔眼の魅了から逃れたカーシャは箒を反転させ、一目散で空の彼方の星になった。

空の様子を地上で見ていたローゼンクロイツが横を向き言う。「ボクたちも早く逃げよう（ふにふに）。あいつが地上に降りてくるとイヤだ（ふう）」

あいつとはもちろんクロウリーのことだ。

ルーファスとハルカの背中を押してローゼンクロイツは先を急ぐ。上空ではクロウリーが叫んでいた。

「待つておくれ愛しのローゼンクロイツ」

「イヤだ（ふっ）」

ローゼンクロイツは二人を校門の外へ押していた。もう、今日の授業スケジュールはグダグダだろう。

「さつき学校に来る途中にオープンしたばかりのカフェを見つけたんだ（ふあふあ）」

学校サボる気満々。

そんなこんなでハルカの魔導学院での一日が……。

「ちよ、待つてよ！」

ハルカの待つたコールだあっ！

「アタシを元の世界に帰してよ！」

話を昨日まで巻き戻すと、たしか魔導学院に行こうと言い出したのはカーシャだった。

クラウドス魔導学院には優秀な人材も多く、ここになればハルカを元の世界に返す手立てがあるかもしれない。

けど、今日はもうムリっぽい。

これからのこと、胸の奥でハルカは不安を覚えずにいられなかった。

それを知ってか知らずか、ルーファスは優しい顔を向けた。

「私が絶対にハルカを帰してあげるから」

真剣な顔になってつけ加える。「約束するよ、絶対に」

「当たり前でしょ！」

強がって見せるハルカ。

この世界で頼れるのはルーファスだけ。頼りないところも多いが、今のハルカにはルーファスがとても頼もしく見えた。

見詰め合うルーファスとハルカの間にローゼンクロイツが割って入る。

「ルーファス、キミの彼女かい？（ふあふあ）」

「ちゃちゃちゃ、違うよ！ あ、あとでゆっくり話すか……ぐわっ！」

石畳の隙間に足を取られてルーファス顔面からダイブ。

その姿を見て、呆れたようにハルカが呟く。

「ダサッ」

ハルカは元の世界に帰れそうもない。



今日も平和な青空のもと、ルーファス宅の煙突から煙が上がっていた。いつもならルーファスがドジをしたからなのだが、今日は違った。

寝室をハルカに譲った      どちらかという取られたルーファスは、安物のソファの上で眠っていた。

どこからか漂ってくる小麦の焼けたような香ばしい匂いが、ルーファスの鼻の中で遊ぶ。

「う、ううん？」

寝ぼけまなこで眼を擦るルーファスは、ソファから身を乗り出し鼻先をクンクンと動かす。

どうやら匂いの出所は普段は湯沸かしでしか使わないキッチンからだ。

「やつと起きたのおルーファス」

膨れっ面でハルカがルーファスの前に現れた。その手の上にはお皿に乗せられたベーグル。チキンとレタスとタマゴが挿んである。

ハルカの衣服はすでにこちら側のカジュアルな物を着こなしている。フリースにスカート姿で、ハルカのいた世界でも充分通用する服装だ。頭にはネコミミ型翻訳機が乗せられているが、クチビルは必要になるまで付けない。

まだまだ眠いルーファスは足元にあつた魔導書を蹴っ飛ばしながら、大きなあくびと背伸びをした。足元にある魔導書以外の場所は、綺麗さっぱり片付けられていた。全てハルカ一人で片付けてしまったのだ。

「おはよーハルクアー」

ルーファスの声はあくびなんだが、言葉なんだかわからないような感じだ。

頭をポリポリ搔いたルーファスは再びストンとソファに座り、床に落ちたりモコンを足で押してテレビをつけた。

《昨日……から……ライラの写本が……》

ニユースなんかまつたく耳に入らない様子で、ルーファスは頭をふらふらさせている。

「遅くまで調べ物したら、なんか寝過ぎちゃったよ（あんな遅くまで魔導書と睨めっこするのはテスト前くらいだよ）」

「アタシのために？」

「まあね。ごめんね早く帰してあげられるように努力はするから。ごめんね、ごめんね、ごめんね！」

ネガティブモード発動で、床に頭を叩きつける寸前のルーファスを、ハルカはあるものを差し出して止めた。

「ほら見てっ、美味しそうでしょ」

「美味しそうだね、ハルカ料理できるんだスゴイねー」

ジュルと口を拭うルーファスを見てハルカが笑う。

「別に料理ってほどでもないけど、なんか褒められると……」  
モジモジしながらハルカは顔を赤らめていた。褒められると弱いらしい。

しかし、ほとんど挿んただけで料理とは言えない。

それでもハルカは大満足。

「上手にできたでしょ。あんな綺麗なキッチンがあるんだもん、

使わなきゃ損だよっ」

「あーそれは私が料理が苦手だからで、ごめんね料理すらできない駄目人間で！（デリバリーの方が僕の料理より断然美味しいさ、ふっ）」

「そんなことより、早く食べてみて、ねっ？」

「じゃあ、いただきますー」

ベーグルに伸ばす手が二本。一本の手がルーファスの手を引っばたき、先にベーグルをひと噛みした。

「……マズいな」

ベーグルを横取りしたのは、どっからか現れたカーシャだった。

しかも、マズイと言われてハルカ素でシヨック。

ほとんど挿んだだけの料理で、どうやったらマズくなるのか、クリティカルなシヨックだった。

無言でゴミ箱にベーグルを棄てに行くハルカ。なんてお構いなしで、カーシャは自分が尋ねてきた理由を、言いたくて仕方なかった。

ちなみにカーシャはルーファス宅に不法侵入だが、誰もそこにはツッコミをいれない。

「今日はこれをハルカに渡すためにきてやったのだ（見て驚くがよい……なんてな、ふふっ）」

カーシャ胸元からマジックアイテムを取り出した。四次元ポケットかつ！

それはなんとリップスティックだった。

誰もまだ聞いてもいないのに、さっさとマジックアイテムの説明をはじめろ。

「これはだな、口に塗るだけで共通語がしゃべれるようになるという、画期的なアイテムだ」

スゴイ画期的だ！

あのマヌケなクチビルを装着せずに済むのだ。

「そういうのがあるなら早く貸してよね」

という、ハルカの言葉はカーシヤには通じてない。

しかし、このリップを塗ればなんと！

「これでいいの？」

「うむ、妾にも言葉が通じるようになったぞ」

カーシヤは深く頷いた。

これでハルカは言語の壁という障害をクリアできた。なんてことを吹っ飛ばすくらいにルーファスが叫ぶ。

「ぐわーっ、教会に行かなきゃ！」

その場で足踏みをするルーファス。おしっこが漏れちゃう寸前みたいなきだ。ジタバタするなよっ

慌てるルーファスをハルカのまん丸な瞳が覗き込む。

「教会？」

「そうだよ、ガイア曜日今日は教会に行くのが慣わしなんだよ！」

「ガイア曜日？」

「一週間くらい知ってるでしょ。ガイア、ノーム、アンダイン、シルフ、エント、サラマンダー、ハリユク。世界の常識だ

る！」

「アタシそんなの知らないもん」

「ごめん、そうだった」

ガイア聖教の信者のみならず他宗教の信者の多くも、一般的に休日のガイアの日教会に行くのが慣わしなのだ。

慌てて出かける支度をはじめたルーファスにたいしてカーシヤがボソッと。

「学校が休みなのだから、今日がガイアなのは当たり前だろう。お前みたいなのはヒッキーになると曜日が変わらなくなるタイプだな」

「すでに夏休みとか引きこもりで悪かったよ！（就職できなかつたら本当にヒッキーになりそう）」

「自分でわかっているのならばよいのだ（ヒッキーというカーソトになりそうだな）」

玄関に向かって走るルーファスが途中で止まって振り向いた。

「ハルカも来る？」

「ウンウン、行きたい！」

「カーシヤは来ないよね？」

「知っていて聞くな。妾は無宗教だ……それよりも、ルーファス茶だ！」

「は、はい！」

出かける間際にもカーシヤにこき使われるルーファスであった。

## 第7話 度忘れの達人

この国の宗教比率を多く占めているのがガイア聖教である。中央広場を見下ろすように建てられた大聖堂はガイア聖教のもので、ガイア聖教から派遣された大司教がこの都市のガイア聖教を統括している。

ルーファスが向かったのは、住宅地に建てられたこぢんまりした教会だ。

教会の中は静寂に包まれ、朝の礼拝式はすでに終わったように、人の姿はたったひとつしか残っていないかった。

「ルーファス、今ごろきても遅いよ（ふう）。今日はボクが説法を説いてあげたのに（ふあふあ）」

ステンドグラスから差し込む陽を浴びて、教壇に凜と立っていたのは、司祭服を着たローゼンクロイツだった。今日は空色のドレスではないが、白と空色を貴重にした荘厳な司祭服だ。

なぜかローゼンクロイツが着ると、法皇かなにか位が高く高貴な存在に見えるのが不思議だ。

この世界で数少ない知り合いにあったハルカは嬉しそうに挨拶をする。

「こんにちわローゼンクロイツ」

「……誰だっけ？（ふにゅ？）」

「えっ？」

「覚えてない（ふあふあ）」

「カフェでパフェ食べたでしょ、アタシの服を買うのも付き合  
つてくれたのに？」

「さっぱりだね（ふあふあ）」

二人の間にルーファスが割って入った。

「ローゼンクロイツは物忘れが激しいんだ。そのうち突発的に  
思い出すから平気」

「そうなんだあ（物忘れが激しいって、ここまで来るとボケ老  
人）。ところで、ローゼンクロイツってこのエライ人な  
の？」

「最近になってこの教会の司祭を任されたんだ（ふあふあ）。

普段は助祭にこのことを任せているけど、今日はたまたまボ  
クがいたんだよ、そのくらい雰囲気で察してくれよ（ふう）」

雰囲気で察するとはぜんぜん関係ない問題だ。

学生で、弁護士で、司祭。ウンウンと頷くハルカはルーファ  
スに顔を向けた。

「ところでルーファスは？」

「えっ？」

「ルーファスは学生しかしてないの？ バイトとかは？」

「えーっと」

焦って一歩足を引くルーファスに、ローゼンクロイツが言葉  
で刺す。

「ルーファスは親の脛をかじって生きてるからね（ふあふ  
あ）」

「うっ」

痛いところを衝かれたルーファスが胸を押さえてうづくまる。そこにローゼンクロイツが雪崩のような追い討ちをかける。

「まだ将来なにをするかすら決めてないんだろ（ふあふあ）。クラウス魔導学院を卒業できればエリートコースだけど、将来やりたいことがなければなんの意味もないよ（ふあふあ）。歳を取ればどこも雇ってくれなくなるし、就職が難しくなる（ふっ）。それにルーファス、キミはバイト経験すらもないだろう、このままだとニート決定だねニート（ふにふに）。最近増えているらしいよ、そういうの（ふう）。父上には見切りをつけられ、生活費は母上からの仕送りを頼っているんだろ？（ふにふに）」

長台詞は全てルーファスの腹や心臓を抉り、ローゼンクロイツの攻撃にルーファス完全に落ち込んでしまった。

「生まれてきてごめんなさい。母さん迷惑かけてごめんなさい。自殺するときは他人に迷惑がかからないように最善を尽くします……ふっふふふ（苦しまずに死ぬのがいいなあ）」

「あーあ、また落ち込んでるしー」

ハルカはため息をついて、体育座りをするルーファスを見下した。励ます気にはなれない。

「ふふふっ、僕は世の中のゴミでカスで有害物質なのさ！（首吊りって苦しいのかなあ）」

ここまでルーファスを落としておいて、ローゼンクロイツはなんのフォロームもない。



「ルーファスの母上は甘いよ、キミをこんな風に育てしまって（ふにふに）。でもね、そんな甘く優しいところがルーファスの母上のよいところだよ（ふあふあ）」

そして、ローゼンクロイツは何気にポソツとつけ加えた。

「そんな母がいて羨ましい（ふう）」

それはローゼンクロイツの本音だったかもしれない。

落ち込んでいたルーファスであったが、ローゼンクロイツのひと言を聞いて、別の感情が沸きあがってきた。

「ローゼンクロイツ……君は孤児だったからね。僕の母も君のことを心配して、いつも僕と一緒に君のことも気にかけていた」

「そうだね、キミの母上には本物の愛情をもらったよ……どっかの誰かみたいな歪んだものじゃなくてね（ふっ）」

ローゼンクロイツは鼻で嘲笑した。

孤児だったと聞いて、ハルカはそこには触れないようにもしたかったが、二人だけが共通の話題を進めているのが嫌で、思わずローゼンクロイツに尋ねてしまった。

「孤児だったの？（あーあ聞いちゃった）」

「うん、そうだよ（ふにふに）。本当の両親の顔も知らない、赤ん坊のときに聖カツサンドラ修道院の前に捨ててあったのを拾われたらしい（ふにふに）。偶然にも当時シスターだったルーファスの母上にね（ふあふあ）」

裕福な階層が多い王都クラウスでは、捨てられる子供など滅多におらず、経済的な理由ではなく他に仔細があったのだろうか

と修道院の中で噂になった。ローゼンクロイツはそのまま幼少期を修道院で育ち、敬虔なガイア聖教の信者として教育された。「ボクは修道院で育ったんだけど、その頃からあいつはボクに経済的な支援をしてくれたんだ……すごく迷惑な話だね（ふっ）」

「あいつって誰？」

ハルカが尋ねるとルーファスが小さな声で教えてくれた。

「クラウス魔導学院の学院長だよ。アレイスター・クロウリー学院長」

「……あの人か（いろんな意味で怖い感じしたけど、悪い人とは違うし）」

いろいろな場所に寄付金をばら撒くクロウリーであったが、ローゼンクロイツへの思い入れは異常なまでで、資金面から進路の手配からなにもまで支援されていた。けれど魔導に関しては、ローゼンクロイツがクロウリーに教えをもらったことはない。生活への圧力はあったが、魔導に関しては自由の中で学んだ。

ローゼンクロイツは少し疲れたように、近くにあった長椅子に腰を掛けた。

「感謝はしていないわけじゃないよ（ふあふあ）。資金を援助してくれたおかげでボクは魔導を学び、幼稚園からずっとルーファスと同じ道を歩めたからね（ふにふに）」

幼稚園から、きつともつと昔からルーファスとローゼンクロイツは、一緒に過ごしてきたのだろう。ハルカは大きな疎外感を胸に抱き、二人の間に割って入れないことを知った。

「ふたりは昔から仲いいんだ（なんか悔しい）」

「そういうわけじゃないさ（ふあふあ）。ルーファスは昔からドジでマヌケで救いようがなくてね、ボクがどれだけキミの尻拭いをしてあげたことが、召喚が不得意なのも昔からの十八番さ（ふあふあ）」

少し喧嘩を吹っ掛ける態度のローゼンクロイツ。いつもほとんど無表情なのがとくにそれを煽る。

「なんだよ尻拭いをしてたのは僕だろ。ローゼンクロイツは昔から頭脳明晰で魔導の才能もあつたけどさあ、トラブルメーカーで問題ばかり起こしてたのを僕が庇ってじゃないか！」

「トラブルメーカーなのはキミだろルーファス（ふにふに）。キミに巻き込まれてボクが無実の罪でどれだけ叱られたことが

（ふう）」

「その言葉、そっくり返すよ（問題の規模が違うよ。ローゼンクロイツの問題は建物の損壊がついてくる）」

「でもね、ルーファス（ふあふあ）。キミといる時間は楽しい、退屈はしないさ（ふあふあ）。だからボクはキミのこと好きだよ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツがはにかんだように一瞬笑い、一秒もしないうちに無表情に戻った。その笑顔を見逃さなかったハルカは、胸に歯痒いものを感じてしまった。

「（ルーファスのこと……ルーファスはローゼンクロイツのことどう思ってるんだろ。ルーファスのタイプなのかな。でもこの人、自分のことボクとか言ってる変わった女の子だし……全

体的に）」

「ぼーっと考え事をしていたハルカは、大きな物音でビクツしてしまった。

教会の正面門が左右に開き、外からメガネっ娘が飛び込んできた。

その娘の注目すべき点は猫耳だ！

いや、違った。

教会に飛び込んできた娘の注目すべき点は他にある。猫耳も充分、注目すべき点だが、猫耳ならすぐ近くでハルカもしている。ハルカがしているから注目しないというわけではなく、なんと娘は肩から血を流していたのだ。

血の滲む肩を押さえ飛び込んできた娘に、ローゼンクロイツは声もかけずに無言のまま、教壇の下にあつた隠し階段へと導いた。

ルーファスは目を丸くしながら、ローゼンクロイツと顔を見合わせた。

「今のアインだよな？」

ローゼンクロイツのファンクラブの会長アイン。追っかけが講じて、魔導の才能ゼロだったにも関わらず、名門クラウス魔導学院に入学したつわものとして、ちよつとは知れた有名人だ。アインの姿が聖堂から消えると、後を追うように大柄な男が飛び込んできた。

「不審な女を見かけなかったか？」

ハルカやルーファスよりも早く、ローゼンクロイツが首を横

に振った。

「見かけてないよ、ずっとボクたちは三人で話していたよ（ふあふあ）」

「俺は公安課の治安官だが、秘密結社 薔薇十字 の団員を追ってきた。この辺りに逃げ込んだと踏んだんだが、本当に知らないか？」

「知らないね、この教会の上に飾ってある聖セーフィエル様に誓ってもいい（ふあふあ）。しつこくするなら勝つ裁判するよ（ふにふに）」

そう前置きをしてローゼンクロイツが取り出したのは、バツ手付きの弁護士手帳だった。しかもこのとき、前に一歩足を出したローゼンクロイツは血痕を足で隠していた。

弁護士手帳に付属した身分証を確認して頷いた治安官だが、その目はハルカへ移動されていた。

「だがな、そこにいる娘の姿が気になる」

駆け込んできたアインと同じ猫耳。治安官の目はそこにズームアップされていた。

すぐさまルーファスがフォローに入る。

「この子、遠い国からきた子でして、この頭に着けているのはですね、翻訳機なんですよ」

ローゼンクロイツも続いた。

「薔薇十字 の団員がつけているのはカチューシャだと聞いたよ（ふにふに）。この子が付け入るのには、ヘッドホンが付属されているだろう？（ふあふあ）」

治安官はハルカに近づき、足の先から顔まで毛穴を覗くように顔を近づけて見た。

「それにしても怪しい娘だ。遠い国ってどこの国からきた？」

「あーっ（どうしよう、言わないほうがいいのかな）」

ハルカは本当のことを言うべきか否か迷った。

「どうした、言えないのか？（まずまず怪しいな）」

「そっ！（にゃ!）」

なにかを言うおうとしたハルカの口をルーファスが塞いだ。

「翻訳機で言葉は理解できるんですけど、話すことはできませんですよ（アースからきたってことは黙っていたほうがよさそうだ）」

「それなら、なぜ口を塞いだ。なにかやましいことでもあるんじゃないか？（なにを隠してるんだ）」

「違いますよ、やだなあ（マズイ、ローゼンクロイツ助けてよ）」

必死なヘルプの視線をローゼンクロイツに贈った。すると、ローゼンクロイツが思い立ったように眼を大きく見開いた。

「あっ、思い出した（ふにふに）。ルーファスに間違って召喚されたんだったね、たしかアースからきたんだよね（ふにふに）」

今になってローゼンクロイツの物忘れが解消されたのだ。パッドタイミングだった。

治安官は少し考え込み、今朝、署で目を通した被害届けを思い出した。

「そうだ、思い出したぞ。アースからきたという娘が、魔導学院の一部を損壊させ、院内に安置されていた国宝のライラの写本を盗み出して逃走。逃げた犯人の外的特徴と告示するぞ！」

「そうなの、そんな凶悪犯罪者だったのかい!？」

驚いたのはローゼンクロイツだった。普段無表情のローゼンクロイツはわざわざ驚いた表情をした。けれど、それはあっという間に消え、普段の無表情にすぐ戻る。

自分に全ての疑いが掛けられていると知ったハルカが叫ぶ。

「アタシそんなことしてない、国宝なんて知らないし！」

しゃべれないはずのハルカがしゃべってしまった。

「おまえが犯人だな！」

「知らないしアタシ！」

「嘘をつくな、署に連行する。その二人も事情聴取だ！」

その一人は呆気を取られ呆然と立ち尽くし、もう一人は無表情のまま治弁護士手帳を提示した。

「任意同行なら拒否するよ（ふあふあ）。それにボクはこの子に今日ここではじめて会ったんだよ（ふにふに）」

これは忘れていたのではなく、白々しく嘘をついているのだ。取り押さえられるハルカを見て、やっと再起動したルーファスが治安官の腕につかみかかる。

「ハルカが犯罪者なんて嘘だ。クロウリー学院長もハルカのことを知っているから、本人に聞いてみてくれないか！」

「そのクロウリー学院長が被害届けを出している」

「まさか!?（なんでクロウリー学院長が?）」

クロウリーは騒ぎを全て知っているはずだ。学院内の建物を破壊されたのは、カーシャとファウストの争いが原因で、ましてや国宝のライラの写本なんてまったく知らない。

表情を崩さないローゼンクロイツが治安官に尋ねる。

「具体的な被害届けの内容を教えてくださいと嬉しい（ふあふあ）。この子の一人の犯行なのかい?」

「被害届けにはアースからきた者ひとりの犯行だと書いてあった。共犯者はいないとクロウリーも証言している」

「学院長本人が?（ふにゃ）」

「そうだ。だが、おまえらにも聞きたいことがあるから一緒に来い!」

「……イヤ（ふっ）」

「なんだと!」

「事件はこの子ひとりの犯行だろ（ふにふに）。ボクらはたまにここで、この子に会って話をしていただけさ、任意の事情聴取なら拒否する権利があるよ（ふにふに）」

ローゼンクロイツは再び弁護士手帳を治安官の鼻先に突きつけた。

「……くそっ（胸糞悪いガキだ）」

治安官はローゼンクロイツを睨み、ハルカの腕と自分の腕を手錠で繋いだ。

「アタシ無実だし、アタシも拒否します拒否。逮捕状持つてきてよ、任意なら拒否するってば!」



「うるさい黙れ！」

「黙れつてアタシなにもしてないってば！」

暴れたハルカは思わず治安官の顔面にグーパンチ！

鼻を押さえる治安官を見てルーファスは頭を抱えた。

「あちゃ〜（殴っちゃった）」

殴られた治安官が怒りを露わにして叫ぶ。

「現行犯で逮捕だーッ！」

ローゼンクロイツがボソツと。

「暴行罪確定（ふっ）」

強引に引きずられて行くハルカがルーファスに手を伸ばす。

「助けるバカ！」

ローゼンクロイツは信用ならない。この世界で頼れるのはルーファスだけだった。

「ハルカ！」

追いかけようとしたルーファスの背中にローゼンクロイツが言葉を浴びせる。

「ルーファス待て！（ふーっ）」

エメラルドグリーンの瞳に浮かぶ六芒星。ローゼンクロイツの瞳に魅入られたルーファスは身体が動かなくなってしまった。

「ルーファス助けるバカ、シネ、助けないと殴るよ、怨むよ、コロスよ！（なんでできてくれないの！）」

ハルカの怒りと悲しみの混ざった叫び声だけが、静かな聖堂に木霊した。

扉が固く閉まり、二人だけが残された。その瞬間、ルーファ

スの術が解けた。

すぐにルーファスはローゼンクロイツに掴みかかった。

「どうして止めた！」

「今の状況では仕方ないことだよ（ふにふに）」

「それにアインが 薔薇十字 ってどういうことだよ！」

「今は言えないよルーファス（ふう）。ボクには守らなくては  
いけないものがあるんだ（ふにふに）」

「僕だつてハルカを……ハルカを……」

ルーファスは頂垂れたまま両膝を付いた。

「ハルカのことはボクがどうにかするよ、安心して（ふにふ  
に）」

「どうにかするってどうやって！」

ルーファスが見上げたその先で、ローゼンクロイツは自信に  
満ちた笑みを浮かべていた。

「無実は法廷で晴らそうよ、ボクが弁護人を引き受ける（ふに  
ふに）」

そして、舞台は法廷へと移されたのだった。

第8話 くびちよんぱ

誰が裏で糸を引いているのか、傍聴人席には誰もおらず、より静寂が増していた。この時点で怪しいと気づくべきであった。裁判官がハンマーを叩き証人を呼んだ。

法廷に入ってきたのはルーファスだった。ゆっくりと証言台に上るルーファスを、ハルカは被告人席から心配そうな顔をして見つめていた。

ハルカの顔を見てしまったルーファスは、すぐにつらそうな顔をして視線を逸らす。

「……………ごめんハルカ」

証言台に立ったルーファスに廷吏から宣言書が渡された。

「宣言書を朗読し、最後にここにサインをしてください」

「本法廷において、わたくしは母なる神ガイア、数多の神々、そして審判の神ラーブラに誓い、ここに真実のみを語ることを誓います（き、緊張するなあ）」

宣言書に羽ペンでサインをすると、すぐに検事がルーファスのもとにやってきた。

「被告人はクラウス魔導学院において、器物破損、窃盗の罪で起訴されている。そして、こともあろうに我が国の国宝であるライラの写本を盗み出したのです。証人であるルーファスは、被告人に脅迫されていたと我々の調べでわかりました」

「ちよつと待つて、私は」

「待ちたまえルーファス君、わたくしは質問の途中だ。口を慎みなさい」

ハンマーを軽く叩いた裁判官がルーファスに注意する。

「証人は質問された内容だけを簡潔に答えるように」

ルーファスが無言で頷くと、引き続き検事が質問を続けた。

「不運な事故によりルーファスは被告人を誤って召喚されたようですが、被告人はどこから来たと言っていましたか？」

「異議あり（ふあふあ）」

ハルカの横で座っていたローゼンクロイツが手を挙げて立ち上がった。

「すぐさま検事が反論する。」

「異界からきた者にたいしては、どこからきたのかと尋ねるのは常識であります。それに今回のケースでは被告人がどこからきたのが本件において、いえ、国家において重要なできごとなのです」

「検察官の主張を認め、弁護人の異議を却下します」

鋼の表情を崩さないままローゼンクロイツは着席した。

再び検事が同じ質問を繰り返す。

「被告人はどこからきたと言っていましたか？」

「あ、アースからだと自分で語っていました。けれどアースからきたといつて、罪に問われるのはおかしいよ。アースのことは伝承に過ぎない。魔導学院の件だって嘘がある」

早口でしゃべるルーファスを止めるべく、裁判官がハンマー

を強く鳴らした。

「証人は聞かれたことだけに答えるように」

下唇を噛み締めながらルーファスは着席した。

検事は大きく手を広げパフォーマンスで証人ルーファスの証言を誇大する。

「魔導学院での騒ぎを見れば一目瞭然でしょう。伝承は正しかったのです。アースからきた者はこの世界に災いをもたらす」

ローゼンクロイツは手を挙げる。

「意義あり、伝承などという曖昧なものを信じるのはどうかと思っね（ふにふに）」

「意義を却下します」

裁判官の言葉に、ローゼンクロイツは静かな視線を送った。

「理由はなんだい？（ふにふに）」

「ガイア聖教の伝承は信じるに値する」

「さつきも言ったけど伝承は伝承さ、御伽噺の類は証明にはならないよ（ふにふに）」

「弁護人の異議は却下する」

「わかったよ、では証人としてアレクスター・クロウリーの出廷を求めたいんだけど？」

「却下します」

「ここまで来ると、最初から仕組まれてるとしか考えられないよ、まったく（ふう）」

まるでハルカを絶対に有罪にしようとしている系が感じられる。

被告人席から不安そうにハルカがローゼンクロイツを見つめていた。

「（アタシどうなっちゃうの？ 死刑になんてならないよね）」

今にも大泣きしそうなハルカを見て、ローゼンクロイツはここにいる人々を次々に一瞥した。

「もしかしたらここにいる陪審員や検事、裁判官だって本物かどうか疑わしくなるね」

雷でも落ちたみたいにハンマーが激しく木霊した。

「弁護人は口を慎みなさい。君のような者がなぜ弁護人の資格を持つているのか疑問だ」

「ボクも疑問だよ（ふあふあ）」

挑戦的な態度に裁判官が怒号する。

「これより陪審員による審議に入る！」

「嘘だろ!？（にや!?)」

これにはローゼンクロイツも本当に驚いた顔をした。こんなこと滅多にない、写真に収めたらスクープだ。アインに売りつけたら高く買ってくれる。

「異議あり！（ふーっ）。反対尋問すらしてないよ、この裁判は不当だ（ふーっ）」

「異議を却下する」

辺りを見回すと、検事たちが嘲笑っている。完全に仕組まれた裁判だ。審判の場である法廷が、仕組まれていたのでは意味がない。公平なんて言葉はここにはなかった。

このままでは確実にハルカに有罪の判決が下る。

まだ証言台にいたままのルーファスが腹から叫ぶ。

「国王が外交で国を開けているとはいえ、こんな横暴が許されると思ってるか！」

「ボクたち、クラウス国王のご学友だしね（ふあふあ）」

検事も叫んだ。

「国王不在の場合、この都市を動かす力を持っているのは政府ではない。大司教様だ！」

全ての都市に大司教がいるわけではない。この王都アステアはガイア聖教にとつても重要であるから、大聖堂が建てられ大司教がこの都市にいる。ガイア聖教が多く割合を占めるこの都市では、それに比例して大司教の権限が強くなるのだ。

ローゼンクロイツがボソツと呟く。

「宗教と政治……まったくやりにくくて仕方がないね（ふにふに）」

そして、防波堤が崩れたように一気に話しはじめる。

「クラウスと大司教の仲が悪いのは有名だよね（ふにふに）。

大司教は生きた化石で脳ミソは古くて固まっているよ（ふっ）。

大司教だけじゃないよ、保守派はみんな伝承や迷信ばかり気にしてる（ふにふに）。国王を中心とした進歩派と大司教を中心とした保守派の争いは絶えないよね（ふう）」

「弁護人は口を慎みなさい」

と裁判官に言われてもローゼンクロイツは話し続ける。

「そういえば、この国の大司教は悪名高き魔導結社 銀の星

から献金をもらってるとか？」

ハンマーが何度も何度も鳴らされ、耳が痛くなるほどだった。「弁護人は口を慎みなさい。君も敬虔なガイア聖教の信者。しかも教会のひとつを任されている司祭の身だろう」

「関係ないね（ふっ）。腐ってるモノを食べるとお腹を壊すよ、だから排除しなきゃね（ふにふに）」

ローゼンクロイツに負けじと、お腹をぎゆるぎゆる鳴らしながらルーファスが叫ぶ。

「ハルカが有罪なら、召喚した私にも罪があるはずだ！」

「故意で召喚したわけではない。不慮の事故であり、ルーファスも被害者である。と当法廷は判断する」

「そんなばかな。私の父が元老院だから、僕には音沙汰なしか！」

裁判官はなにも言わなかった。

「父は父、僕は僕だ！」

ついにルーファスが証言台から飛び出した。お腹をぎゆるぎゆる鳴らして壊しながら。

「証人を取り押さえなさい！」

裁判官の声に数人の男たちがルーファスに飛び掛かる。だが、その動きは途中で止められた。

男たちの身体の四肢に巻きつく輝く魔導チェーン。その先をローゼンクロイツが握っていた。

「ルーファス、やるならボクにも合図してくれよ（ふあふあ）」



一気にローゼンクロイツがチエーンを引っ張った。すると引きずられ崩れる男たち。

すぐさまローゼンクロイツにも男が襲い掛かるが、エメラルドグリーンの瞳に魅つめられ、男は石のように動けなくなってしまう。

「証人と弁護人を早く取り押さえる！」

法廷は一気に闘技場になろうとしていた。

だが、それを止めたのはローゼンクロイツだった。

「ここで暴力沙汰を起こす気はボクにはないよ（ふあふあ）。

ルーファス、外に出よう（ふにふに）」

「なんでだよ、ハルカを置いて出れるもんか！（あんな顔したハルカを置いていけない）」

ルーファスの視線の先で震えるハルカ。混沌とした恐ろしさで、精神は極限状態に達しようとしていた。

自分の知らない世界に突然迷い込み、無実の罪で犯罪者にまでされそうになっている。自分の力ではどうにもならない、激しい渦の中に飲み込まれてしまった。ハルカは自分がなぜここにいるのかすらわからずに、被告人席でただただ震えていた。

ハルカに駆け寄ろうとするルーファスの腕をローゼンクロイツが掴む。

「行くよルーファス（ふにふに）」

「なんでだよ！」

「ここで牢屋に入れられたいのかい？ それこそなにもできないくなる（ふにふに）」

「だからって！」

「ボクを信じるルーファス」

もつとも長い付き合いの友人をルーファスは信じて深く頷いた。

ルーファスはハルカの手を握り締め、深く澄んだ瞳でハルカの瞳を覗き込んだ。

「ハルカは僕が守るから、信じてて」

「……ルーファス（信じてるから）」

涙を流すハルカに背を向けて、ルーファスはローゼンクロイツに連れられ法廷をあとにした。

そして、二人が法廷をあとにしてからも裁判は続き、最終的な判決が下った。

「被告人ハルカを死刑に処す」

涙を止めようとしたがやっぱり泣いてしまった。それでもハルカはルーファスを信じていた。

ルーファスは必ず助けにきてくれる。

大聖堂の見下ろす中央広場は、普段は市場などで賑わいを見せている。けれど、今は違った。

市庁舎の真横にある処刑台の近くに人々が群がっている。

黒頭巾で頭をすっぽりと覆い隠した刑吏が、死刑囚であるハルカを囲み処刑台に上げる。

群衆にざわめきとどよめきが巻き起こった。

古い時代には罪人の死刑が決まると、華やかなパレードを催

し、罪人は死を前にもてはやされるものだったが、今は時代も変わり速やかに刑が執行される。

処刑台の上からハルカは群衆を見回し、人だかりの中にルーファスの姿を捜した。けれど、見つからない。姿は見えないけれど、どこかにいるような、そんな気がハルカにはした。

処刑台の近くに群がる人々の中でひときわ背の高い影あった。大きな頭に作り物を獣耳が乗っている。それは猫のきぐるみだった。中に入っているのは、もちろんルーファスだ。

死刑執行の日に華やかなパレードは行なわれなくなったものの、その風習は今も残り、民衆たちは宴会などを催し、それを楽しみにする者もいる。

お祭り気分で浮かれる者が多い今日は、見世物で金を稼ぐ者たちも稼ぎ時で、道化師の格好をする者中にもいる。と、フオローしても猫のきぐるみはやっぱり浮いている。

行き交う人々の目を一心に集めるルーファス。すれ違う人、路地の向こうにいる人、変な眼差しでルーファスを見ている。軽く笑って流してくれるのは酔っ払いのおっさんだけだ。

猫のきぐるみを着て歩き回るルーファスの背後に忍び寄り影。こっそりなのでルーファスは気づく余地もない。

ルーファスの背後に立ったガキンチヨが“ニカツ”と子悪魔の笑みを浮かべた。

ガキンチヨのドロップキックがルーファスの背中に炸裂！  
ルーファス海老反る！

そして、コケた。

地面にYの字になって倒れているルーファスをガキンチョが指さして笑う。

「ぎやははは、マヌケ！」

ガキンチョはそう言っただけで走り去って行った。テーマパークやイベントに行くときよくいる。きぐるみを見るとキックとかパンチをしてくるガキンチョ。

ルーファスは何事もなかったようにビシッと立ち上がり、何事もなかったように歩き出してこう思った。

「（こんなコケた姿、知り合いに見られたら、恥ずかしいよねえ。よかつたきぐるみ着てて）」

ルーファスよく考える！

きぐるみを着てなかったら蹴られなかっただろ？

群衆の中で頭一個突き出して、ルーファスはきぐるみのみの中から処刑台の上のハルカを見守った。

「（……ハルカ）」

ルーファスはローゼンクロイツに言われていた。

なにが起きても、ルーファス、キミはなににもするな。

そんな忠告を受けても、なにかしないではいられない。ハルカは自分が守るからと約束したのだ。

ローゼンクロイツにはなにか考えがあるに違いない。そのローゼンクロイツのことをルーファスは信じている。けれど、ローゼンクロイツはルーファスになにも告げなかった。

自分もなにかをしなくてはという気持ちがあるルーファスの中で

募る。

ハルカを見つめるルーファスの視界が滲む。

死刑確定後、保守派はハルカの処刑方法を火あぶりにしろと主張した。

火あぶりは異端者を処罰するのに多く用いられた方法だ。けれど、王都アステアで火あぶりが行なわれた公式な記録は、ここ三〇〇年以上ない。それでも火あぶりを保守派が望んだのは、それほどまでにアースからきた者を恐れたためだろう。伝説や伝承であっても、信じていればそれが事実なのだ。

しかし、国王不在の際の強行的な裁判。このことだけでも知れば、国王と大司教の溝は深まる。そこに火あぶりを民衆の前で大々的に行なったとあれば、大きな争いになるのは目に見えている。そこでハルカの処刑方法は斬首刑と決まった。

斬首刑は身分の高い罪人に対する刑である。そこに国王に対する保守派の思惑があるのかもしれない。

刑吏の手によってハルカに目隠しの布が巻かれようとしていた。

それを見て、ついに堪えられなくなってルーファスが飛び出そうとしたとき、その身体を押さえて前に飛び出した者がいた。処刑台に飛び出した影は三つ。

猫耳にカシユネと呼ばれる額から鼻先を覆う仮面を装着している。

警備に当たっていた治安官が叫ぶ。

「薔薇十字 だ！」

飛び出してきた謎の三人組を見て、ハルカは自分を助けにきてくれたのだとすぐに悟った。そして、大声で叫ぶ。

「死にたくない！」

叫んだハルカの口を真後ろにいた刑事が押さえた。

ハルカは腹に衝撃を覚えた。もしかしたら、殴られたのかもしれない。

しかし、次の瞬間にはすでに全身から力が抜け、意識は闇の中に落ちてしまった。

薔薇十字の団員が治安官と攻防を騒ぎの中、ルーファスが台上に登ろうとしていた。

ハルカの傍に居るのは刑事ひとりだけだ、他の者は薔薇十字に気が回っている。今なら助けられるかもしれない。

群衆の中を掻き分けて、あと少しでハルカに手が届きそうだが、気を失ったハルカを抱きかかえていた刑事が、群衆を抜け出したルーファスの前に立ちはだかる。

黒頭巾に開けられた二つの穴の奥で、刑事の眼がルーファスを魅つめた。

足が動かないことをルーファスは悟った。

手も動かない。

全身が石になってしまったように感覚が全て失われた。

治安官と攻防が続いていた薔薇十字は苦戦を強いられ、次々と現場に駆けつけてくる治安官に勝ち目がないように見え

た。攻防が続く最中、ハルカの身体は引きずられ、ギロチン台に

首を固定されていた。

ルーファスは身体を動かすことも、声を出すこともできず、刻々と近づいてくるハルカの死の瞬間を見ていることしかできなかった。

薔薇十字の団員が治安官を振り切ってハルカのもとへ翔る。

ギロチンの刃が悲鳴をあげた。

時間が止まる。

刹那、群衆が波打った。

ルーファスの時間が時を刻む。

「ハルカーっ！」

胴体から切り離された首が無残にも転がった。

悲しみに打ちひしがれながら、憎しみが腹から沸き立ちルーファスの手に魔導力が集まる。

だが、ルーファスは腹に強烈な拳を喰らい気を失い、薔薇十字の手によって逃げ運ばれる。

ハルカを助けることができなかった。

首は胴から切り離され、確実に肉体は生を失った。

《アタシ死んでる!?!》

その光景を目の当たりにしてハルカは叫んだ。

その場にいたたたったひとりだけが“ハルカ”を視て、ボソツと黒頭巾の中で呟いた。

「クビチヨンバだね（ふあふあ）」

そして、ハルカはシヨツクのあまり気を失ったのだった。

第9話 魔女の館へようこそ、ふふ

自分の死よりも苦しい。

天井を見つめるルーファスの眼は空ろだった。

ハルカの首が切り落とされる瞬間はあまりにも残酷で、眼をつぶるたびにその光景が思い出されてしまう。ルーファスはいに精神を蝕まれ廃人と化してしまっていた。

なぜかルーファス宅にいるカーシヤも、ルーファスの抜け殻に困り果ててしまっていた。

「ルーファスしっかりしろ！」

「……………」

返事はなにも返ってこなかった。

インターフォンが家の中に響く、家の主はこんな状態だ。いつもなら絶対に動かないカーシヤが仕方なく玄関のドアを開けた。

そこに立っていたのは空色ドレスのローゼンクロイツだった。けれど、このときカーシヤは他の者の気配も感じていた。なにかがいるような気がするが、そこに立っているのはローゼンクロイツだけだ。

不思議に思いながらカーシヤはローゼンクロイツを家の中に入れた。

カーシヤの横を擦り抜ける風が二つ吹いた。



ソファに座って天井を見つめるルーファスは、ローゼンクロイツの存在に気づいてもいない。

「ルーファス、ボクの声が聞こえてるかい？（ふにふに）」

「……………」

「大事な話があるからよく聴くんだよ（ふにふに）」

「……………」

「ハルカは死んでない（ふにふに）」

「……………っ!？」

急にルーファスの瞳に色が差した。

「なんだって!？（ハルカが死んでない!）」

ソファから飛び上がったルーファスがローゼンクロイツにかみかかった。

「慌てちゃいけないよルーファス（ふあふあ）。死んでないけど、生きてもない、とても不安定な状態だ（ふあふあ）」

「よくわかんないけど、ハルカは今どこに？」

「ここに（ふあふあ）」

「どこに？」

「ここだよ（ふあふあ）」

指が差された場所にはなにもなかった。しいて言うなら空気があるくらいだ。

ローゼンクロイツ指差す場所をカーシャが目を細めて見た。

「まさか!？」

カーシャが声をあげた。

映りの悪いテレビより酷く乱れているが、目を細めると微か

に視える　ハルカの姿が。

まさかハルカ幽霊になっちゃった!?

この中でハルカをハッキリと視えているのはローゼンクロイツだけらしく、カーシャは目を細めて悪人面になってかろうじて見える程度。そんな中で、ルーファスだけが綺麗さっぱり視ることも気配を感じることができなかった。

「どこどこにいるのさ？」

《ルーファス聴こえる？》

ハルカはルーファスの耳元でしゃべるが、ルーファスは微かな反応すらしない。

《ルーファスのバーカバーカバカ！》

大声を出しても変わらなかった。

仕方なくローゼンクロイツが通訳を買って出る。

「ハルカは今ルーファスに話しかけているよ（ふあふあ）。ボクが代弁してあげるよ。死んで償いやがれルーファス！」だってさ（ふあふあ）」

そんなことはひと言もいってない。

《アタシそんなこと言ってるじゃない！（なんで勝手なこと言うのー！）》

「『へっばこ魔導士なんてくたばっちなまえ！』って言ってるよ（ふにふに）」

ローゼンクロイツの言葉を真に受けてルーファスが沈む。

「そうだよ、僕が全部悪いのさ……僕が死ねば気が済むんだろ

……へへへ」

ハルカは死んでいないらしいと知りルーファスは歓喜したが、自分が原因の根底にすることでマジネガティブモードだった。

たしかにルーファスが自分を召喚したのが事件の発端だが、ハルカはルーファスをうらむにうらみきれなかった。

《ルーファス元氣出してっ。なんだかいるいるありすぎて吹っ切れちゃった。だからアタシ平氣だしさー》

落ち込むルーファスを逆に励ますハルカだが、その言葉も聞こえていない。

今から自殺の準備もしかねないルーファスなんて完全放置で、ローゼンクロイツとカーシャは勝手に会話を進めていた。

「実はね、処刑台の上でボクは刑吏に扮して、ハルカに秘薬を飲ませたのさ（ふあふあ）」

「ところでローゼンクロイツ、これはまさしくアニメの状態だな。人工的にどうやってハルカをアニメにした？（こんな芸当ができる者は、妾が知る限りいない。さすがは奇才と呼ばれるだけのことはある……あなどれん、ふふっ）」

「魔女にやり方、教えたくないな（ふにふに）。絶対悪用する気だろ？（ふあふあ）」

「……チツ（ケチめが）」

二人の中では会話が成立しているが、ルーファスにはなんのこともだかさっぱりだった。切り替えが早いときは何気に早い。

「あのさー、アニメと違ってなに？ ハルカは本当にここにいるの？」

《だからここにいるのに》

少しハルカはさびしそうな顔をした。だが、それもルーファスには見えてない。

コホンとカーシャが咳払いをした。その手にはいつの間にはフリップボードが数枚。きつと四次元胸元から出したに違いない！

「アニメくらい授業でやっただろう。まあよい、適当に座れ。今から妾がわかりやすく説明してやる」

この後、現在のハルカの状況について、紙芝居や人形劇を交えたり交えなかったりしながら、二時間ほどでカーシャが説明してくれた。

説明の途中、なぜかサスペンスあり、ラブロマンスありの話だったが、それを全部要約するところいうことだ。

肉体を失ったハルカは死ぬのではなく、アニメという魂だけの存在になってしまったらしい。幽霊の遠い親戚のようなものだ。という説明に二時間をかけた。

ハルカは家に帰れないどころか、身体まで失ってしまったのだ。まさに不幸のどん底と言ってもいい。だが、そこにカーシャが留めを刺す。

「一つ、さっきの説明でしていなかった重大なことがある。このままだとハルカは消えてしまう（これはマナの還元理論の応用なのだが、ルーファスに説明してもわからんだろうな）」

「えーっ！」

《えーっ！》

ルーファスが声をあげ、ハルカも声をあげた。事前にローゼ

ンクロイツに説明を受けていたハルカだったが、その部分は聞かされていなかったらしい。

平然とハルカ消滅を口にしたカーシャは、ローゼンクロイツにバトンタッチした。

「魔法の言ったとおりだよ（ふあふあ）。このままだとハルカは世界に還元されてしまうんだ（ふあふあ）。だからさ、ハルカのアニマを器に移す必要があるんだけど、器の手配が思うように進まなくてね、困ってるんだ（ふう）」

器とはつまり代わりの肉体のことである。

アニマの状態はとても不安定であり、少しでもバランスが崩れると、アニマを構成するエネルギー同士を繋いでいた楔が解け、世界に還元されてしまう。生き物が土に還るのと同じことだ。

ニヤリと笑ったカーシャがボソツと呟く。

「墓でも掘り返すか……なんてな、ふふっ」

「この国の九割が火葬だよ（ふあふあ）」

「わかっておるわ、冗談だ。鮮度で言えば病院の屍体安置所も

不可だな、保存状態が完璧ではない」

「シヨック死で死んだばかりが好ましいね（ふにふに）」

「この際、多少の外的損傷は仕方あるまい。最終的にはパーツを縫い合わせて一体こしらえるか？」

平然と屍体回収について話をする二人。ハルカはドン引きだった。

「アタシは屍体に入れられるのはイヤかなあ。入れられるとし

ても、傷のない女の人の身体にできればあゝ

ローゼンクロイツがため息をつく。

「警沢は言っちゃいけないよ（ふにふに）。ボクの計算ではあと六時間ほどでアニメの崩壊がはじまるんだから（ふあふあ）」

マジかつ!?

タイムリミット六時間。

《警沢言いません、間に合わせでいいから早くしてっ!》

偶然にハルカを後押ししてルーファスも叫ぶ。

「ハルカのこと助けてあげてよ、お願いだよ！（僕のせいだ、全部僕のせいだ）」

焦るハルカ。取り乱すルーファス。無表情のローゼンクロイツ。

そして、妖しく笑うカーシャ。

「妾の取って置きを使うか。だが、あくまで一時的な応急手段だな」

妖しすぎる笑みを浮かべるカーシャ。この女はいつたいなにを企んでいるのか？

そんなこんなで、一時的な応急手段を取るため、ハルカはカーシャに連れて行かれた。

アニメ状態のままハルカが連れて来られたのは、ルーファス宅から程近い場所にある商店の立ち並ぶ地区だった。

ごんまりした二階建ての石造りの店。看板にはこうある

『美人魔導士がいる店』と。ネーミングセンスがイタイ。

店の裏口に向かうカーシヤを追いかけているハルカは思った。

《はっ、まさかカーシヤの店っ！》

ほとんど毎日休業だと近所でも有名な店だ。カーシヤのヤル気なさが感じられる。

ここでハルカはなにかが脳裏を駆け抜けた。

デジャブ！

なんか同じようなことが先日あったような気がする。

外付けの階段を上り、二階の住居に上がった。

家の中は 暗い。

とにかく暗い。

電気もつけずにカーシヤはスタスタと歩いている。

《カーシヤ 電気つけてよ、見えないってば》

「なにか言ったか？（まるで調子の悪いラジオだな）」

アニメ状態のハルカの声はカーシヤには聞き取りづらいらしい。

《電気つけて！》

大声を出すと、カーシヤは仕方なさそうに頷いた。

暗闇が一気に明るくなり、部屋中が見渡せるようになった。

が、目が痛い。

ピンクのテーブル、ピンクの椅子、ピンクの家具と小物が部屋中に配置され、おまけにピンクのぬいぐるみたちが床や戸棚の上を占拠している。

目が痛いだけでなく、心もなぜか痛い。

壁などがピンクじゃなかったのが、せめてもの救いだ。  
やっぱりデジャブ！

その部屋から階段を下り、店舗である一階を通り越して地下室まで下りた。

この部屋は電気をつけなくても明るい。部屋全体がぼわわんと淡い光を放っている。

部屋を見回すと、実験装置のような物があった。

大きくて透明な円筒形の入れ物が二本あり、管の中は液体で満たされ、小さな気泡が下から上がっている。

その中に浮いていた生物を見てハルカは眼を丸くした。

《にゃ!?》

片方の筒には金魚の出目金、もう片方には黒猫が浮いていた。

《なにあれ?》

ごもつとも質問に対して、カーシャも質問で返す。

「どつちがいい?」

カーシャは出目金と黒猫を指差している。つまり、どつちが好きかということなのか?

《なにが?》

「あれは妾のペットの出目金と黒猫だ（ちなみに、ジェーソンとフレディという名前だった）。屍体となつたあの者たちを大事に保存しておいたのだ（蘇りの秘薬のためにな）」

焦りがハルカの脳内を駆け巡る。ヤバイ、ヤバすぎる予感がある。どう考えても、そうとしか考えられない。

《にゃははは、だーかーらあ、どういうことですかあ?》



にこやかに焦るハルカにカーシャは淡々と返す。

「どっちが好きかと聞いているのだ（妾のおすすめは出目金だ。持ち運びに便利だからな……水がないと死ぬがな……ふふふっ）」

《……黒猫がいいかもあ（てゆーか、どっちもイヤみたいな）》

「では、黒猫の屍体を使用するぞ（出目金がおすすめだったのだがな、しかたない）」

《使うってどういうことですかあ？》

徹底的にとぼける構えだ。このままとぼけとおすことができ  
るのか！「物分かりの悪い娘だ」

《まさかネコさんの中に入れてことじゃないよね？》

「そうだが、なにか不満か？」

ハルカしばしの沈黙。

《……（人間じゃなくて、ネコ）》

「では、はじめろ……ふふふ、ふふふふふ」

カーシャの口の端が少し上がった。カーシャがこの妖しい笑  
みをやると本当に恐い。だってなにが起こるかわからないもん。

「カ、カーシャ、はじめるって、な、なにを？（な、なにで笑  
ってるのこのひとは!?!）」

ハルカ大ピンチ！

そしてデジャブ！

ハルカは全てを思い出した。そうだ、この場所でなんちゃつ  
て改造手術を受けて、頭にアンテナ生やして学院に送り込まれ

たのだ。

恐怖に苛まれてハルカは猛ダツシユで逃げようとした。が、カーシヤは床を滑るように移動して、ハルカの前に立ちはだかる。

「逃げるのか？（ふふ、逃げてても無駄だぞ）」

《逃げるなんて……ちよつとトイレ（カーシヤ、恐い）》

「アニメ状態でトイレに行きたくなるわけないだろう？」

《あ、あの、カーシヤ、ちよ、ちよつと心の準備が……（殺される！）》

殺されはしないと思うが、いい実験台にはされるだろう。ハルカ危うし！

アニメ状態のハルカの首に魔導チエーンが巻きつき、グッと引つ張られる。

「やるぞ」

《やつぱり、黒猫っていうのはちよつと》

「では、出目金にするか？」

《……黒猫でお願いします（こんな選択肢反則よ！）》

魔導チエーンに引つ張られながら、ハルカは研究室の奥へと消えていった。

ハルカの運命はいかに!?

ハルカは思う。

「（人間じゃない自分の姿を見て、どう思うんだろ）」  
ルーファス宅の玄関に立つカーシヤ。その手には携帯用のペ

ットハウスが持たれていた。

ドアは内側から開かれた。

「お帰り！」

飛び出してきたのはルーファスだった。

ルーファスはすぐに辺りを見回しハルカの姿を捜した。だが、そこにいるのはカーシャだけだった。

「ハルカはどこ？」

「安心しろルーファス。ハルカならばここにおる」

ペットハウスがガタガタ揺れ、カーシャはペットハウスを地面に降ろしてフタをあけた。

中から黒くしなやかな前足が伸びた。

思わずルーファスの顔が『えっ!?!』になる。

ペットハウスの中から出てきたのは黒猫。でも、ただのネコじゃない。なんと、このネコは人間の言葉をしゃべれるのです！

「……ルーファスただいま」

聞き覚えのある声だった。そして、ルーファス驚愕！

「は、ハルカ〜っ!?!」

黒猫「ハルカは小さく頷いた。

「ネコになっちゃった（出目金よりはマシでしょ？）」

しばし沈黙のルーファス。彼が次に取った行動は、カーシャの胸倉をつかむことだった。

「ど、どういふことだよ？（ネコってなんで？ カーシャがネコ好きなのは知ってるけど）」

「ルーファス、そんなに妾の胸を触りたいのか？」

「ちゃ、違うよ！」

カーシャの胸倉からすぐに手を離し、顔を真っ赤にしたルーファスが後ろに飛ぶ。

「僕の話は濁すなよ！」

「応急手段と言っただろう。それにな、思わぬ副作用でハルカは魔導具なしでこちらの世界の言語を理解ししゃべることができようになったぞ」

黒猫になったハルカはワザとらしく、ネコっぽく、ルーファスの足に顔を擦り擦りした。

「にゃ〜ん　そういうことだからよろしくねっ！」

「はあっ？（なんで、こうなるの!?)」

ルーファスは頭を抱えて悩んだ。頭痛が襲う……可哀想なのはいつたい誰なのか？

黒猫見習いのハルカと、なんちゃって魔導士ルーファスの生活が幕を開けちゃう雰囲気だ。

果たしてハルカは人間に戻ることができるのか！　むしろ家に帰ることはできるのか？

ハルカの運命はどうなってしまうのか!?

と問題山積みだ。

とにかくハルカとカーシャを家の中に上げた。

リビングではハルカたちの帰りを持っていたローゼンクロイツが、デリバリーで注文したイチゴパイを無表情で食べていた。近くにはピザもある。

黒猫がハルカだとすぐにわかったローゼンクロイツが思わず立ち上がった。ローゼンクロイツにしてはリアクションが大きい。手にはイチゴの乗ったスプーンを持ったままだ。

「まさか、本当にこうなるとは思ってもみなかったよ（ふあーっ！）。新世界の幕開けは近いね（ふにふに）」

意味不明の発言だ。

眼に感情を宿さないまま、ローゼンクロイツの口元だけが笑みを浮かべた。クリームのついた口元がチャーミングだ。

ローゼンクロイツの手が素早く動いた。スプーンに乗ったイチゴがパクツと口の中に放り込まれ、そのスプーンがハルカを指し示す。

「キミは神だ（ふあーっ！）」

声音はヒツジ雲みたいな感じだが、なんかよくわかんないけどスゴイ気迫が感じられる。

「アタシが神っ!？」

言われたハルカも戸惑いを通り越して啞然だ。

ローゼンクロイツの『キミは神だ』発言。この発言は愛の告白よりもある意味衝撃的な発言だ。

「今からその説明してあげるよ（ふあふあ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。そして、ローゼンクロイツの説明がはじまった。

「細かい話はめんどくさいから抜かすよ、国を乗っ取るう（ふあふあ）」

衝撃の告白第二弾、『国を乗っ取る』発言。ハルカ固まる。

ルーファスはあごが外れた。

細かいどころか、話を飛ばしすぎだ。

数秒の時間を要してハルカとルーファスが叫ぶ。

「国を乗っ取るってどういうこと！（この人テロリストなの？）」

「ちよつと、待った、なんで国を乗っ取るんだよ？（ローゼンクロイツはなにを考えているんだ？）」

話が混沌としてきた中で、勝手にお茶をいれて飲んでいるカーシャだけが平然としていた。けれど、その口元は微妙にニヤニヤしている。

「ローゼンクロイツ、本当に国を乗っ取る気なのか？（ふふふつ、妾の血が騒ぐ）」

「国を乗っ取るのは魂の解放、全てのモノを天へと導くのはボクの使命（ふあふあ）」

幼い頃からローゼンクロイツと付き合いのあるルーファスが知る限り、ずっと電波系の子供で、しかも危ない思想を持った人物だった。よくこんなヤツが司祭や弁護士をしてみるもんだとルーファスは思う。

天を見つめるローゼンクロイツが身体をクルクル回転させる。電波を受信しているのかもしれない。

「クロウリーの書庫でいつも遊んでいたボクは、ある本と運命的な出逢いをしたんだ……ある意味偶然（ふっ）。アースは地獄だとされる書物が多い中、それには正反対のことが書かれていたよ（ふあふあ）。アースは真の楽園だよ、そのアースから

きた者が世界を統治し平穩をもたらすんだ、素敵だろ（ふあふあ）。そしてね、預言書も見つけたよ、アースからきた救世主は死の後に蘇る（ふあふあ）」

全てはそこからはじまった。

ピタツと回ることをやめたローゼンクロイツの眼が輝く。澄んだエメラルドグリーンの瞳に浮かぶ六芒星。

「だからボクはいつか来る戦いに備えたんだ（ふあふあ）。ボクが 薔薇十字 の教祖 薔薇の君 さ（ふにふに）」

クラウス王国で主に活動する秘密結社 薔薇十字。秘密とされながらも国民の大半に知られる公然の秘密の組織である。

その活動内容はとくに重い病を患う者を無料で救い、一部の特権階級しか知らない秘術などを一般人に広める活動をした。た。

慈善活動をやっている団体のようではあるが、国やガイア聖教を主にした宗教団体に目をつけられ疎ましく思われていた。

理由の一つ目は国の最高機密である秘術などが、この秘密結社によって一般人にも広まってしまっていたからだ。二つ目は、

一般人には手を出さない 薔薇十字 だが、ガイア聖教には積極的な攻撃を仕掛け、式典の妨害など過激な活動もしていた。

六芒星を映した瞳がルースファスたちを射抜く。

「ボクらが政府やガイア聖教と仲が悪いのは知ってるだろ（ふにふに）。でもね、本当の敵はガイア聖教とも繋がっている魔法結社 銀の星 さ（ふにふに）」

ローゼンクロイツの独断場と化してしまっただこの場。このま

まだと絶対に大事に巻き込まれてしまう。そんなのイヤだ。だからハルカは前足を挙げた。

「はい、そんなことよりもアタシは自分の世界に帰りたくなった（ルーファスの友達って滅茶苦茶な人多すぎ。カーシャとローゼンクロイツしか知らないけど）」

ピンクのカップでお茶を飲んでいたカーシャがハルカに視線を向ける。

「だがなハルカ。おまえがこの世界の召喚された理由を考え、その契約に基づくならば、おまえは世界征服をしなくてはいけなかったはずだ。つまり、世界征服を達成することにより、おまえの世界に強制送還される可能性があるぞ（思いつきで適当に言ったのだが）」

「アタシそんなことできないってば！（世界征服なんてできるわけないじゃん）」

「方法が見つからぬのであれば、思いつく限りのことをやってみるしかあるまい（世界征服か……血が騒ぐな、ふふっ）」

「そういう問題じゃないし。そんなことよりアタシの身体を元に戻してよ！（なんかもうサイテー）」

もとの世界に戻る前に、まずは身体を元に戻すのが先決で、ごもつともな意見だ。このまま猫のまま帰ったら大変なことになるのは目に見えている。

話を一通り聞いていたルーファスが、自身なさ気に手をゆつくりと挙げた。

「あー、さっきは思いつかなかったんだけど、ネコじゃなくて



ホムンクルスにハルカを移せばよかったんじゃないかな？」

鋭い指摘にローゼンクロイツもカーシャも動きを止め、ハルカの中で風船が爆発した。

「なんかもつといい方法あつたわけ？　なんで早く言わないのバカじゃないの！」

「ごめんハルカ。ごめんねハルカ（責任は僕が取る。身体も戻すし、ハルカの世界にも帰すよ）」

今回はネガティブモードを発動させることなく、ルーファスはため息をついて俯くだけだった。そんなルーファスを見ると怒るに怒れず、ハルカは押し黙ってしまった。

いろんな感情が入り乱れ、ハルカはなにがなんだかわからなかった。

ソファからルーファスが立ち上がる。

「パラケルスス先生を訪ねよう。ホムンクルスを応用してハルカのクローンを作ることが可能かもしれないから。それから、今日はもう遅いから、ピザ食べたら帰ってね」

疲れたように全員に背を向けてルーファスは寝室に消えていく。

その途中で、ゆつくりと振り向きハルカに告げた。

「必ず元の身体に戻してあげるから。それとさ、ハルカはネコになつたんだし寝室のベッド僕が使つていいよね、ねっ、ねっ？（久しぶりのふかふかベッド！）」

「う、うん」

「ありがとう（今日はぐっすり眠れそうだあ）」

スキップしてルーファスは寢室に消えた。

さてと、ピザを食べようとハルカがテーブルを見ると、ない！

ピザがない！

ハツとしてハルカは二人を見た。

何食わぬ顔をしているローゼンクロイツとカーシャの口元には、トマトソースがついていた。

「アタシも寝るっ！」

こうしてハルカのネコとしての一日目が幕を閉じた。

第11話 鼻血で胸焼け

絶対にカーシャはついて来るな。

と、念を押してルーファスとローゼンクロイツはお出かけした。

今日も洗濯日和な街中を、携帯用のペットハウスを持って闊歩する。もちろん、この中には黒猫のハルカが入っている。

ここ数日、魔導学院は補修工事と国宝盗難事件を受けて、休校処置が取られていた。

学院の正面門は固く閉ざされ、見張りの職員が目を光らせて立っている。

二人は学生証を提示して開門を要請したが、職員は首を横に振った。

「職員以外の出入りは禁止されています」

「ケチ（ふっ）」

ローゼンクロイツは吐き棄てて、思わぬ速さで動いた。

ルーファスの手首を掴み、ペットハウスが振りかぶられたあ

ッ！

ズゴーン！

ルーファス叫ぶ。

「ハルカー！」

顔をペットハウスで強打された局員が吹っ飛ばす。

ローゼンクロイツが門を軽やかに飛び越える。  
ルーファス叫ぶ。

「ローゼンクロイツ！」

ローゼンクロイツは控えていた残りの職員を殴り倒す。

開閉ボタンが押され門が開いた。

全てアツという間の出来事だった。

慌ててルーファスがペットハウスのフタを開けると、息絶え

絶えのハルカが睨みを利かせていた。

「る、るーふあす……シネ！」

「私じゃない、ローゼンクロイツがやったんだよ！」

実行犯の姿を探すと、すでにない。

這い上がるゾンビのように職員が立ち上がるうとしていた。

たたかう

魔法

アイテム

にげる

ルーファスは逃げるを選択した。

しかし、いきなりつまずいてコケた。

どてつ。

ペットハウスの中のハルカが大震災に襲われた。

「ルーファス！」

怒られながらルーファスは立ち上がって、必死に逃げる。

思いつきり腕を振って走るものだから、ペットハウスの中は揺れに揺れた。

「ルーファスってば！」

「緊急事態だから我慢して！」

「イタッ！」

「世の中、我慢と忍耐も必要だよ」

追っかけてくる職員を振り切り、ルーファスは学院の地下に逃げた。

静まり返った廊下に足音が響き渡る。ときおり、ゴツン、ガツンと聞こえるのはご愛嬌だ。

パラケルススの研究室の扉の前で、ローゼンクロイツが体育座りをしていた。無意味に憂いを含んだ虚ろげな表情が胸にグツとくる。

「待ってたよルーファス（ふあふあ）」

「待ってたってさ、私を置いて逃げるなんてヒドイじゃないか」

「キミの足が遅いだけだよ（ふっ）」

無表情な顔の口元が歪み、すぐに元に戻る。相手を小ばかにした笑いだ。

ルーファスの持っているペットハウスが内側から大暴れして揺れた。

「早くここから出して！」

キーキー甲高い喚き声でした。

すぐにペットハウスを床に下ろすと、フタに突進して無理や

りハルカが出てきた。

「もつと丁重に扱ってよ（身体中イタイし）」

「ごめんねハルカ」

頭から湯気を出して怒るハルカに謝るルーファスだが、謝ってばかりのルーファスを見てハルカのほうが情けなくなってくる。

「もういいよ、次から気をつけてね」

シヨボーンとするルーファスをほっといて、すでにローゼンクロイツは研究室のドアをノックしていた。

「失礼するよ（ふあふあ）」

返事を待たずに勝手にドアを開けて中に入る。カーシャとはまた違った自分勝手な感じだ。

カーシャは自分が一番。

ローゼンクロイツは周りを見てない。

研究室の中には、山吹色の魔法衣を着た初老の男性　パラケルススがいた。

「学院は休校のハズじゃが？」

「……知らなかった（ふあふあ）」

どこまでがマジボケなのかわからない。

ルーファスはハルカを胸の前で抱きかかえ、パラケルススにハルカの姿を見せた。

「このネコ実は人間なんです」

「うむ、詳しく話してくれんかね？」

「いろいろあったんですけど、身体を失ってしまつて緊急的に

「アニマをネコに移したといふかなんというか、とにかくもとの身体に戻るために、パラケルスス先生のホムンクルスの技術でどうにかならないかと……」

「まさか、処刑されたというアースから来た子かね？」

「ええ、まあ（鋭いなあ）」

液体を満たした硝子ケースの中に浮かぶ人型の器　ホムンクルスを見ながら、ローゼンクロイツがボソツと呟く。

「その子のアニマをボクが抜いて、猫に移し変えたのは魔女カーシャだよ（ふにふに）」

「アニマを抜くじゃと？（やはりローゼンクロイツは侮れんな。魂移しの儀　を成功させたカーシャもじゃ）」

驚きで眼を剥いたパラケルススの視線は、黒猫のハルカに注がれていた。研究者としてとても興味のある存在なのだろう。

「アニマを取り出し、別の入れ物に移し替える。それはつまり不老を手に入れることに等しい。」

「わしに作れというのは、この子の元の身体の形をした器じゃな？」

研究室内にあるホムンクルスは人間と寸分変わらぬ再現率だ。これならばハルカの肉体を再生させることも可能かもしれない。しかし、ローゼンクロイツは知っていた。

「ハルカの肉体を作るためには、ハルカが人間だったときの細胞が必要なんだ（ふにふに）。すでに火葬されたらしいよ（ふあふあ）」

ハルカ&ルーファスが啞然とした。

なんでそんな大事なこと早く言わないんだよ！

「今まで忘れてたよ、そのこと（ふあふあ）。ホムンクルスを見てから気づいた（ふにふに）」

忘れてたでは済まない。希望を持たせといて、崖から突き落とされた気分だ。

ハルカの頭が真っ白になった。

グッドアイディアだと信じて疑わなかったルーファスも頭真っ白だ。

パラケルススの細い手がハルカに伸びる。

「髪の毛一本でもあればいいのじゃが。少し調べたいことがあるので、わしにその子を預けてくれんかね？」

「はい、お願いします」

ルーファスは抱いていたハルカをパラケルススに渡そうとした。その二人の間にローゼンクロイツが立ちはだかつて邪魔をした。

「良くないよパラケルスス（ふあふあ）」

「なにがじゃね？」

「ボクにはわかるよ、人の良さそうな老人の顔をしているけれど、一瞬だけ邪気がした（ふあふあ）」

エメラルドグリーンの瞳がパラケルススを見据えていた。

恩師に向かってとんでもないことを言うローゼンクロイツに、さすがのルーファスも怒りを露わにした。

「なんてこと言うんだよ、パラケルスス先生が悪いこと考えるはずないじゃないか！」



「ルーファスは甘いね（ふあふあ）。ここにいるハルカは研究対象として、どれだけの価値があると思っっているんだい？（ふにふに）」

それは不老の可能性。

ローゼンクロイツを前にして、パラケルススが後退りをした。「ふおふおふお、錬金術師の研究のひとつである不老不死に、この猫は精通するものがある。じゃがな、わしは医学には興味があるが不老不死には興味がない」

「ほら、ローゼンクロイツの思い過ごしじゃないか（そうだよ、僕がどれだけパラケルスス先生にお世話になったことか）」

軽く笑って済ませようとしたルーファスの思惑を、ローゼンクロイツは見事に打ち砕いた。

「ボクの思い過ごしなら、パラケルススが左手に隠し持ってる注射器も目の錯覚だね（ふにふに）」

張り詰めた空気が蜘蛛の巣のように張り巡らされ、ルーファスは場に捕まってしまった。

硬直していた場でいち早く動いたのはパラケルススの左手だった。

その手から注射器がダーツのように投げられ、ローゼンクロイツの顔面に襲い掛かる。

「ライトシールド（ふにふに）」

光の盾に弾かれて注射器の細い針が折れた。

弾かれた注射器が地面に落ちるよりも早く、パラケルススは立て掛けてあった自分の杖を手にしていた。

杖の先端についた紅い宝玉が唸る。

「エントよ、力を貸したまえ！」

パラケルススの声と共に、杖についた宝玉から太い木の根が飛び出し、生き物のようにしてローゼンクロイツ襲い掛かる。

華麗にを躲すローゼンクロイツだが、蛇のようにうねる根が執拗に追いかけてくる。

そんなことより、根をアクロバティックに躲すローゼンクロイツに驚きだ。

実は運動神経抜群だったりするローゼンクロイツ。しかも学校での成績はトップクラスで嫌味以外のなにものでもない。ただし、いつも出席日数がピンチらしい。

ドレスの裾を揺らしながら、バク転するローゼンクロイツ。黒いパンツが見えた！

違った、スパッツだった。

状況がつかめず、啞然と立ち尽くすルーファスに抱かれているハルカが叫ぶ。

「ルーファス逃げて！」

「え、あ、なんでパラケルスス先生が!？」

納得できていないが、そんなことを考えてる余裕はなかった。木の根に追われるローゼンクロイツがいち早く研究室を脱出し、すぐにルーファスもハルカを抱きかかえたまま走り出した。

魔導学院の廊下は巨大な魔導具や機材などを運ぶことができるように、場所によっては横幅が五メートル以上ある。その廊下いっぱいには広がった木の根がルーファスたちを追ってくる。

階段の近くにある広いホールが見えてきた。そこで迎え撃つ  
しかないか？

しかし、そこには長身の人影が立っていた。

黒尽くめで魔導具をジャラジャラ身につけているのは 黒  
魔導教員ファウストだ。

木の根に追いかけられているルーファスたちを見て、ファウ  
ストが手に魔導エネルギー体マナを集中させた。

「ダークフレイム！」

ファウストの手から放たれた暗黒の炎がルーファスたちを掠  
め、後ろに迫っていたいた木の根を一瞬にして黒い灰へと変え  
た。

「おまえたち、ここでなにをしているのだ？」

ルーファスたちがファウストの問いに答えるよりも早く、こ  
の場にパラケルススが追いついてきた。

「そやつらは重罪人じゃ、ファウストよ捕まえるのを手伝って  
くれ！」

状況が今ひとつ掴めず、顔をしかめたファウストにルーファ  
スが訴える。

「違います、パラケルスス先生が私たちに急に襲って来たんで  
す！」

「ルーファスの言うとおりだよ（ふにふに）」

誰が真実を言っているのか、それを見極めることはファウス  
トにはできなかつた。彼を信用させるには いや、彼を味方  
につける方法はこれしかない。

ローゼンクロイツが懐から一本の羽根を取り出した。

「ファウスト契約を結ぼう（ふにふに）。代償はこのハーピーの羽一本でどうだい？（ふあふあ）」

「良かるう、契約を結ぼう。これが契約書だ」

ファウストは腰に身に着けていた契約書と羽ペンを出し、ローゼンクロイツに突きつけた。

ハーピーとは海に棲む鳥人で、その美しい歌声で船乗りたちを惑わす怪物だ。それでローゼンクロイツとファウストは契約を結んだ。

ローゼンクロイツは羽ペンを受け取り、契約書にサインをした。

「ひと段落したら羽は渡すよ（ふにふに）」

「クク……契約成立だ。契約を破った場合は命を代償とするから覚えておけよ」

契約絶対主義者のファウストを味方につけるにはこれが一番の方法だった。

パラケルススと対峙するのは三人と一匹。明らかにパラケルススに分が悪い。

だが、廊下の先から裸体の女性が三人、こちらに向かって駆け寄ってくる。パラケルススの研究所にいたホムンクルスだ。

これで四対三と一匹だ。

なんの恥じらいもなく生まれたまま姿でそこに立つホムンクルスを前に、ルーファスが急に腹痛でも起こしたみたいになんかがみ込んでしまった。

「ごめん、鼻血出た（ヤバイ、向こうを見ることすらできない）」

鼻血をドボドボ落とすルーファスの横でハルカはため息を吐いていた。

「（……この人ダサイ）」

ルーファスはあまり女性の裸などに慣れていないらしい。免疫ゼロ。

戦闘不能に陥ったルーファスを呆れながら見守るハルカ。

「上向いちや駄目よ、食道に血が入るから」

「えっ、鼻血のときは上を向くんじゃないの？」

「それ間違った対処法なんだって、こないだテレビで見た」

「へえーそうなんだ（だから鼻血のあと胸焼けとかしてたのかな）」

なんて二人が呑気に会話してる最中も、ローゼンクロイツとファウストはパラケルススたちと攻防を繰り返していた。

肉弾戦で襲い掛かってくるホムンクルスの攻撃を躲し、ローゼンクロイツは軽やかに隠し持っていた短剣をホムンクルスの胸に突き刺した。

「ライト！（ふあふあ）」

ローゼンクロイツが呪文を唱えると、短剣を伝わってホムンクルスの身体が輝き、その身体を一瞬にして銀の砂へと変えてしまった。

動くたびにジャラジャラ鳴らすファウストは、腰に見つけていた丸めた羊皮紙を一枚取り出した。

ホムンクルスに向かって広げられた羊皮紙には、幾何学的な模様と呪文が描かれている。

「喰らえ！」

ファウストが叫ぶと、羊皮紙の中から黒龍が飛び出し、鋭い牙の生えた口を開けてホムンクルスを二体続けて丸呑みした。

巻き戻しのように黒龍が羊皮紙に戻ると、ファウストは素早く羊皮紙を丸めてたたみ、紐でしっかりと縛った。

残るはパラケルススだけだった。

杖についた紅い宝玉の後ろに手を翳したパラケルスス。

「フレア！」

宝玉から紅蓮の炎を放出した。

ローゼンクロイツの口が一瞬だけ歪み、すぐに元に戻る。

「デイスペア！（ふにふに）」

渦を巻いていた紅蓮の炎は、ローゼンクロイツを前に突如として消滅してしまった。まるでなにもなかったように消えたのだ。

パラケルススが啞然としたのは刹那であったが、ファウストはその隙を見逃さない。

「シャドウソウ！」

幾本もの細い針がパラケルススの影に突き刺さる。影縫いだ。影を縫われたパラケルススは、その本体の身動きをも封じられてしまった。

追いつきをかけるようにローゼンクロイツの指から輝く鎖が放たれる。

「エナジーチェーン！（ふあふあ）」

光の鎖がパラケルススの身体を雁字搦めに固定する。もう身動きひとつできない。顔の筋肉を動かすのがやっとだ。

結局なんの活躍もしなかったルーファスだが、まだ鼻血が止まらず軽い貧血とは戦っていた。彼にとっては壮絶な戦いだ。

身動きひとつできないパラケルススの前にローゼンクロイツが立つ。そして、深く澄んだエメラルドグリーンの瞳に六芒星が宿る。

「どうしてボクたちを襲ったんだい？（ふにふに）」

「もしも黒猫が姿を現したら捕まえるように言われておったのじゃよ」

「なぜ？（ふにや）」

「銀の星の首領 666の獣の命令じゃからじゃよ」

どこからか風を斬る音が聴こえた。

パラケルススの眼が飛び出た。刹那、彼の首は宙を舞い、瞬時に頭も胴も銀の砂と化して崩壊してしまった。

銀の砂と化したパラケルススの向こう側にある壁に、大鎌が回転しながら突き刺さった。誰もが大鎌の飛んできた方向を振り向いた。だが、そこには誰もいない。

ファウストの背中が血を吹いた。

「くっ、何者だ!?（心配すらしなかったぞ!）」

振り向いたファウストの腹に巨大な力が加わり、大柄なファウスト身体は六メートル以上も吹っ飛ばされ、激しく壁に叩きつけられてしまった。

床に落ちたファウストは項垂れたまま首を上げることにはなかつた。

敵がどこにいるかまだわからない。

心配すらしらない。

ローゼンクロイツの瞳が六芒星を映し出す。

「……見つけた（ふにふに）」

床を叩く激しい鞭の音が鼓膜に響いた。



第12話 ゆけ、ねこしゃん大行進！

全員の視線が集まったそこに立っていたのは、蝙蝠のような漆黒の翼を持つ悪魔 エセルドレーダだった。

ボンテージ姿に身を包むエセルドレーダの手には黒い鞭が握られている。その鞭が床の上で踊るたびに、甲高い音が廊下に木霊した。

エセルドレーダは人差し指を熟れた口の中でしゃぶり、緋色の眼はローゼンクロイツを恨めしそうに見つめていた。

「本当はアナタの首を刎ねてやりたかったのに、我が君のお許しがでなかったわ」

「キミがボクのことをいつも睨んでいるのは知ってるよ（ふあふあ）」

視線を滑るように移動させ、次にエセルドレーダが見たのはハルカだった。

「我が君はアナタを欲しているわ。はじめて出逢ったときから、我が君はアナタに惹かれていた。アナタが死から復活したことを知り、その想いはより強いものへと変わった」

腐臭が霧のようにあたりに立ち込め、エセルドレーダの足元から汚泥が沸き立つように闇が姿を見せた。

沸き立つ闇はエセルドレーダの感情が具現化したものだった。

嫉妬。

「アタシが我が君に愛されることはない、ただの奴隷だから。傍にお仕えで消えれば本望よ。でも、許せない、許せない、許せない。我が君に愛されるアナタたちが許せない」

「ボクはクロウリーがキライド（ふあふあ）」

柳眉を逆立てるエセルドレーダの前に、ローゼンクロイツの声音に感情はない。

軟鞭が撓った。

ローゼンクロイツは動かなかった。その胸元の衣服は刃物で切られたように口を開けていた。

「クロウリーの命令がなければ、ボクを殺せないのかい？（ふにふに）」

「くっ！（今すぐにも殺してやりたいのに）」

「やっぱりキミはクロウリーの犬だ（ふあふあ）」

「アンタこそ、我が君にどれだけの支援をされて、今があると  
思ってるのよ！」

幼い頃からクロウリーに経済的支援と愛を受けてきたローゼンクロイツ。それを全て見てきたエセルドレーダにとって、ローゼンクロイツは嫉妬の対象でしかなかった。

目の前にいるのに殺せない。身体の芯から熱く火照り、欲情にも感情がエセルドレーダの脳内を支配する。

「アタシが殺すなど言われているのは二人だけ」

緋色の瞳に映し出されるルーファスの姿。

エセルドレーダが床を蹴り上げ飛翔した。

巨大な翼を携えたその姿はまさに魔鳥のごとく獲物を狙う。

眼を丸くしたままルーファスは動けない。蛇に睨まれた蛙。美女に狙われたルーファス。

鞭がルーファスに襲い掛かり、ハルカが叫ぶ。

「ルーファス！（危ない！）」

鞭は宙に輝線を残し、紙一重でヘッドスライディングしたルーファスの足元を掠めた。

次の攻撃はどこからくる!?

来ない？

エセルドレーダの織手はルーファスではなくハルカを捕らえようとしていた。

「放して！」

喚くハルカの首根っこを鷲掴みにし、エセルドレーダは妖艶な笑みで唇を舐めた。

「我が君の命令が優先よ。この仔猫ちゃんはいただいていくわ」

高らかな嘲笑が木霊し、ハルカを胸に抱いたエセルドレーダの身体が、墨汁を垂らしたかのごとく闇に侵食されていく。

「助けて！」

悲痛なハルカの叫びがルーファスの鼓膜を振るわせる。

「ハルカ！」

闇に溶けていくハルカにルーファスが手を伸ばした。だが、間に合いそうにない。

虚しく伸びるルーファスの手の横を輝く鎖が抜け飛んだ。口  
ーゼンクロイツの放った魔導の鎖 エナジーチェーンだ。

魔導の鎖は先端で四つに分かれ、エセルドレーダの四肢を捕らえた。

「ルーファス手伝え！（ふにふに）」

珍しくローゼンクロイツが声をあげた。

魔導チエーンを握っているローゼンクロイツの身体は少しづつ引きずられていた。

すぐさまルーファスも魔導チエーンを握り締め、手に汗が滲むほどに力いっぱい引つ張った。

力が込められるのと比例して、徐々にエセルドレーダの身体が闇の世界から引きずり出されていく。

「はつくしょん！」

誰かがした突然のクシャミで、エセルドレーダは不意を衝かれハルカがその隙に逃げる。

軽やかに床にジャンプし、ハルカはすぐにルーファスのもとへ走った。

ルーファスは額に汗を滲ませ動きを止めていた。

エセルドレーダは苦々しい顔で先を見つめていた。

ハルカはまだ気づいていなかった。

大きなクシャミが引き金となり起こる現象を、ローゼンクロイツを知る者ならば誰も知っている。

蒼い顔をしたルーファスは脳ミソをフル回転させて、現状を分析した。

身体をムズムズさせているローゼンクロイツ。

その頭になぜか猫耳が生えた。

おまけにしつぽまで生えた。

そして、意味不明な言葉を発する。

「ふあふあ〜っ」

空を漂う羊雲のような声を発したローゼンクロイツ。

「ハルカ逃げるよ！（ヤバイ、タイミングも悪い）」

ローゼンクロイツの変化を見たルーファスは大声で叫んだ。

「なにがどうしたの？」

状況がつかめないでいるハルカはすでにルーファスの腕の中  
だった。

「ローゼクロイツの 猫返り だよ。一種の発作でトランス状  
態でなにを仕出かすかわかったもんじゃないよ！」

ローゼンクロイツの 猫返り とは、一種の発作のようなも  
のである。いつ起こるともわからないその発作を起こすと、ロ  
ーゼンクロイツの身体はキュートな猫人へと変身してしまうの  
だ。

しかもだ。

猫人となったローゼンクロイツの口元が一瞬だけ歪み、すぐ  
に無表情になる。

「……ふっ」

次の瞬間、ローゼンクロイツの身体から大量な“ねこしゃん  
人形”が飛び出した。しかも、ねこしゃんは止まることなく放  
出され続けている。

『ねこしゃん大行進』発動！

猫返り 時のローゼンクロイツは記憶がぶっ飛び、トラン

又状態になる。人間の言葉も通じないし、意味不明な破壊活動も行なっちゃうのだ。つまり、手に負えなくなる。

今のローゼンクロイツは最凶の魔導士だ。

ローゼンクロイツの身体から放出される大量のねこしゃん人形。それは止まることなく、休むこともなく、二足歩行でそこからを元氣いっぱい走り回る　いや、暴れまわる。

ねこしゃんたちが壁に当たり、障害物に当たり、大爆発を巻き起こしていく。

この魔導は勝手気ままに走り回るねこしゃんたちが、なにかにぶつかる時『にゃん』とかわいらしく鳴いて、手当たり次第に大爆発を起こす無差別攻撃魔法だったのだ。

しかも、一匹目がど〜んと大爆発すると、爆発が爆発の連鎖を呼んで、そこら中で大爆発が起こってしまう。

硝煙を爆風が消し、轟音とともに再び硝煙が視界を遮る。戦乱の中に放り込まれてしまったような有様だ。

煙の中で微かに見える建物を確認するルーファスは汗びっしりだった。

「階段どこだかわかる？」

ルーファスに抱かれたままのハルカは、聞かれて顎をしゃくって方向を示す。

「たぶん、あつ……あーっ!？」

「あーっ！」

ハルカの見たものをルーファスも見て叫んだ。

一階へ続く螺旋階段はすでに爆発によって崩落していたのだ。

すぐにルーファスは方向を変えて走り出した。

「別の階段に行こう、こっちに道があるはず」

視界を遮る煙の中で走る行為は、闇の中で走る行為に等しかった。

ゴンツ！

鈍い音を立ててルーファス転倒。ハルカが宙を舞う。

「イタツ！（壁に頭ぶつけた）」

頭を押さえるルーファスの傍らで、見事に着地したハルカはすぐに辺りを見回した。

「ルーファスこっち！」

ハルカが顎をしゃくった先に長い廊下が見えた。

混乱に乗じてルーファスとハルカは廊下の奥へと走り去っていった。

それをエセルドレーダが追うことはなかった。

魔導に対して耐久性のある魔導学院の壁が崩壊していく。

主人の城が壊されていくさまを見て、エセルドレーダの瞳に憤怒が宿る。

「もう許さないわよっ！（傷つけるだけなら、あとで再生が効くわ）」

障害物のねこしゃんを軽やかに躲し、軟鞭を振るうエセルドレーダがローゼンクロイツに襲い掛かる。

一方のローゼンクロイツは天井を見上げながらクルクルステップを踏んでいる。攻撃を躲す気、ヤル気ともにゼロだ。完全にトランスして、イツちゃっている。

ねこしゃんの放出量が増えている。

一斉にねこしゃんがエセルドレーダに襲い掛かった。

エセルドレーダに向かって微笑むねこしゃん人形。目と目が合い、芽生えるトキメキ。そして、恋（？）は激しく燃え上がった。

にゃ〜ん

といっぱつ大爆発！

そして、エセルドレーダの視界は真っ白の世界に包まれたのだった。



### 第13話 宿命の救世主

どうにか一階まで逃げ出して、ルーファスとハルカはそのまま走り、中庭が真横に隣接する回廊を抜けようとしていた。

突如、警報ベルがけたたましく響き、辺りを騒然とした空気で包んだ。

廊下にシャッターが降り、ルーファスたちの行く手を阻む。すぐに後ろに引き返そうとするが、後ろのシャッターもすでに降りている。残る道は中庭しかなかった。

誘導されるように出されてしまった中庭で、不安そうな顔をしてルーファスたちは足を止めた。

学院内にはいくつもの中庭が存在しており、ここは噴水広場と呼ばれる中庭である。芝生が広がる中央に、女神像が水浴びをする噴水が設置されている。

噴水から吹き上げられた水しぶきが陽光を浴びて煌く。その輝きを呑み込むような闇が傍らに立っていた。でも、ちっこい。

世にも美しい童子　魔人クロウリー。

「私は君が現れるのを心待ちにしていた。嗚呼、なんと崇高な姿なのか……私は君のことを心から愛しているぞハルカ」

静かで優しい音色であったが、相手がどこにいても放さないような声だった。

クロウリーがただ近づいていくだけで、ルーファスは振るえ

大地が唸る錯覚を覚えた。

すべては錯覚なのだろうか？

猫の身体を得たハルカは超感覚が研ぎ澄まされ、身を刺すような悪寒と咽返るような瘴気、そして激しい嫌悪感を覚える。

怯えるようにしてハルカはルーファスの後ろに隠れ、そこからクロウリーの顔を凝視した。

「アタシに近づくな変態！」

「ルーファス君、私のハルカを渡してくれないか？」

自分の足元でハルカを見ずとも、ルーファスの答えは決まっている。

「できません」

「ハルカは私の物だ、私の手の内にあるのが当然だろう？」

「ハルカは誰のものでもありません」

「それは違うよルーファス君。ハルカは私のものである、それは運命だ。森羅万象も思いさえも、全ては運命に従い存在しているのだよ」

クロウリーはハルカの傍らに膝をついた。その間、ルーファスはまったく動けず、遠くを見たまま瞬きすらできなかった。

「（僕はなんで動けない、今は動けないなんて最低だよ、ハルカが、ハルカが……）」

汗を大量に掻きながら、ルーファスは自分を蔑んだ。

なにもできないルーファスなど、もうここにいなかった。クロウリーはハルカのことしかすでに眼中にない。

「愛してるハルカ。こちらにおいて、君を抱きしめて放さな

い」

深く歪んだ盲目的な愛をクローリーは捧げた。

ゆっくりと伸びてくる手を見ながらも、ハルカは逃げることも動くこともできない。喉もからからに渴き、声を出そうにも出なかった。

ルーファスの呼吸が荒くなり、彼は念仏でも唱えるように同じ言葉を繰り返しはじめた。

「僕はやればできる、僕はやればできる、僕はやればできる、僕はやればできるかわかんないけど、やるっきゃない！」

ついにルーファスが吹っ切れた。急上昇するルーファスの魔導力が場の空気を換える。

風が巻き起こり、芝生が波紋を立てて波立った。

ルーファスの口が呪文を吐き出そうとした。

「タ　っ！」

「覇ッ！」

クローリーに睨まれたルーファスが、前かがみに身体を曲げて体勢のまま吹っ飛ばされた。

「邪魔をしないでくれたまえ。今から私たちは愛を語り合うのだから」

「そんなことさせない！」

地面に尻餅をついていたルーファスはすぐに立ち上がり、クローリーに向かって駆けた。

ルーファスの手が高く掲げられ、腕の周りに風が巻きつく。

「エアプレッシャー！」

グーにして伸ばされた腕から竜巻が横に放たれた。

「霸ツ！」

だが、その竜巻もクロウリーの気合いだけで一瞬にして掻き消されてしまった。

「ルーファス君、私に牙を剥くのなら、もつと殺傷力のある魔導を使って本気で掛かってきたまえ」

殺傷力のある魔導を人に向けて使うなど、ルーファスには到底できないことだった。

パラケルススも、エセルドレーダも、殺意を持って襲ってきた。

しかし、人を傷つける戦いをしていいのか、まだルーファスには判断が付かなかった。

ハルカが連れ去られようとしている。

相手を殺してまでそれを防ぐか？

ルーファスにはできない。

怯えるハルカの瞳がルーファスを見つめている。なにを訴えたいのか、その瞳を見ればすぐにわかる。

ルーファスは全速力で走った。

そして、クロウリーを押さえ込もうと飛び掛かった。

「ハルカは渡さない！」

「なぜ魔導を使わんのだ。ダークポイズン！」

汚泥のように濁った泡が大量にクロウリーの手から放たれ、ルーファスの全身にヘドロのようにへばりついた。

瘴気が針のようにルーファスを串刺しにし、一瞬にして毒が

体中を駆け巡った。

身体が痺れに襲われルーファスは地面にうつ伏せになったまま動けない。

胃から込み上げて来る吐き気。

ルーファスの顔は緑色に変色し、解毒剤を飲ませなくて死んでしまいそうだった。

苦しみに襲われるルーファスをクロウリーが見下ろしている。

「君はこの程度かルーファス君。私は君にも大きな期待を寄せたのだが、実に残念だ」

「……僕は……最初から期待されような……人間じゃない」

「君の体の中には、君の力ではない大いなる力が宿っている。

所詮は他人の力、君はそれをうまく使うことができなかった」

クロウリーは空に気配を感じた。

なにか来る。

心が躍るような、なにか。

学院の時を司る何十メートルもある時計台の屋根から、噴水広場を見据えるエメラルドグリーンの瞳。

綿毛のようにふわりふわりと、日傘を差して空色の影は地上に舞い降りた。

「待たせたねルーファス（ふにふに）」

中性的な面持ちも相俟って、天から舞い降りたローゼンクロイツが、今のルーファスの目には救い天使に見えた。

「……ローゼンクロイツ、君さ……登場の仕方カッコよすぎだよ」

「学院で 猫返り すると必ず時計台の屋根で気が付くんだ、仕方ないさ（ふにふに）」

地面に這いつくばるルーファスの傍らにローゼンクロイツは片膝を付き、ルーファスの背中に片手を押し当てて呪文を唱えた。

「プリキュア（ふあふあ）」

ルーファスの顔色が見る見るうちに良くなっていき、全身の毒が浄化されていく。

「ありがとうローゼンクロイツ」

地面から立ち上がったルーファスとローゼンクロイツが並び、クロウリーと対峙した。

とても愉快そうにクロウリーは微笑んでいた。愛するものも二人も傍にいる。片方は正確には一匹だが。

「嗚呼、愛しのローゼンクロイツ、私に愛に来てくれたのかい？」

「……違う（ふっ）」

短くローゼンクロイツは切って捨てた。

それでも寂しい顔ひとつせず、クロウリーはローゼンクロイツに抱擁を求めようとした。

「愛してるローゼンクロイツ」

「……愛してない（ふっ）」

軽くあしらってクロウリーを避けたローゼンクロイツの口元が一瞬だけ歪み、すぐに無表情になる。相手を小ばかにしている。

ローゼンクロイツがクロウリーの気を惹いている間に、ルーファスはハルカを救い出し抱きかかえていた。

「ハルカ大丈夫だった？」

「……うん」

手を伝わって感じられるハルカの振るえ。ルーファスはもう決してハルカを放さないと心に誓った。

小柄なローゼンクロイツが、さらに小さなクロウリーを見下げた。

「なぜハルカを必要としているんだい？（ふにふに）」

「アースから来たる者、復活の後にこの世を支配する魔王となる」

「アースから来たる者、復活の後にこの世を統治する聖王となる（ふにふに）。思想の違いだね（ふにふに）」

「いつの日か、私と君が対立することは予期していたよ。私は魔眼を持ち、君は聖眼を持つ。それを知りながら私は君を支援したのは、心の底から君を愛していたからだ」

「……その愛、お断り（ふっ）」

「手に入らないから、欲しくなるのだよ」

「諦めが悪いんだね（ふあふあ）」

偽りだとしても、それを信じる者がいれば、争いが起こり、血が流れることもある。

クロウリーは魔王を望み。

ローゼンクロイツは聖王を望み。

二人はハルカを運命の救世主だと信じた。

クロウリーに視線を向けられ、ハルカは心臓を絞られる思いに陥った。

「私は君を愛し崇拝する　それは絶対運命なのだ。ローゼンクロイツを愛したのも運命であり、敵同士になることも運命だった。私が　銀の星　の首領　666の獣　だ」

「そんな気がしていたよ（ふあふあ）」  
ボソツとローゼンクロイツは呟いた。

ハルカ争奪戦が幕を開けた。

先に仕掛けたのはローゼンクロイツだった。

「ライラライラ、光よ闇を貫け！（ふにふに）」

クロウリーを串刺しにせんと光の槍が天空から降り注ぐ。

「ライラかおもしろい。ライラライラ、暗黒よ光をも喰らってしまえ！」

強大な闇が獣のように口を開き、天から降り注ぐ光の槍を丸呑みしてしまった。

ライラとは古代魔導であり、威力は絶大だが現在では使える者がほんの一握りしかない。現在主流となっている魔導は、ライラを簡略化させた魔導であり、威力はライラに遠く及ばない。空で光が呑み込まれるのを待たず、ローゼンクロイツはクロウリーに向かって駆け出していた。

「ライラライラ、宿れ光よ！（ふにふに）」

ローゼンクロイツの持っていた日傘に光が宿り、それは闇を切り裂く光の剣と化した。

相手を殺す気でローゼンクロイツはクロウリーの脳天に光の



剣を振り下ろした。

が、光の剣はクロウリーの顔を前にして、素手によって受け止められていた。

「悲しいぞローゼンクロイツ。まだまだ私たちには、これほどまでの力の差があるのだ」

憂うクロウリーの手が大きく振られ、ローゼンクロイツは強烈な平手打ちを受けて横に吹っ飛ばされた。

地面に転がってもすぐローゼンクロイツは立ち上がり、クロウリーに飛び掛かるうとした。

だが、クロウリーの姿が消えた。  
ルーファスが叫ぶ。

「ローゼンクロイツ後ろ！」  
声は耳に入ったが、ローゼンクロイツが驚愕して動けなかった。

自分の背中に伝わる温もり。後ろから抱きしめられてるとわかってても、ローゼンクロイツは動けなかった。

「もつと強くなれローゼンクロイツ」

耳元でクロウリーの囁きが聴こえ、ローゼンクロイツの首筋をクロウリーの唇が這った。

ローゼンクロイツは膝から崩れ落ち、地面に両手を付き頂垂れた。その顔から零れた汗が地面を濡らす。

人生ではじめて真の敗北を知った。

戦意を喪失させたローゼンクロイツをその場に残し、クロウリーが一步一步ルーファスとハルカのもとに近づいてくる。

「さあ、愛しのハルカ。私と共に新時代を築こう」

恐怖に駆られたハルカがルーファスの腕の中から逃げ出した。

「イヤ、イヤ、イヤーっ！」

逃げるハルカをルーファスが止めようとする。

「行っちゃだめだ、僕の傍にいて！」

だが、ハルカの耳にルーファスの声は届かなかった。

景色すら見えない。闇の中にいるように、なにも見えない、なに聴こえない。ハルカは迫ってくる恐怖から一心で逃げ出した。

闇の手がハルカの身体を包み込んだ。

恐ろしいまでに妖艶と笑うクロウリーの瞳の中で、六芒星とハルカが重なり合った。

「行こうハルカ」

クロウリーの背中に赤黒い六枚の翼が生え、ハルカを抱きかかえたまま飛び去ってしまった。

また、ルーファスは一步も動くことができなかった。

第14話 私たち結婚します！

球根型をした黄金の屋根を頂き、寺院にも見えるその建物は、一種の荘厳さを兼ね備えている。そこは王都アステアの北西に位置する古代寺院の跡だった。

土気色の石壁に囲まれた寺院の一室で、ハルカは台座の上と座らされ、その毛並みをクロウリーに撫でられていた。

もう抵抗する気も起きない。

麻薬漬けにされたみたいに思考能力を空ろになり、ハルカは前を見つめながら前など見ていなかった。

「これから私たちは婚約し契りを交わすのだ。式はこのサン・ハリユク寺院で執り行う」

ハルカを連れ去り、次にクロウリーがしようとしていることは、ハルカとの結婚だった。

主人がハルカを見る目つきは、崇める神像を見るような眼差しであると同時に、神に畏怖などまったく感じていない。いざとなれば神をも喰い殺してしまうような狂気の眼差しだった。

けれど、形はどうあれ、主人はハルカに愛を捧げている。エセルドレーダは心穏やかではない。

「我が君、本当にこの者が魔王になるとお思いですか？（アタシはそうは思えない）」

「私のこの眼を信じられぬのか？」

クロウリーの瞳が黒から緋色へ変わり、瞳に映る六芒星とエセルドレーダが重なり合った。六芒星に囚われているのは、瞳の中のエセルドレーダだ。それなのに現実のエセルドレーダまでもが、楔によつて繋がれたように動けない。

「我が君が信じるものであれば、アタクシも受け入れます」

「そうだ、それでいい。私がハルカと肉体の契りを交わすまで、全てを見届けるのだ。おまえが歴史の証人となる」

肉体の契りとは、身体と身体の交わりを意味する。猫とえつちするのかつ！

すでに人間の域を超えた妖艶さを持つクロウリーになれば、動物さえも虜にさせられるかもしれない。けれど、美しさに潜む狂気が、相手を畏怖させてしまう。エセルドレーダは畏怖の先に、クロウリーの奴隷となる道を選んだ。

絶対なる主人に仕え、主人の全てを受け入れる。受け入れる信じていなくても受け入れる。

ハルカを見るエセルドレーダの目は厳しい。

「（殺してやりたい）」

せめてもの救いは、主人はハルカに愛を捧げながらも、己をハルカよりも各下だと思っていないことだ。エセルドレーダにとつて、主人は常に最強の魔導士でなくて困る。この世でもっとも優れた存在であると信じている。

ずっとハルカを撫で続けていたクロウリーがマントを翻した。

「私は先に行っている。私の妻となる者だ。丁重に扱え」

「御意」

花嫁の支度をエセルドレーダに任せクロウリーが去った。

二人だけになった部屋に息苦しい空気が立ち込め、ハルカを憎悪の視線が突き刺す。

「アンタなんか私が君に愛されるわけがない。全てが終われば、我が君はおまえを捨てるのよ。我が君の本当の目的は、魔王の力を手に入れること」

エセルドレーダの長い爪がハルカの首根っこに食い込み持ち上げた。

「アンタはね、我が君に喰われる運命にあるのよ！」

ハルカの身体が壁に投げつけられた。

全身を強い衝撃と痛みが走り、ハルカの眼に色が戻った。

「痛っ！」

「やっと意識が戻ったようね」

「……………（よく覚えてない、アタシ…………）」

「これからアンタは我が君　クローリー様と結婚式をあげるのよ」

「にやつ？（なに、どうなってるの？）」

「アタシがベールを被せてあげるわ」

純白ではなく、葬儀のような漆黒のベールをハルカは被せられた。

ハルカの混乱は増すばかりだった。

結婚式？

ここはどこ？

そう、ルーファスたちは？

「（……ルーファス。助けに来て）」  
パニック状態に陥りながらも、ハルカの脳裏に浮かぶのはルーファスの顔だった。

頼りにならないのはわかってる。でも、絶対助けに来てくれる。

蛇のような生き物がハルカの首に巻きついた。

「なにっ!？」

黒蛇の先を握っていたのはエセルドレーダだ。そう、蛇だと思っていたのは黒い鞭だった。

「我が君がお待ちよ、行くわよ!」

犬の首輪を引くように鞭が引かれ、最初は抵抗を示したハルカだったが、すぐにあきらめてエセルドレーダの後をついて歩いた。

長方形に切った石を敷き詰めた廊下が続き、壁をくり貫かれた小窓から直接外の光が差し込んでくる。寺院内の内壁は剥がれ落ちて今にも崩れそうな感じだが、そこには絵巻物のような長い絵が描かれていた。おそらく絵が紙芝居のように物語になっているに違いない。

廊下はいつしか姿を消し、ハルカたちは青空のもとに出た。

そこは寺院の石壁に囲まれ、緑の芝が地面を覆っている。その中を通る石畳みの一本道は祭壇へと続き、女神像の見守る眼下に黒い人影が佇んでいた。

ヴァージンロードの変わりだろうか。

石畳の上を黒いベールを被った花嫁が悪魔に付き添われ歩く。

式を見守る者は誰もいない。静かな結婚式だった。

目を閉じ、瞼の裏で花嫁を見ていたクロウリーの瞳が見開かれた。

緋色の瞳が妖しく輝き、六芒星が五芒星を見据えた。

「早いな、もうここを見つけたか、ルーファス君。そして愛しのローゼンクロイツ」

クロウリーの口元は笑みを浮かべていた。

式場の入り口に立つ二人の影。ルーファスとローゼンクロイツの姿がそこにはあった。

ルーファスとハルカの目が合い、声を出したのはほぼ同時だった。

「ハルカ！」

「ルーファス！（やっぱり助けに来てくれた）」

ハルカは満面の笑みを浮かべた。白馬の王子様にはほど遠いけれど、今は誰よりも頼もしく見えた。

全速力でハルカに駆け寄ろうとしたルーファス　ズッコケた。

地面に足をつまずいて腹から地面に落ちたルーファスを見て、顔色の曇ったハルカは思う。

「（助けに来てくれたけど、助けてくれるか不安）」

式に邪魔者が入った。招かれざる客だ。

しかし、クロウリーは笑っていた。

「よい余興になるそうだ」

クロウリーのマントが風もないのに大きくはためく。

コケているルーファスはほっといて、ローゼンクロイツはすでに戦闘態勢に入っていた。エメラルドグリーンの瞳が映し出すのはクロウリーだけだ。ローゼンクロイツは地面を駆けた。だが、その前に巨大な翼を広げたエセルドレーダが立ちはだかる。

「邪魔はさせないわ」

「キミに用はないよ（ふあふあ）」

鬼気をまといながら対峙する二人の先で、クロウリーが妖しく笑う。

「今日は特別な日だ。エセルドレーダよ、ローゼンクロイツの相手をしてやれ　殺す気で構わん」

「御意」

ついにこの瞬間がきた。クロウリーの許しを受け、エセルドレーダは心の底から打ち震えた。

怪鳥のような甲高い奇声を発し、エセルドレーダの鞭がローゼンクロイツを捕らえる。

ローゼンクロイツの口元がエセルドレーダを一瞬だけあざ笑う。

「ボクに勝つ気かい？（ふあふあ）」

二つの気が激しく衝突し、爆風が辺りを蹴散らした。

地面に這いつくばったままチャンスを狙っていたルーファスは、爆風の中で立ち上がりハルカに向かって走り出した。

「ハルカ！」

叫ぶルーファスにハルカも駆け寄ろうとした。



だが、クロウリーがそれを許すはずがなかった。

「ハルカは私の物だよ」 手に魔導を溜め、クロウリーがルーファスに向かって解き放とうとした。そのとき、背後に気配を感じ、クロウリーは瞬時に振り返った。そこに立っていた巨乳の女は艶然と微笑む。

「ふふふ、アイスニードル！」

そこに立っていたのはカーシャだった。

カーシャの手から放たれた氷柱はクロウリーの身体を貫かんとする。

ニメートルにも満たないこの至近距離で避けられえる者はま  
ずいない。

ゼロではない可能性の中で、クロウリーは避けて見せたのだ。  
クロウリーの身体が残像を残し消え、カーシャから遠く離れた場所に立っていた。

「カーシャ君が近くにいたのは知っていた」

「やはりな、しかしあの距離で妾の躲すとは流石は魔人（チツ

……仕留め損ねた）」

「利己主義な君がなぜここに来た？」

「こんな面白いこと、見逃すわけにはいかぬであろう……ふふ  
ふっ」

それぞれの目的で戦いはじまった。

薔薇十字 の首領としてのローゼンクロイツの宿命。

憎悪に燃えるエセルドレーダのローゼンクロイツへの嫉妬  
心。

己の信じる理想を求めるクロウリーのハルカに対する愛。  
どうしてもハルカを助けたい一心でルーファスはクロウリー  
に立ち向かう。

そして！

ただ単に面白そうなことを見逃せないだけのカーシャ！

第15話 赤くなると性能3倍です

日傘に光の力を宿した剣を取ったローゼンクロイツ。

「ボクは 薔薇十字 の中で 薔薇の君 と呼ばれているんだ、  
なぜだかわかるかい？（ふにふに）」

「そんなこと知ったことないわ！」

ローゼンクロイツの問いに答えず、エセルドレーダの猛攻が  
鞭を生き物のように動かす。

漆黒の鞭が宙に輝線を刻み、うねり狂い残像を残す鞭。

光の剣でローゼンクロイツは全ての鞭を受け、激しい火花が  
煌く星のように散った。 柔軟鞭を躲すのは至極の業。鞭は  
素手より早いスピードでローゼンクロイツに襲い掛かってきて  
いた。

戦いが増すにつれ、鞭を操るエセルドレーダの動きが機敏に  
なり、ついに鞭はローゼンクロイツの持つ光の剣に巻きついた。  
カメレオンの舌に巻き取られるように光の剣がローゼンクロ  
イツの手を離れ、回転しながら宙に舞い、鋭く地面に突き刺さ  
った。術者の手を離れた光の剣は、速やかに光を失いたただの日  
傘に戻ってしまった。

武器を失ったローゼンクロイツは動揺すらしていない。その  
無表情な顔は余裕すら感じられる。

「ボクが戦うべき相手はクロウリーだから、力を温存しようと

したんだけどな（ふにふに）」

「アタシに手加減なんかしてると痛い目見るよ。高級悪魔が甘く見られたものよね（絶対殺してやるわ、殺してやる）」

「低級、中級、高級とはいっても、高級にもピンからキリまでいるけどね（ふあふあ）」

「言ったねアンタ。死を持って知るといいわ！」

嗜虐の色を瞳に宿し、残酷な笑みを浮かべた。

ローゼンクロイツの視界からエセルドレーダが消えた。

気配がした。

後ろだ！

すぐにローゼンクロイツは後ろを振り向いたが、エセルドレ

ーダの姿はない。

広がる芝と遠く見える外壁。

どこに消えた？

いや、近くいるのは間違いない。

ローゼンクロイツの足元の影が揺れ、その中からエセルドレ

ーダが飛び出してきた。

「死ねっ！」

武器と貸した長い爪がローゼンクロイツの胸を抉った。

どうにか後ろに飛び退いてローゼンクロイツは鋭い爪を躲そ

うとしたが、その胸元に四本の穴が走り、血が滲み出していた。

エセルドレーダは物が作った影に巢を張る能力を持ち、その

中にできた異空間に身を潜めることができるのだ。

間合いを取っているローゼンクロイツに鞭が襲い掛かる。

縦横無尽に動き回る鞭を避けることに集中しているローゼンクロイツには、魔導を使うために必要なエネルギーを練っている暇が与えられなかった。

魔導を使うには自然界のエネルギーなどを含む他からマナエネルギーを得る方法と、自分の体内にあるマナエネルギーを使う二通りの方法がある。

自分のマナを使えば魔導をすぐにも放てる。しかし、ローゼンクロイツはそれをしなかった。

「ボクはクロウリーと戦いたいんだけど（ふう）」

今もルーファスとカーシャがクロウリーと戦っている。二対一の戦いだ、クロウリーは実力を出してない。ローゼンクロイツもいち早く、そちらの戦いに加わらなければならなかった。鞭が大気を砕き、爆竹をならしたような破裂音が鼓膜を振るわせる。すでに鞭のスピードは超絶の域に達し、ローゼンクロイツは全く避けきれなくなってきた。

鑢で削られたような痛みがローゼンクロイツの腕に走る。

肩に、脚に、腹に、背中までも鞭によって切り刻まれ、全身に激痛を覚えるローゼンクロイツのドレスが、空色から夕焼け色に徐々に変わっていた。

それでもローゼンクロイツは表情を崩さなかった。

相手をいたぶるエセルドレーダは、まだまだ獲物を殺す気はない。髑つて髑つて髑り殺しにする。身体中に欲情が駆け巡り、エセルドレーダは舌舐め擦りをした。

「殺してやるわ、殺してやる。けれど、まだまだ遊びましょ

う」

「……ヤダ（ぶっ）」

ボソツと吐き捨てるローゼンクロイツの態度が、エセルドレーダの感情を高ぶらせる。

「アンタのことを殺したいほど憎んでいるわ。でもアンタのひねくれた性格は好きよ」

「あっそう……だ（ふにや）。忘れた（ふあふあ）」

苦しい表情すら見せなかつたローゼンクロイツが突然、驚いたように目を見開きすぐに表情を戻した。

「忘れてたよ（ふにふに）。薔薇の君 だった（ふあふあ）」  
先ほどの話の続きを今になって掘り返してきたのだ。

爽やかな風が芝生の上に波紋を立てた。

ローゼンクロイツの身体から、蛍火のような小さなフレアが放出された。高濃度に凝縮されたマナが目に見えるまでになったのだ。

目の前で変化するローゼンクロイツを見るエセルドレーダの目つきが険しくなった。

「（ローゼンクロイツのマナが上昇している。なにが起ころうとしているのー！）」

エセルドレーダの頬から汗が零れ落ちた。

真っ赤な薔薇が開こうとしていた。

可憐で気高い薔薇の華。

空色のドレスが薔薇色に変わり、そのスカートの形すらも、何重にも折り重なった薔薇の花びらのように変化したのだ。

エメラルドグリーンの瞳に五芒星が宿る。

「これが 薔薇の君 さ（ふあふあ）。赤くなると移動速度が三倍になるんだ（ふにふに）」

薔薇十字 の教祖にして首領。クリスチャン・ローゼンクロイツが 薔薇の君 へと変身したのだ。

薔薇の香りが充満し、ローゼンクロイツが動いた。

重そうで動きづらそうなドレスにも関わらず、ローゼンクロイツの移動速度は宣言どおり三倍。そのスピードにエセルドレーダは付いていた。

「その程度の実力かしら！」

「……性能も三倍だよ（ふにふに）。ライトボール！（ふあふあ）」

ローゼンクロイツの手から光球が放たれるが、エセルドレーダは瞬時に飛び退き地面に膝と手を突きながら着地した。

だが、まだだ！

「アースニードル！（ふあふあ）」

ローゼンクロイツが呪文を唱え、エセルドレーダの足元で地鳴りがした。危険を感じたしたエセルドレーダはすぐさまバク転をした。

大地から突き出た尖った岩が、エセルドレーダが寸前までいた場所に突き出した。

バク転を繰り返しながら逃げるエセルドレーダを追って、岩の針山がいくつも顔を出して襲う。

このとき、バク転で視界が狭くなっていたエセルドレーダは、

背後に近づく影に気づいていなかった。気づいたときには拳が眼前まで迫り、衝撃と共に顔を抉られて地面の上を転げ回らされてしまっていた。

相手を殴った手を痛そうに振るローゼンクロイツが、地面に倒れたエセルドレーダを見下している。

「戦いとは、いつも二手、三手先を考えて行なうものだよ（ふにふに）」「よくもぶったわね。我が君にもぶたれたことないのに！」

「……あっそう（ふっ）」

無表情の顔に浮かんでいた口が歪み、すぐに元に戻った。ものすごい性格の悪さがにじみ出ている行為だ。

倒れたままのエセルドレーダは自分の尻から生えた尾を掴み引っこ抜いた。そして、それを横に振るいローゼンクロイツの足首を絡め取ってしまった。

エセルドレーダの鞭は、自らの尾をだっただ。すぐに新しい尾が生え変わる。

足を掬われたローゼンクロイツの首に巻きつく鞭。

首に食い込む鞭を味わいながら、なおもローゼンクロイツは無表情だった。

そして、懐から缶詰めを取り出したのだ。

エセルドレーダの眼つきが変わる。

超高級ドッグフードの缶詰め。

ポイッとローゼンクロイツが缶詰めを投げると、思わずエセルドレーダは追っかけてしまった。まるで犬だ。



爪でカリカリフタを開けようとしたエセルドレーダが、ハツと我に返って缶詰めを投げ捨てた。

「よくもアタシを罠に嵌めたわね！」

「やつぱりウワサは本当だったんだ（ふあふあ）」

「……なんのこたかしら？」

「元はクロウリーが飼ってたブラッドハウンド犬らしいね（ふにふに）。彼が悪魔と合成したって聞いたよ（ふあふあ）」

「だからなんなのよ！」

「なんでもないよ、ただの時間稼ぎ（ふあふあ）」

「なんですって!？」

エセルドレーダの足に奔る刺す痛み。彼女の足には薔薇の蔓が巻きついていていた。

まだ足が封じられただけ、鞭を振るおうとエセルドレーダが手を動かそうとした。

ローゼンクロイツのほうが早かった。

薔薇の鞭がエセルドレーダの手首を刺した。

「キミと同じ武器だから使いたくなかったんだ（ふにふに）」

そして、すぐにローゼンクロイツは下げていた短剣を鞘から抜き、エセルドレーダの顔面に投げつけた。

「ライラライラ、口を開ける地獄の門よ！（ふにふに）」

「ぎゃああああつ！」

天を仰ぐエセルドレーダ口から叫び声があがった。

短剣はエセルドレーダの右目を深く突き刺さっていた。

痛烈な痛みに襲われたエセルドレーダは短剣を抜いて、獣の

ような咆哮をあげてローゼンクロイツに短剣を振るった。

予想を超えたスピードだった。

重なり合うローゼンクロイツとエセルドレーダの身体。

エセルドレーダは喰らうようにローゼンクロイツの唇にしゃぶりついた。肉欲的な接吻だった。そして、ゆつくりとその唇が放されると、ローゼンクロイツの口が赤い薔薇を吐いた。

鮮血が美しい悪魔の顔を彩った。

吐き出された血を浴びた顔で、エセルドレーダは妖艶と嗤う。

「報いてやったわ」

「……なかなか痛いね（ふにふに）」

ローゼンクロイツの腹を突き刺した短剣は、エセルドレーダの腕ごと背中を突き破っていた。

「でもね、ボクの勝ちさ（ふっ）」

「ばかな！」

エセルドレーダの真後ろで風が唸り声をあげた。

骨を捻り折るような悲痛な音を立てて叫ぶ空間に、渦巻く穴が出現してエセルドレーダを吸い込もうとした。

不敵な笑みを浮かべたローゼンクロイツが、エセルドレーダの身体を軽く突き放した。

すると穴の中から闇色の触手が飛び出し、エセルドレーダの四肢を掴み穴の中に一瞬にして引きずり込んでしまった。

「傷が癒えても、その場所から当分こちらに来れないね（ふっ）」

エセルドレーダはローゼンクロイツの開いた門 によって、

地獄の深い階層に引きずり墮とされたのだ。

重傷を負ったローゼンクロイツは意識が霞み、背中から芝生の上に倒れた。

見上げた空がとても青い。

「今日もいい天気だね（ふあふあ）」

そして、ローゼンクロイツの瞼はゆっくりと閉じられた。

## 第16話影

「ローゼンクロイツ！」

ローゼンクロイツが倒れたのを見てルーファスが叫んだ。

「余所見をするなルーファス！」

カーシャの叱咤が飛んだ。

慌ててしゃがんだルーファスの頭上を風の刃が擦り抜けた。

クローリーの動きは猫とじゃれ合うように、ルーファスとカーシャを弄んでいた。

わざと攻撃を少し外し楽しむ。

石の祭壇の裏からルーファスたちを見守るハルカの瞳。

「カーシャがんばって、とくにルーファスは死ぬ気でがんばれ！」

「……私まだ死にたくないよ」

眩くルーファスの真横を気弾が抜けた。またもやカーシャの叱咤が飛ぶ。

「戯けがルーファス、気を抜く出来ない！（へっぽこ魔導士め！）」

舞うように動くクローリーは笑っていた。このお遊びを心から楽しんでた。

「運命は決して変えられぬ。ハルカと私がひとつに結ばれることも、この戦いの行方も。さて、この勝負どちらが勝つと思う

かね？」

どうしてもハルカを助けたい。

「僕が絶対に勝たなきゃいけないんだ。ハルカを助けなきゃいけない」

何度もルーファスはハルカを助けることができなかった。

教会でハルカが連行されたときも、ハルカが処刑されたときも、魔導学院で連れ去られたときもだ。

「（これが最後だ）」

そんな思いがルーファスの頭を過ぎった。ここでハルカを助けられなかったら後がない。すべてが取り返しの付かないことになってしまうような気がした。

ルーファスがハルカのことをどう思っているのか？

そんなことじゃない。

今のルーファスはただ一心にハルカを守りたいだけだった。

ただひたすらにがむしゃらに、ルーファスはクロウリーに向かっていった。

「わかったやるよ、やるさ、やってやるさ　クイック！」

呪文を唱えたルーファスの移動速度が急激に上がった。普段の二倍以上のスピードが出た。

遊んでいるクロウリーの真後ろにルーファスが回った。

「ウインドカッター！」

クロスさせた腕を広げ、ルーファスは風の刃を放った。

空気を切り裂く風の刃は簡単に避けられてしまったが、そこを狙ってカーシャが魔導を放つ。

「ライラライラ、生を凍らせ！」

カーシャの両手から放たれた冷気が扇状に芝生を凍らせ、鋭い氷の刃がいくつもクロウリーに襲い掛かる。

上下左右に扇状に広がる攻撃を避けることはクロウリーにもできなかった。

氷の刃がクロウリーの肉体を貫通し穴を開け、肉体は蒼い氷に覆われ凍結した。

だが、氷付けにされたクロウリーの身体から、突如として黒い炎が巻き起こり、天を焦がす勢いで燃え上がった。

炎の中で優しく微笑むクロウリーの目に緋色が宿る。

「覇ッ！」

業火は一瞬にして掻き消され、衣服すらも無傷のクロウリーが蒸気をあげながら現れた。

それを見たカーシャが呟く。

「もはや奴は人間ではない。肉体は人の肉にあらず、服もマナを具現化させたものに違いない（人間の域を超えたか……神か悪魔か、どちらでもない魔人か）」

「さすがはカーシャ君だ。私はすでに人間の域を超えている。

しかしまだまだ……ハルカとひとつに交われば、もっと強大な力を得る。神をも凌駕する力をね」

クロウリーは魔王の出現を望み、それを喰らい力を吸収する気であったのだ。

「そんなことさせない！」

地面を蹴り上げたルーファスのクイックが時間オーバーで切

れた。急激なスピード変化に身体がついていけず、その反動でつまずいたルーファスがぶつ飛び、拳を前に出しながらクロウリーに向かってロケットパンチ！

「霸ツ！」

だが、ルーファスはクロウリーの気合いだけで吹っ飛ばされたしまった。

物陰で見守るハルカはため息をついた。

「頑張ってるのは伝わるんだけどー、ダサツ」

しかも、もっとダイいことに、飛ばされたルーファスはカーシャにぶつかって押し倒してしまっていた。

「このへつぽこ魔導士がつ！（どこまで人に迷惑をかければ気が済むのだ……笑えん、ふふっ）」

人様に迷惑をかけてるのはお互い様だ。カーシャも人のことを言えない。

カーシャの巨乳から顔を上げ、ルースファスはすぐに立ち上がった。

「わかつてるよ、僕だって一生懸命やってるんだよ！」

マジな心意気は伝わるが、ルーファスの鼻からはツーっと鼻血が流れていた。

「妾が本気で戦えぬは貴様のせいだぞ、貴様が責任を取らずにどうする！」

カーシャに叱咤され、ルーファスのお腹が『ぐう』となった。だんだんお腹が緩くなってきた。極度の緊張がピークを越えようとしていた。

しかし、こんなときにトイレに行ってる場合じゃない。

クロウリーは腕を組み、ルーファスとカーシャのやり取りを見守っていた。不意打ちをする気すらないのだ。

「つまらんな、二人とも弱すぎる。しかも二人とも実力を出し切れていないようだね。特にカーシャ君、君は最盛期の十分の一の力も出せないのだろう？」

「悪かったな、全てルーファスのせいだ！（ルーファスに出会ってから、前にも増して運が悪くなっただな……ふふふっ）」

「そうか、やはりな。ルーファス君の中にある力は、カーシャ君の力を奪ったものだだね。いや、それを足しても最盛期の力にはならない。残りはどこに？」

「うるさい知るか！」

クロウリーの緋色の瞳に浮かぶ六芒星は、ルーファスの中に入り込んでいるカーシャのエネルギーを感じていた。どうやってカーシャのエネルギーが、ルーファスの体内に入り込んだのかまではわからない。けれど、そのエネルギーを使えば、ルーファスはもつと高度な魔導を使えるはずだった。

「力の使い方を知らんようだね、もったいない」  
クロウリーは呟いた。

想い耽るようにクロウリーは天を仰ぎ、動きをまったく止めてしまった。

その隙をカーシャは見逃さなかった。

「ルーファス、ライラで炎を撃て！」

「えっ!？」



「イヤなら貴様を投げるぞ（ルーファスミサイル……そっちの方がおもしろいな）」

なにを言われているのかわからなかったが、カーシャの髪色が白銀に変わったのを見てすぐに理解した。

カーシャは身体の中のマナを全て手に集中させた。

「ライラライラ、神々の母にして氷の女王ウラクアよ……」  
ルーファスの周りにもマナフレアが飛びはじめ、魔導を帯びた風が髪の毛を巻き上げた。

「ライラライラ、紅蓮の業火よ全てを焼き尽くしたまえ……」

二人が呪文を詠唱する最中もクロウリーは空を見上げ、流れる雲の動きを詠んでいた。そして、クロウリーが首を下げた瞬間。

「メガフレア！」

「ホワイトプレス！」

紅蓮の業火と猛吹雪が世界を包む。

高等魔導ライラの中でも名を持つ魔導。不完全な詩だけではライラは真価を発揮できない。正しい詩を読み、名を呼ばれることによってライラは完成するのだ。

ほぼ同時に放たれた炎系高位魔導と氷系高位魔導は、普通なら互いを相殺するはずだった。

心の底からクロウリーは笑った。

「あははははっ、素晴らしいぞ、太古の神術。さすがはカーシヤ君だ」

二人の放った魔法は互いに轟音と共にとぐるを巻きながらクロウリーに襲い掛かる。決して混ざり合うことなく、炎と氷がそこに存在する。それを見たカーシャが不敵な笑みを浮かべた。「名付けて、冬にコタツで食べるアイスは美味いだ！」

クロウリーは魔導壁を張ったが、二人の放った魔導に当たった刹那、シールドはガラスの割れるような音を立てて粉々に砕け、炎と氷がクロウリーの身体を包み込んだ。

蒸気と硝煙で視界が遮られ、渦巻き混沌とする魔導の中で、クロウリーは高笑いをしていた。

「はははははっ、素晴らしい、素晴らしいぞ、とても快感だ！」

クロウリーの身体が溶けていく。それはまるで鉄が溶解するようだった。

ルーファスが額の汗を拭う。

「どうなった？」

すでにクロウリーの笑い声は消えていた。

視界を遮っていた煙たちが姿を消すと、その中に人影が！

まさか、まだクロウリーは生きているというのか！

人型をしていた影が飛び散り、銀色の粉が風に吹かれ舞い上がった。

煌く粉の中にクロウリーはいない。

あれだけの攻撃を喰らえば、跡形も残らないのは当然だった。その場に立ち尽くすルーファスにハルカが駆け寄る。

「ルーファス、イケてたよ。やればできるんじゃない！」

「あ、ああ、うん」

呆然としてしまっているルーファス。自分でもビックリ仰天にがなんだか実感が湧かない。

カーシヤは焦げた地面に残る銀色の粉を指先で掬った。

「完全に消滅したらしいな。これは身体を構成していた物質だろっ」

そう、全ては終わった。

それをじわじわと実感してきたルーファスはハルカのことを抱きかかえた。

「よかった、本当によかったハルカが無事で」

「助けに来て当然だからありがとうなんて言わないからね……ちゅっ」

仔猫の唇がルーファスの頬にキスをした。

「はわっ、な、なににしたの!?(キス、キスされた!?)」

猫といえどキスはキス。一回は一回。

ルーファスは顔を真っ赤にして取り乱し、ここでもうひとつあることに気づいてしまった。

「あーっ！ 人殺しちゃった、殺しちゃった、クロウリー学院長殺しちゃったよ、これって殺人じゃん！」

ルーファスの頭から意識が紐のように抜け、口から泡を吹いて最後は気絶してしまった。

そんなルーファスのハルカは見て思う。

「……ダサイ」

夜のカーテンが空を覆い、サン・ハリユク寺院が静けさを取り戻した頃、式場だったあの場所で赤黒いの魔導衣が風に揺られてはためいた。

「よくぞ私の影を倒した。しかし、まだまだだ、まだまだ彼らは強くなる……ふっはははははっ！」

月明かりに照らされる妖艶な横顔は狂気の影を孕んでいた。

第17話 世界征服はじめました

先日の戦いで重傷を負ったローゼンクロイツが病院を退院すると聞いて、ハルカとルーファスはローゼンクロイツを迎えに行った。

リューク国立病院は、アステア王国の四代目国王の名に冠された病院で、その歴史はざっと三〇〇年以上ある。

病院に着くと、副院長の魔法医ディーが自らルーファスを出迎えた。

白衣ならぬ黒衣を身にまとった魔法医ディーと言えば、この国はおるか隣国でも有名だ。

黒衣をまとう医師というだけで、少し変わり者の匂いがあるが、魔法医術の腕は超一流で、リューク国立病院が創立されて以来から、ずっと副院長の椅子に座っている。歳がいくつかわからないことは気にしてはいけない。外見が二〇代後半にしか見えないというのもツツコミを入れてはいけない。

「最近ハルファスがなかなかきてくれないので、私は寂しい思いをしていた」

病院になんか毎日もきたくはない。なかなか来ないほうが正しい。

ルーファスの全身を妖しい目つきで見るとディー。実はルーファス、この人のことが苦手だったりする。いつか食べられるの

ではないかとビクビクしているのだ。

「あー、知り合いのローゼンクロイツと可及的速やかに会いたいんですけど？（もしくはディーにどっか行つて欲しい）」

「ルーファス君の頼みなら重病だろうが退院させるが、お友達の入院を長引かせてルーファス君がまたお見舞いに来るというのも捨てがたい（それとも適当な理由をつけてルーファス君を入院させるのもいい）」

「とにかくローゼンクロイツに会わせてください」

「仕方あるまい、着いてきたまえ」

二人の会話を始終じつと見ていたハルカは、ディーの視線がルーファスの身体を隈なく舐めるように見ていたのに気づいた。

「（……目つきがエロかった。もしかして、この医者ってそっち系！）」

ハルカは頭を悶々させながら白い廊下を歩いた。

前を歩く二人の足が止まったのは集中治療室の前。

ディーが壁に取り付けられていたタッチパネルに手を置くと、金属製の扉が横に開かれた。

室内は青いライトで照らされ、そこには人が横になって入るカプセルがあり、液体で満たされたその中にローゼンクロイツが目を閉じて眠っていた。

「治療はすでに終わっている。再生液を抜いて目覚めさせるぞ」

ディーはそういうと、カプセルについたキーボードを操った。カプセルの中に液体が徐々に抜け、透明のカプセルのふたが

開いた。

そして、カプセルの中から這い出てきたローゼンクロイツを見て、ハルカ大絶叫！

「にやーっ!？」

すっぱんぽんで気だるそうにあくびをするローゼンクロイツ。その身体からは水が滴り、髪の毛も濡れていてとても色っぽい。なんてことじゃなくて、ハルカの視線はローゼンクロイツの股間を凝視していた。

「男だったの!？」

股間についたかわいらしい小象が鼻を揺らしている。パオーン。

これはハルカにとつて衝撃的な展開だった。てつきりローゼンクロイツのことを女の子だと思っていた。てゆーか、ドレス姿の見た目は、女の子以外の何者でもない。

そうだ、これは夢に決まってる！

だが、ハルカのまん前に立ったローゼンクロイツの股間には、ぞうさんが鼻をぶらんぶらんさせていた。

「(なんでアタシ凝視しちゃってるのー)」

急いでハルカはローゼンクロイツから目を伏せて、目をぎゅつとつぶった。

逆効果だった。

目をつぶるとぞうさんが鮮明に思い出されてしまう。パオーン。

汗をダラダラ掻いてひとり取り乱すハルカにルーファスが声

をかける。

「ローゼンクロイツが男だつて言わなかったっけ？」

「聞いてないし！」

「じゃあ、改めて言つよ。ローゼンクロイツ男だよ」

いまさら遅い。遅すぎだ。

バスタオルを受け取り身体に巻くローゼンクロイツ。さつきまで隠すそぶりもせずに堂々としていたのに、タオルの巻き方は胸を隠すように上から巻いている。

「ふわぁ〜よく寝た（ふあふあ）。ところでさ、ボクが寝ている間、熱帯魚の世話は誰がしてくれたの？（ふにふに）」

「はっ？」

ルーファスは口をあぐり開けてしまった。そんな話知るか。「そうだ、熱帯魚は去年の夏に水槽から家出したんだつた（ふあふあ）」

どうやらローゼンクロイツは寝起きで寝ぼけているらしい。

一方ハルカは未だに衝撃から立ち直っていないかつた。

「（ローゼンクロイツが男つてことは、ルーファスとはただの親友関係かな。違つかも、どう考えてもローゼンクロイツは男の子に興味があるような。でもでも、女の子の格好してるだけつてことも考えられないこともなくて、あーもおわかんないよお！）」

考えれば考えるほどドツポにハマリそうだった。

リューク国立病院からルーファス宅に直行。



家の鍵を開けて中に入ろうとすると、逆に鍵が掛かってしまった。急いでルーファスは鍵を開けて家の中に飛び込んだ。

ソファでティーカップ片手に優雅に寛ぐ人影。

「遅かったなルーファス」

神出鬼没不法侵入常習犯カーシャだった。

いつものことなので、もうルーファスはなにも言わない。言う気にもならない。言いたくない。そして、言えない。

三人と一匹がルーファス宅に揃ってしまった。

数日の間にいろいろいることがあった。

ハルカは死んだり、生き返ったり、猫になったり、結婚させられそうになったり。でも、すべては解決し、平穏な日々が戻りつつあった。

「じゃないし！」

突然、ハルカが大きな声を上げた。

「アタシ身体戻ってないし。家に帰る方法もわかってないじゃないのよ！」

重大なことを忘れるところだった。それがメインだったはず。途中、紆余曲折がありすぎたのだ。

目的の再認識。

身体を元に戻して、ハルカは自分の世界に帰る。

目的はハッキリしているが、ここにいるメンバーで話がややこしくならないはずがない。

ローゼンクロイツがボソツと提案する。

「まずはハルカが世界を統治するのが先だね（ふあふあ）」

それに反論するルーファス。

「違うよ、まずは身体を元に戻すのが先でしょ？」

それにまた反論するカーシャ。

「ふむ、ハルカを魔王に仕立て上げ、妾が影の支配者になるのが一番だな（ふふ、魔王カーシャか）」

それにまたまた反論するハルカ。

「世界征服なんてアタシしないし。早く身体を戻して、家に帰らせてよ！」

大よそで言うと、意見は二対二の同点だ。

この後もあーでもない、こーでもない、と激論を繰り広げたり、繰り広げなかったりで、二時間経過してしまった。

そして、ついにはローゼンクロイツが、どっかからホワイトボードをまで持つてくる始末だった。

「ボクの目的はまずこれ、そして、これ……で……」

ローゼンクロイツがペンで描いた文字は次の通りである。

アステア王国を乗っ取る。

アステア王国を使って世界を乗っ取る。

ハルカ神になる。

世界が愛と平和に包まれる。

ねこねこファンタジィ〜！

最後の　が意味不明だが、それはさて置き、やはりローゼンクロイツは本気でハルカを神に仕立てるつもりなのだ。

「ボクの目的はこんな感じ（ふあふあ）」

生徒が教師に質問するときのように、ルーファスは『はい』と手を上げた。

「質問がありまゝす」

「なんだねルーファスくん？（ふにゃ）」

こちらも負けじと教師の顔つきになってルーファスを指名した。

「本気で世界征服するつもりなの？（……聞くまでもなく本気だと思っけどさ）」

「……わかってないね（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。「征服じゃなくて統治だよ（ふあふあ）」

今度はハルカが『はい』と前脚を上げた。

「はい、質問でゝす」

「なんだねハルカくん？（ふにゃ）」

「どうやって世界征服……じゃなくて世界統治するんですかあ？（明らかに無謀だと思っただけどなー）」

「……知らない（ふっ）」

言い出したローゼンクロイツが『知らない』とはどういうことだ。と言いたくなるが、ローゼンクロイツの性格からして次に言葉はこれだ。

「……ウソ（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。そして、もう一言。

「……ウソ（ふっ）」

『どつちだよ』と誰もが思い、ルーファスが代表してツッコミを入れる。

「どつちだよ！」

普段無表情なローゼンクロイツの顔が深刻そうな顔つきになった。……が、たぶん特に深刻でもないと思われる。

「……なにも考えてなかった（ふあふあ）」

これって、もしやとハルカは思った。

「（無計画!?!）」

怖すぎて声に出してツッコミを入れられなかった。

話を一通り聞いて、カーシャの瞳がピカーンと妖しく輝いた。悪巧み全快、脳みそフル回転で駆け巡る。

「妾によい考えがある（ぴかっと、きらっと、最たるひらめき

……ふふ、天才）」

不敵な笑みを浮かべるカーシャを見て不安を覚えるハルカ。

だが、いちよう聞いてみる。

「どんなひらめき？（トンデモないことだとは思っけど）」

「昔、妾が世界征服をしようとしたときに用意した、あるものがある（ドカーンと一発）」

「（やっぱり、やな予感）」

世界征服って言うてる時点でかなりアブナイ。が次の言葉はもつとアブナかった。

「世界を破壊に追い込む、世界最大級の魔導砲、その名も『コメットさん三號機』だ！（我ながらナイスネーミングだ）」

「はあ？」

ハルカとルーファスが声をそろえて変な顔をした。かなり間の抜けたへっぴこな表情だ。

魔導砲とは古の大魔導士たちが創り上げたという魔導兵器だ。アステア王国が太古の技術を復元し造った魔導砲の威力は、最大出力で小さな島を破壊させるほどのものだったらしい。

アステアの所有するレプリカでさえ、小島を吹っ飛ばすのだから、世界最大級の“オリジナル”の威力はいかに？

カーシヤはローゼンクロイツの砲を振り向いた。

「ローゼンクロイツ、国民に妾の声明を伝えたいのだが、おまえできるか？」

「薔薇十字 のネットワークを介せば、映像つきでいけるよ（ふあふあ）」

「ふむ、頼む」

アステア王国に住む人々は驚愕した。

お茶の間でテレビタイムをしていたところに、突如巨乳が映し出されたのだ。

テレビ画面に映されたのはカーシヤだった。

カーシヤはルーファス宅で、ローゼンクロイツが魔導で作出したマジックウインドウに向かって話していた。

「妾はカーシヤだ（ふふ、カメラ写りは良好だろうか？）。全世界の下賤な愚民どもたちに告ぐ、おまえたちに未来はない、あるのは死のみだ。今、この国は世界最大級の魔導砲の照準にセットされた。妾が合図をすれば、この国は木っ端微塵に消し

飛ぶ！（カッコよく決まったな！）」

ぶっ飛んでるカーシャの横にいたルーファスがへっばこな顔をする。

「はあっ！ それってやりすぎじゃないの？」

空かさずカーシャのボディブローがルーファスの腹に炸裂。

さらばルーファス。ルーファスは床にうずくまって動かなくなつた。

何事もなかったようにカーシャは話を続ける。

「だが、妾として冷酷な女ではない」

「（ウソつき、カーシャは十分冷たい人だと思っ）」

ハルカの発言は当たり前。カーシャは絶対私利私欲のためならなんでもするタイプの女だ。

「おまえらにチャンスをくれてやるう。全人類が妾の下僕になると約束したら、魔導砲は撃たないでやる」

本気でカーシャは世界征服をするつもりだ。きつとカーシャが世界の支配者になったら、世界はピンクの小物で溢れかえってしまう。

ここでローゼンクロイツがボソツと。

「たぶんみんな信じてないから、軽くかましてやるべきだと思っうよ（ふあふあ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。これに合わせてカーシャも口元を歪める。

「人間どもよく聞け！ アステア王国の上空を掠めるように魔導砲を撃ってみせる」

「マジで!?（やっぱリアブナイだし、この人）」

「（ドカンと一発散らせてみましょう……なんてな、ふふっ）」

カーシャはハルカに不敵な笑みを投げかけた。

ドカンと一発ってマジですかカーシャさん!?

マジだった。

悪魔の笑みを浮かべたカーシャの宝玉が付いたイヤリングが妖しく輝く。

「発射！（どか〜ん……ふふ）」

次の瞬間、宇宙空間に設置してあった超巨大魔導砲が発射された。

巨大な光の柱がアステアの上空を掠め飛び、巨大な風を巻き起こし、上空の空気を掻っ攫い真空状態にした。

真空状態になったことにより、そこに空気が一気に流れ込み、地盤が浮き上がり、建物が上空に吸い込まれ、人々も、看板も、洗濯物で干してあったステテコパンツも飛んでいく。大惨事だった。

この中で顔を真っ青にしている人間的な普通人はハルカだけだ。ちなみにルーファスは未だ床にうずくまり、アステア王国を襲った大惨事を知らない。

「さて、相手の出方を窺うとするか（これこそ妾の懂れていたものだ……ふふ）」

これにてカーシャの演説は終わった。

沈黙が流れる。

ハルカは気づいた。

「今のつてカーシャが世界征服するみたいじゃないの？ アタシが征服しないとダメなんじゃないの？（完全に脅しだよなー）」

びびつとひらめき、ローゼンクロイツは手を叩いた。

「じゃあ、こうしよう（ふあふあ）。魔女はハルカの補佐で、実際に動くのが魔女で、裏で糸を引いているのがハルカっていう設定にしよう（ふにふに）」

これって完全な悪役だ。ハルカの大魔王への道は着実に向こうから勝手にやって来る。ビバ大魔王ハルカ。

ローゼンクロイツよ、ハルカを聖王にしたいんじゃないの？

魔導砲が放たれた瞬間から、国家を巻き込んだ戦いになってしまった。

しかも、三大魔導大国のアステア王国に喧嘩を吹っ掛けたとあつては、後々世界を巻き込んだ戦いになることは必然だった。床に這いつくばっていたルーファスが、やっと立ち上がったときには、魔導砲はすでに放たれたあとだった。

カーシャの破天荒ぶりにも困ったものですね、あはは。

なんて簡単に済ませられる問題じゃなくなっていた。

「なんてことするんだよカーシャ！」

ルーファスが、あのカーシャにキレを怒鳴りつけた。きつと明日は大雪だ。

憤怒するルーファスはびしつとばしつと堂々とカーシャを指



差した。

「カーシャが世界征服をするなら、私はカーシャの敵になるよ（……ハッキリ言ってしまった。後が怖いかも）」

「ふふ、妾の敵だと？ この世界征服はハルカの世界征服だ。つまりおまえはハルカの敵になるということだな？」

「……統治（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。そして、話を続ける。

「征服じゃなくって統治（ふあふあ）。ハルカを全知全能の唯一絶対の神として君臨させて、絶対君主による完全なる統治がボクの目的だよ（ふあふあ）」

この場の状況というか雰囲気可笑しくなりはじめている。

『はい、はい』と言った感じでハルカは手をあげて発言した。

「あの、カーシャは……やり過ぎだと思っただけどー（ああ、言っちゃった）」

「ほう、ハルカも妾に口答えする気か？（喧嘩上等！）」

冷酷な表情をしてカーシャはハルカとルーファスを睨んだ。まさに蛇に睨まれて蛙状態である。

思わずハルカとルーファスは一步と言わず、一〇歩ほど後ずさりをしてしまった。

ルーファスはハルカを抱きかかえて共同戦線を張った。

「ハルカをダシに使って、自分が世界征服をしたいだけなんだから！（……ヤバイ、また口が滑ってしまった）」

「そうだよ。今回ばかりはカーシャに付いていけない（……ルーファスにつられてアタシも言っちゃったし）」

一方的に押されぎみの二人を助けるようにローゼンクロイツが割った入った。

「魔女の方法はいいと思ったんだけどな（ふあふあ）。ハルカが魔女と決別するのなら、ボクはハルカ側に付くよ（ふにふに）」

ここで完全にカーシャVSハルカたちの対立の構図が完全にできあがってしまった。ひとりになったカーシャはどうする！

「妾はやるぞ（走り出したら止まらない……ふふ、ビバ世界征服）」

だそうです。カーシャはひとりでも世界征服をするつもりらしいです。

決別したカーシャは部屋を出て行こうとした。それをルーフアスが止める。

「どこ行く気？」

「おまえたちとは絶交だ。妾はシルバーキャツスルに帰る（あそこに帰るのは何年ぶりか？）」

そう言い残すと、カーシャは姿を消してしまった。それを追う者は誰一人としていない。ローゼンクロイツを除く二人は、絶対にカーシャを止めることは不可能だと思っっているからだ。

ローゼンクロイツが軽い咳払いをした。

「じゃあ、そういうことで魔女カーシャを倒しに行こう（ふあ

ふあ）」

「はあっ、」

いつも通り息がぴったりな二人。ハルカとルーファスは声をそろえて裏返った声を出して、間の抜けた表情をした。

「世界征服を企む魔女を正義の味方ハルカが倒しに行くんだよ（ふにふに）。そうして世界に恩を売って、ハルカを世界に君臨させるんだよ、わかった？（ふあふあ）」

この男、カーシャよりも悪いやつかもしれない。腹黒。

第18話 魔女王カーシャさん

再び国中のテレビがジャックされた。

その内容とは、カーシャは世界の敵であり、ハルカ率いる薔薇十字 はカーシャを討伐してみせるといふもの。

「じゃあ、ハルカとルーファスはカーシャを討伐に行っておいで（ふあふあ）」

「ふあふあ」

本日何回目だっただろうか？

またまたハルカ&ルーファスは声をそろえて驚いた。

「ちよつと待ったローゼンクロイツ、君はもしかして行かない気？（カーシャを敵に回すなんてできるわけないじゃん）」

「そうだよ、アタシはただの猫だし（にゃんつてね）」

二人の発言はなかったことにされて、ローゼンクロイツは先に話を進める。

「ところでルーファス、魔女はどこに行ったんだい？（ふにふに）」

「あー、それは私とカーシャがはじめて出会った場所（思い出ただけで寒気がする）」

「どこ？（ふにゃ？）」

「地獄の雪山野外実習だよ」

「あの実習でルーファス遭難したろ？ もしかしてそのときか

い、カーシャと出会ったの（ふにふに）」

ルーファスが無言で深く頷いた。

そう、あのときルーファスはカーシャと出遭った。しかし、遭難して帰ってきたルーファスはそのことを誰にも話していない。聞かれてもなにも覚えてないとウソをついていた。その理由はもちろん、カーシャによる説得（脅迫）があつたからだ。

その野外実習があつたのはグラーシユ山脈。そこはクラウス王国の北に位置する極寒の山岳地帯。クラウス王国全体はやや温暖で過ごしやすい地域なのだが、この山脈地帯だけがなぜか気温が異常なまでに低い。その気温は平均で零下二五度に達し、最低気温はだいたい零下五〇度まで達するという。

隔離された山脈には独自の生態系が存在し、珍獣ホワイキーの目撃談もある。

魔導学院に入学した一年生がはじめて行なう野外実習がここだった。あまりにも無謀なため、毎年、怪我人病人が出る地獄の校外実習なのだ。魔導学院の実習で怪我人の出ない実習はないのだが。

ローゼンクロイツの瞳が妖しく輝きだし、五芒星が浮かび上がった。

「じゃ、がんばってきてね（ふにふに）。ボク、寒いのが苦手なんだ（ふあふあ）」

話を切り返す猶予すら与えられなかった。

次の瞬間、ハルカ&ルーファスは極寒の雪山に放置されていたのだった。

寒い、寒い、じつに寒すぎる山脈。凍え死にそうなくらいに寒い。いや、凍え死ぬ。

気づいたらグラーシユ山脈に空間転送されていた。

「ローゼンクロイツって空間転送まで会得してたのか（やつぱ僕とは比べ物にならないほど天才だな）」

空間転送の魔導は、どんな優れた魔導士でも失敗が大いにありえる魔導で、まともな神経の持ち主ならまずやらない。失敗した場合は、亜空間の狭間に閉じ込められて出られなくなることもある危険な魔導なのだ。

てゆーか、今は過ぎ去った危機より、今ここにある危機。

極寒！

なんの準備もなしで、グラーシユ山脈に来るあふおーはいない。いたとしても、温泉ツアーだと騙されて、普段着で連れて来られるクラウス魔導学院の一年生くらいだ。

凍え死ぬ前にルーファスはポケットをゴソゴソした。

チャチャチャチャー、クラウス魔導学院購買部特性カイロ

クラウス魔導学院で冬になると売り出される使い捨てカイロ。太陽神アウロと炎の精霊サラマンダーの術を施した特別製だ。どんな極寒でも快適な温度に体温を保ってくれる。

「たまたまカイロポケットに入ってたから死んでたよ」

ルーファスとハルカはカイロを貼って、防寒対策万全で雪山の中を進んだ。

「はにゃーん、なんかぼかぼかして気持ちー（こたつの中に入

「つてるみたい」

夢心地のハルカ。こたつを愛するハルカはこれでまたネコに一步近づいた。

ハルカが眠りそうになつてすぐに、その城は見えてきた。氷でできたような城　シルバーキャッスルだ。

城の壁は石でできているが、その周りは全て氷に包まれ、城から突き出る塔はまるでつららを逆さまにしたような形をしている。

城門は開けられていた。もしや、これは『かかつて来れるもんなら来てみる！』というカーシャの意思表示なのかもしれない。

城の中を進むルーファスとハルカ。蒼い炎が灯る廊下を抜け、玉座の間まで来た。

ここで一行を出迎えたのは？

準備中の看板。

「なにこれ？」

とハルカが尋ねるが、ルーファスにもわからない。

「私に訊かないでよ」

なんて会話で場を繋いでいると、奥の部屋から白い影が姿を見せた。

金色の髪を揺らし、薄手の白いドレスを着た優美な妖女。

「誰あの金髪？」

ハルカは不思議な顔で言ったが、ルーファスは身も凍る思いで、一步後ろに足を引いた。

「また金髪に戻したんだねカーシャ（カーシャが僕のこと恐い目して見てるよあ）」

金髪の女性はカーシャだった。ハルカの知っているカーシャの髪の毛の色は黒だ。

「……ふふ、ぬけぬけとようこそ我が城、シルバーキャツスルへ（ここに来たからには、身も凍るような、あゝんな目やこゝんな目に遭わせてやる）」

金髪のカーシャ それは当時はじめてルーファスが出遭ったカーシャの姿。

カーシャはモジモジしながら、背中ホックを閉めていた。

「貴様ら来るのが早すぎるぞ。妾が箒をぶっ飛ばして来たというのに、貴様らが来るのが早いので準備が整ってないではないか。ルーファス、ちよつとこつち来てホックを閉めてくれ」

「は、はい」

ここになにしに来たんだか、ルーファスは命じられるままドレスのホックを閉めた。

ホックも無事に閉め終わり、準備中の看板も取り払われた。

仕切りなおしにカーシャが咳払いをした。

「コホン、さて貴様なにをしに来たのだ？」

実はこのとき、アステア王国全土では、聖王ハルカVS魔女カーシャの戦いが巨大ホログラムスクリーンによって映し出されていたのだ。もちろんローゼンクロイツの仕業だ。

ハルカVSカーシャの映像を流して、見事ハルカがカーシャをやっつける映像を全世界に広めようとしているのだ。



ローゼンクロイツの思わく通り、人々は戦いを見守り、ハルカを応援した。

そういうわけで、この戦いは“実況中継”されていた。

この実況をしているのはローゼンクロイツの雇った実況のブ口と、特別解説員としてクラウス魔導学院の黒魔導教員ファウストが呼ばれていた。

「なかなか、面白い戦いだ。クク……私は誰が勝とうが構わな  
いかな」

「おおっと、ルーファスがカーシャに歩み寄っていきます、なにをする気か！」

実況中継どおり進んだルーファスは、カーシャのシャキッと  
ビシッと足を止めた。

「軍隊がここに攻め入ってくる前にさ、全部ジョーダンでした  
で済まそうよ」

「ヤダ（びよ〜ん……ふふ）」

即答だった。カーシャは人の言うことを聞くのが嫌いな女だ。

「そこをなんとさ（どうにか丸く治めないと）」

「ヤダ（びよ〜ん）」

また即答だった。もう一度確認のために言うが、カーシャは  
人の言うことを聞くのが大嫌いな女だ。

ルーファスの傍らに立つたハルカからも説得。

「ねえカーシャ、世界征服なんてよくないと思うの、ねっ？

（この人に世界征服なんてされたら……怖い）」

「ヤダ（びよ〜ん）」

「またまた即答だった。改めて言うが、カーシャは人の言うことを聞くのがちよー大嫌いな女だ。」

カーシャは目を瞑り、語るようにしてルーファスに尋ねる。「ルーファスと妾はこの城で出逢った。あのときのことを覚えているか？」

「忘れるわけないだろ、私が雪山で遭難してこの城に迷い込んで、それでカーシャの眠りを覚ましちゃんだよ」

「そのとおりだ。過去の大戦で妾は重傷を負い、エネルギーを癒やすために装置の中で深い眠りにしていたのだ。そして、不完全状態で妾はおまえに起こされた。それだけだったらよかつたのだが、その際に妾のエネルギーの大部分が世界に還り、残った分までもおまえが吸収してしまった」

「だから、死ぬほど謝ったじゃん」

「もう気にはおらん。装置を直す技術が今の世界にはないがな！」

「思いつきり気になっているらしい。」

グサツとカーシャの言葉がルーファスの胸に刺さった。物理的な戦いがはじまる前に、精神的な戦いでルーファスは敗北した。

「そんなときだった。この場に新キャラが登場したのは！」

白髪白髭の杖を突いた見るからにヨボボヨの爺さんがこの場に乱入してきた。

「やつとこさ見つけたぞ、魔女王カーシャよ（こやつを探すのに、はて、何年くらいの日日を費やしたかのあ？）」

「誰だおまえは？（この爺さんは誰だ？）」

全く記憶に御座いません状態のカーシャ。この老人の正体とは？

「わしのことを忘れてしまったのか、この魔女が。わしは……わしは……どこの誰じゃったかの？（ロバート、ポール、エリザベスじゃったかの？）」

この老人はだいぶボケていた。

「ああ、思い出したぞ、わしの名前はハインリヒ・ネットスハイムじゃった（少しボケたかの？）」

だいぶボケている。

名前を聞いてもカーシャはこの人物について思い出せなかった。もしかして、老人は自分の名前を勘違いして、別の名前を言ったのか。いや、違う、これが彼の本名で、人々に知れ渡っている名前は別にある。

驚いたルーファスは裏返った声をあげた。

「もしやあなたが、かの有名なアグリッパ様ですか？（……そんなわけないか、このボケ老人がね。そもそも歴史上の人物で生きてるはずない）」

「おお、そうじゃ、その名前じゃ。その方が世間様に知れ渡っておる」

「ああ、思い出した（だいぶ歳をとっていたので見た目ではわからなかった）」

ぼそりと呟いたカーシャはやっと思い出した。この男は“過去”にカーシャを討伐するために編成された魔導士の一団のひ

とりだった。

だが、今ごろカーシャの城を見つけるなど、たまたまカーシャがここに帰っていなかったらどうする気だったのか？

むしろ今まで探し続けていた彼の根性はスゴイと褒めてあげたい。なんせ、一〇〇〇年以上もの月日を費やしているのだから。

「よく、人間が永い時を生き長らえたものだな。で、今更アグリッパが妾になんのようなところがあるというのだ……まさか妾を倒すなんて言うわけがないな。（こんなご老体のヨボヨボ爺さんかな）」

「わしの仲間はずい長い時の流れの中でみんな死んでしまったわい。残っているのはわしだけだ。仲間のためにもお主の首を貰わねばならん。じゃが、なぜわしをお主の首を狙っておるんじやつたかの？（こそ泥だったか、わしの逃げた女房だったか？）」

ボケてまで追い手を追い続けるとは大した執念だ。もしかして、ボケていて年月もわからなかったのか？

このアグリッパがカーシャ討伐の旅に出たのは、もちろん過去に魔女王としてカーシャが人々に恐れられていたからだ。

キラリ〜ンとカーシャの目が妖しく輝いた。またまたトンデモないことを言いそうな空気がこの場を包み込む。いや、絶対言う（断言）。

「では、こうしよう。ハルカ&ルーファスチームとアグリッパと妾で三チームに分かれて戦い、勝った者が世界を自分のものにしていい権利を持つことにしよう。魔導砲の制御装置はこの

イヤリングだ。これを勝者にはくれてやる（勝つのは妾だがな、どんな手を使っても妾は勝つ……ふふ、卑怯者）」

蒼い宝石の付けられたイヤリングが妖しく輝く。

アグリツパは杖を高く上げて笑い出した。

「ふおふおふお、そうじゃったわい。わしは全世界の覇権を賭けて戦っているんじゃない……ハルカを手に入れたら私の勝ちだ」

自分の名前を呼ばれたハルカはひどい身震いをしてしまった。違う。この人アグリツパじゃない。

国民たちが今から起こる戦いに固唾を呑んでいたとき、突如としてライブ中継していたカメラにノイズが入り、中継が中断されてしまった。

そのとき現場は!?

## 第19話 終焉の魔王

アグリツパの腹の内側から指が十本突き出て、内にいるなにかが腹をこじ開けて出てこようとしていた。

それがなにかいち早く気づいたハルカが叫ぶ。

「クロウリー！」

ルーファスは恐怖し、カーシャは驚愕した。

アグリツパの腹が割かれ、中々ら人の両足が出て、胴が出て、最後に腹から出てきたというにまったく穢れていない美しい顔が出た。

まさしくそれは魔人クロウリー。

「嬉しいぞハルカ。私のことをいち早く気づいてくれて礼を言おう」

死んだと思っていた者の出現により、戦いの焦点がすべてクロウリーに向けられてしまった。

険しい表情でカーシャがクロウリーを見据える。

「生き返ったのか、それとも不死身か？」

「私は最初から死んではおらんよ。君たちが戦ったのは私の影だ、本物はこの私。今ここにいたアグリツパも同じ方法でつくったのだよ」

まさにそれは人の創造。ホムンクルスは入れ物でしかないのに対して、たしかに“あのクロウリー”は本物だった。

不思議な顔や、腑に落ちないといった顔でクロウリーは見られ、彼は艶やかに微笑した。

「姿かたち、記憶までも同じダミーを私は造ることができる。姿も記憶も本体と同じならば、なにをもつて偽者とするかは難しい問題だが、自己の存在を証明するのは他であり、他があつての自分。光があつての闇と同じことで、君たちが倒したのは私に対しての影だ」

観念的なことが混じっていて、なかなか意味を理解するのが難解だ。

ハルカには意味がさっぱりだったが、これだけはすぐにわかった。まだ自分が狙われている。妖しい視線をハルカに送るクロウリーの眼を見れば察することができた。

守るようにルーファスがハルカの前に立った。

「まだハルカのこと狙ってるの？（そうでなきゃ、こんなところまで来るはずない）」

「もちろんだとも、ハルカは魔王となり、私に大いなる力を与えてくれる。ルーファス君には、ハルカの力が視えないのかな？」

「ハルカは私たちとは違う世界からきたかもしれないけど、普通の女の子だよ！（今は猫だけだ）」

「すぐに私の言っていることを理解できる時が来る」

続けてカーシャがクロウリーに質問を投げかける。

「なぜアグリツパの姿をしていたのだ？（クロウリーほどの力があるな、隠れて不意をつく必要もない）」

「それは私がカーシャ君に興味を持ったからだ」

「妾のことと、おまえがアグリツパに化けていたことになんのか関係があるのだ？」

「私の造ったアグリツパは君の過去を知る重要な人物だ。君が何者であるか、君が潜伏していそうな場所はどこか。私は彼の中に溶け込み、彼の記憶を読み取った。記憶を読み取ったあと、私が彼の中から再構築して出るには、腹を破るしかなかっただけのこと」

クロウリーがアグリツパの腹から出てきた理由は、今の姿かたちとは異なる物質になっていたからだ。クロウリーのすぐ近くにアグリツパが倒れているが、その身体は日干しされたみたいに小さく干からびている。クロウリーが元の身体に戻るためにエネルギーを吸われたためだ。

風もないのにクロウリーのマントが揺らめいた。

「さて、質問がないのならば、ハルカを渡してもらおう」

「ルーファス避ける！」

叫んだのはカーシャだった。

暗黒の炎が渦を巻きながらルーファスに喰らいかかった。

不意を衝かれたルーファスは動くことを忘れ、眼前に迫った炎を瞳が映し出し、真っ赤に瞳が色づいた。

ルーファスが炎の直撃を食らう瞬間、その眼前に白い影が立ちほだかり、ルーファスは押し飛ばされてしまった。

すぐ近くにいたハルカは一部始終を見ていた。

クロウリーの放った炎の直撃を喰らいそうになったルーファ



スを、カーシャが庇ったのだ。

まさかカーシャが人を庇うとは誰も思つてなかつたかもしれない。それは相手がルーファスだったからかもしれない。

苦痛を顔に刻むカーシャ。背中の服は燃え焼け焦げ、大きく素肌を露出されてしまっている。そこに浮かぶ大きなケロイド状の痕が生々しい。

カーシャの火傷の痕を見たハルカが叫ぶ。

「カーシャ大丈夫っ！（酷い、見てるだけで胸が苦しくなっちゃう）」

「ふふっ、案ずるな。それは古傷だ（見られたくない傷を見られてしまったな）」

カーシャが身を挺してルーファスを庇ったのは、クロウリーにとつても予想外であつた。

「動けずに直撃か、それともハルカを庇うか、どちらにしてもルーファス君に当たると踏んでいたのだがな。とても興味深く面白いものを見せてもらつた」

「では妾がもつと面白いものを見せてやるっ」

唇が淫らに妖しく微笑んだ。

冷気を含んだ風が叫び声を上げ飛び交う。

怨念か執念か、妄執か、風の声が呪いのように耳にこびりつく。耳を塞いでも悪寒が身体の芯を突かれてしまう。すべて魂に直接訴えかけていた。

カーシャの身体に起こる変化。

金髪が銀髪へ変わり、瞳は黒から深い蒼へ。

紫色に変化した口元が言葉を紡ぎだす。

「妾の城へようこそ。この場所は妾にとつてのパワースポット。最盛期とまでは行かぬが、今の妾は強いぞ？（きゃーカーシャさん素敵……ふふっ）」

自信に満ちた不敵な笑みを浮かべたカーシャ。しかし、拳は汗を握っていた。

実力を計り知れない存在を前にしている。あとき戦ったクロウリーは本気ではなかったとカーシャは確信していた。ならば、クロウリーの實力は？

勝負は長くはならないだろう。

カーシャは最初から全力で向かうつもりだった。これで仕留めることができなければ、カーシャが勝てる見込みはない。

視認できるほどのマナフレアがカーシャの周りを浮遊していた。

「レイビーム！」

真っ白なビーム光線がいくつもカーシャの身体から放射された。

質量を持ったその光線は光速とはまではないが、決して人間が避けられるスピードではなかった。

クロウリーの身体が霞み、その中を白い光線が抜ける。

反動で霞が引き千切られ拡散して、クロウリーは姿を消した。すぐに気配はした。

カーシャの真後ろだ。

「ヘルファイア！」

地獄から呼び出された炎が、振り向きざまのカーシャの身を包み込んでしまった。

炎の中でカーシャは冷ややかにクロウリーを見ていた。その口元が笑みを浮かべると、炎は掻き消され、水蒸気がカーシャを包み込んだ。

「この城の中にいる限り、妾は一切の攻撃を受けることがない（と強がってみたが、限界もある。おそらくクロウリーはそれを知っておるな……ふふっ笑えん）」

「それでは城ごと吹き飛ばすか、それともなければカーシャ君が身に着けているイヤリングを奪うかだな」

「チツ……気づきおったか（これが城からのマナを受け取る受信装置だと、いつ気づいたのだ？）」

「私の眼は全てを視ている。そのイヤリングにマナが集まっているのを視えないとも思ったかね？」

「気づいたところで易々と奪わせぬわ。ホワイトプレス！」

クロウリーの姿が猛吹雪の中に一瞬で消え、魔導を放ったカーシャの視界も遮られたが、吹雪の中からクロウリーの声がした。

「シャドービハインド！」

たしかに吹雪の中からクロウリーの声はした。だが、カーシャが気配を感じたのは自分の真後ろだった。さつきも同じことがあった。

それはいつかエセルドレーダが、対ローゼンクロイツ戦で用いた能力に似ていた。相手の影に潜み姿を見せる能力。

カーシャの影から、飛び出たクロウリーが呪文を唱える。

「イラ、魂をも凍りつけ、ホワイトフリージング！」  
至近距離でカーシャは避ける術がなかった。

宙に発生した白い雪の塊が次々とカーシャに襲い掛かり、その身体を白く覆っていく。

足が、手が、胴が、雪はカーシャの首から上を残し覆い隠し、まるで顔の小さな雪だるまのような姿になってしまった。

雪など簡単に砕いて抜け出せると思ったカーシャだったが、いくら手足に力を込めても動かない。びくともしないのだ。

「動けん、なぜだ！」

「氷の魔女王 と呼ばれた君が、雪だるまにされた気分はどうかね？」

「戯けが、すぐにこんなもの！」

だが、身体は氷 いや、鉄の中に閉じ込められたように動けなかった。

クロウリーの手がカーシャの耳元に伸び、蒼い光を放つ宝玉のついたイヤリングに触れた。

「これは私がもらっておこう」

耳たぶが悲鳴をあげ、イヤリングはカーシャの耳たぶを割きながら奪われた。

クロウリーは上を向いて大きな口を開けると、なんとその中に瞳の大きさもある宝玉のついたイヤリングを落としてしまったのだ。

そして、喉を鳴らす音だけが響き渡った。

見る見るうちにカーシャの髪色が金に戻っていく。

黒瞳のカーシャはクロウリーを睨みつけたが、もうすでに彼女には戦う力は残っていなかった。大きな戦力が失われてしまったのだ。

「妾が雪だるまにされるなど、いい笑い話になるな。殺すならさつさと殺すがよい（勝ち目は無い、玉座の後ろに身を潜めている二人にも期待はできん）」

「カーシャ君のことは嫌いではない。私たちは似たような境遇に持ち主だ。だから、殺しはせんよ」

クロウリーの言葉に疑問を抱き、カーシャは話に関心を持った。

「妾とおまえが似ているだと？（どちらも美形……ふふっ）」

「人間でも神でもない中途半端な存在。カーシャ君の母は神々の母にして、氷の神ウラクアだと云うではないか。しかし、君は神ではない。それに劣等感を感じているのではないかね？」

「劣等感だと、妾が人間よりも優れた存在であることには変わりはないわ」

「そのプライドが君を世界征服への想いへと導いたわけだな」  
「アステア王国ができるよりも遙か以前の出来事。」

このウーラティア地方を支配しようとしていた一人の魔女がいたと古い文献にはある。

魔導の研究にも熱心で、研究のために学院を空けることの多いクロウリーは、その話について誰よりも詳しく知っていた。

「古の時代にこの地方は 氷の魔女女王 つまり君によって

「征服されなかったことがある。しかし、君は夢半ばで倒れた。そう伝承や古文書にはある。なぜ 氷の魔王が この地方の征服に失敗したのか、それを語る物は現代には残っていない。ルーファス君たちは、なぜという理由に対して探究心が沸いてこないかね？」

玉座の後ろに隠れていたルーファスとハルカは顔を向けられ、心臓が驚掴みにされる思いだった。ルーファスの腕に抱かれたハルカは恐怖で震えてしまっている。

ただ息を呑み込み、震えるだけの二人を見て、クロウリーが話を続けた。

「私はなぜカーシャ君が征服に失敗してしまったか知っていない」

「それ以上しゃべるなクロウリー！ 殺してくれる！」

怒りに露わにしたカーシャが叫んだ。しかし、クロウリーは口を閉じない。

「カーシャ君は人間の部分が強かったと見える。アグリツパの記憶を読んだ私は、彼と君との間になにがあったのか知っていない。それを知ったとき、私は君にかわいらしささえを覚えたものだ」

爽やかな笑顔であるのに、クロウリーの内にあるものが違うという。狂いが感じられるのだ。

自分の秘密を人に口にされることほど、カーシャにとって屈辱的なことはなかった。それなのに、身体の内は奪われ報復もできない。怒りが腹の中で煮えくり返るだけだ。

「殺すぞクロウリー！（全ては若気の至りだ……ふふっ）」

「私はカーシャ君と同じミスはしない。私のハルカに対する愛はとても深く崇高なものだが、それによって失敗を犯すことは決してない。私はハルカを食べてしまいたいほど愛している。

それが私の目的だ　シャドービハインド！」

クロウリーの姿が瞬時にルーファスの背後に移動した。

一〇メートル以上もの距離をどうやって移動したのか、ルーファスは眼も剥いて驚いた。

「なんで後ろに!？」

「この業を使える悪魔は数が限られている。非常に高度な業なのだが、私はそれを魔導化したのだよ。私がこの術を使えば、半径三〇メートル以内にある影の中に移動することができる」

「じゃあ私たちが走って逃げて、すぐに追いつかれるってことじゃないか（魔導は万能じゃないって講義で教わったのに、そんなの嘘じゃないか）」

「それがわかっていいるのならば、ハルカを寄こしたまえ」  
ルーファスの腕の中でハルカが震えていた。

「アタシやだし。アンタのところなんかいきたくない！」

「いくら嫌われようが、私はハルカを愛するよ」

「アンタから愛してるなんて言われたくない、うえっ！」  
「では言葉を変えよう、君のことが欲しい」

妖しく笑うクロウリーの手がルーファスに抱かれたハルカに伸べる。

「ハルカ逃げて！」

大声を上げたルーファスはハルカを投げ、すぐさま手にマナを集中させる。

「エナジーチエーン！」

光の鎖が赤黒い魔導衣に巻かれていく。

クロウリーの身体を魔導チエーンで簀巻きにして、ルーファスはすぐにハルカに目をやった。その場でハルカは動かずじじいた。ハルカは逃げなかったのだ。

「ハルカは早く逃げて！」

「ルーファスのこと置いて逃げられないでしょ！」

「他に方法がないんだよ！」

「ヤダッ！」

「わがまま言わないで！」

「アタシわがままだし！」

魔導チエーンが金切り声をあげた。

「霸ッ！」

砕け散った魔導チエーンが輝く砂となって煌びやかに舞った。せつかくのルーファスの時間稼ぎも無駄になってしまったのだ。拘束から解放されたクロウリーのマントが激しく揺らめいた。赤黒いマントが壮絶な動きを魅せる。なんと、マントが生き物のように形を変え、赤と黒の触手となってハルカに魔の手を伸ばしたのだ。

いつかカーシャが言っていた。

肉体は人の肉にあらず、服もマナを具現化させたものに違いない。



触手と化したマントはハルカの四つの足をつかみ、そのまま宙に持ち上げてしまった。

「放して！」

叫ぶハルカであったが、触手は開けた口の中にまで入り言葉を封じた。

息苦しいと感じたのもつかの間だった。体中が触手で覆われていく。もはや呑み込まれるのも時間の問題だ。

ハルカを助けようとルーファスは魔導で触手を切ろうとしたが、それに勘付いたクrouリーに妨害されてしまった。

「エアボール！」

クrouリーの手から放たれた空気の塊がルーファスの腹にめり込み、そのままルーファスの身体を後方に吹き飛ばしてしまった。

くじけず立ち上がるうとしたルーファスの耳に、ハルカの叫び声が木霊したような気がした。口を塞がれているにもかかわらず、ルーファスの耳には自分に助けを求めるハルカの悲痛な叫びが聴こえたのだ。

触手はハルカを呑み込み、次にクrouリーの身体を呑み込んでしまった。そう、それは昆虫の繭のようにクrouリーの身体を包み込んでいた。

この場に新しい気配がした。

「……サイテー（ふう）」

空色の影　ローゼンクロイツだった。

中継映像が途切れたことに危険を感じ、すぐさまここに駆け

つけたのだ。

「すごく嫌な予感がする（ふにふに）。ルーファス、ハルカのことにはあきらめて、その繭を壊すよ（ふにふに）」

「ハルカのことをあきらめるだって！（なんてこというんだ！）」

なにかとてつもない空気を、身動きを封じられているカーシヤも感じていた。

「ルーファス壊せ、これは命令だ！（神が、邪神が生まれようとしている……マジ笑えん、ふっふっふ）」

「カーシヤまでハルカを見捨てる気なの！（ハルカは僕らを置いて逃げなかったのに）」

だが、ルーファスも狂気を感じていないわけではなかった。すぐそこにある繭に赤い血管のようなものが浮き、中でなにかが鼓動を打っている。

ローゼンクロイツはすでにライラの詠唱をしていた。

「そして、偉大なる大天使セーフィエルよ、御名において誓う。邪を砕く力を我に与えたまえ、汝の呪われた魂に救いあれ、昇華セイントクロス！」

その一瞬、身体を十字したローゼンクロイツの背中に輝く羽が生え、激しい閃光と共に彼の身体から十字の輝きが解放された。

繭は一瞬にして黄金に光に包まれ昇華はずだった。

ローゼンクロイツは自分の目を疑った。

「……無傷（ふ、ふにや？！）」

傷一つなかった繭に小さな亀裂が走った。

ローゼンクロイツの攻撃が効いたのか？

いや、違う。セイントクロスは物理的なダメージを与える魔導ではない。効果があれば、昇華されて消え去ってしまうはずだった。

繭に入った亀裂が徐々に大きくなり、中から黒い瘴気が息を  
するように吐き出された。

闇が世界に奔った。それは闇の閃光とでもいうのだろうか、  
刹那、世界は闇に包まれていた。

時が蝕まれた。

闇が明け、世界に色が戻ると、繭のあった場所に羽を生やした裸体の人影が立っていた。

裸体には性器がなく、背中に生えたバタフライのような翼は、片方が蝙蝠のような悪魔の羽、もう片方は鳥のような天使の翼だ。

光輪の王冠を頭に載せ、クロウリーよりも妖艶で中性的な顔を持った者は微笑した。

「我が名は 666の獣」

天が奏でる調べのように玲瓏とした声が響いた刹那、 66  
6の獣の腹に異変が起きたのだった。

第20話 夢の中へ

世界は恐怖した。

666の獣の腹の下でなにかが蠢いたかと思うと、記号と六芒星が痣のように浮かび上がり、その中心に猫の顔が浮かび上がったのだ。

恐怖だ！

それを見たローゼンクロイツが、口から空気の塊を吹き出した。

「ぷっ……ごめん、笑っちゃったよ（ふにゅふにゅ）」

荘厳な666の獣の雰囲気と、腹に浮かび上がった猫の顔のギャップがありすぎたのだ。

腹筋猫ここに現る！

それは吸収されたハルカだった。目を瞑ったままで意識はないうだ。

まだハルカはそこにいる。それを知ったルーファスは希望が湧いた。

「（まだハルカを助けられる。助けなきゃいけないんだ絶対に！）」

それも束の間の夢だった。

「私の復活に血の祝杯はないのか？」

666の獣の瞳が緋色の輝き、そこに六芒星が映し出さ

れた。

刹那の時、全員の意識が闇の中に堕ちた。

気がつくとも血の香りが鼻を刺激した。

ルーファスが振り返ったときには、ローゼンクロイツの腹には黒い槍が突き刺さっていた。

「ローゼンクロイツ！」

「……このままやられ役に納まるの嫌だな（ふう）」

自ら腹に刺さった槍を抜き、ローゼンクロイツはそのまま前のめりに倒れてしまった。

駆け寄って来ようとするルーファスをローゼンクロイツは止めた。

「君アイラ使えないだろ（ふにふに）。ボクは大丈夫、それよりもハルカを救いなよ（ふあふあ）。ボクは応急処置くらいアイラは使えるさ（ふあふあ）」

アイラとは回復魔導の全体を指す言葉だ。

応急処置のアイラでローゼンクロイツは止血には成功した。それでもローゼンクロイツはもう戦うことも、立つこともできない状況だった。

大量の血はすでに吹き出し、治した傷口もいつ開くともわかない状況。それに加えて、ローゼンクロイツの使えたアイラは、自分のエネルギーを使って治癒する方法だったために、自らの体力を消費してしまったのだ。傷が深かったローゼンクロイツは、それだけ自分の体力を消耗してしまった。

ルーファスだけが残された。無傷のまま戦えるのはルーファ

すだけだった。しかし、ルーファスにもわかっていた。力の差がありすぎるのだ。

目にも見える闇の風を纏う　666の獣　から発せられる鬼気。

このときルーファスは死を身近に感じた。汗が滝のように流れ出し、抑えられ恐怖が内から沸き立つ。

気づいたときには、ルーファスは雪だるまになっているカーシャの後ろに隠れていた。

「駄目だよ、僕は怖いんだ。なにもできない」

「ルーファス、妾の後ろに隠れるでない！」

「そんなこといったってさ」

「妾の顔に顔を近づける！」

「えっ？」

「早くしろ戯け！」

言われるままルーファスが顔を近づけると、カーシャの唇がルーファスの唇に接吻をし、なにか冷気のようなものがルーファスの口の中に投げれ込んできた。

口を離しカーシャは緩やかに微笑んだ。

「妾のマナをくれてやった。早く奴を倒せ……でないとな妾が死ぬ……笑えん……」

ルーファスに力を分け与えたカーシャの意識が途切れてしまった。

「カーシャ！」

叫ぶルーファス。

最後の望みをルーファスに託したカーシャの身体からは大量の汗が流れていた。カーシャの身体が溶けていく。早く 666の獣を倒して、カーシャにマナを返さねば、カーシャの身体が溶けて消えてしまう。

なんてこつたい！

焦るルーファスは恐怖を忘れ、すぐさま 666の獣に向かつて手を構えた。

「ライラライラ、ホワイトウインド！」

白銀の風が 666の獣に向かつて吹き荒れる。

「余興にもならんな」

666の獣が羽虫でも払いのけるかのように手を動かしただけで、突風が巻き起こりホワイトウインドを相殺してしまった。

ライラさえも簡単に防がれてしまったのは、ルーファスに勝ち目がないに等しかった。

焦りを深くするルーファスの前で 666の獣が残像を残し消えた。

どこに消えたかなど考える時間などなかった。

ルーファスはすでに 666の獣に首を絞められていた。

「ううっ（く、苦しい）」

「軽く触れているだけだ。少しでも力を込めれば喉の骨は砕けるだろう。だがな、それではつまらん」

「放せ……アイスニードル！」

至近距離で放たれた氷の氷柱は 666の獣の胸を突き抜

けた。

「もつとやりたまえ、抵抗をするのだ」

666の獣 は笑っていた。胸に穴を開けられたというのに、苦痛など微塵も感じさせず、ルーファスの首を絞め続けていた。

抵抗することすら虚しく感じてしまう。

ルーファスの腕が力を落とすと、666の獣 は不快そうな顔を露わにした。

「もうあきらめるのか、つまらぬ。仕方あるまい、心の臓を抉り出して殺してやるっ」

666の獣 がルーファスに止めを刺そうとした瞬間だった。急に 666の獣 の動きが止まってしまったのだ。いや、

666の獣 は腕が小刻みに震えている。力を込めても動かないといった感じだ。

苦痛に顔を歪ませ 666の獣 はルーファスを開放し、よろめきながら後ずさりをした。

そのとき、666の獣 の腹に浮かび上がっていたハルカの顔が、深い眠りから覚めて静かに瞼を開いたのだ。

「……ルーファス……今のうちに……」

666の獣 に吸収されながらも、ハルカの意識はまだそこで生き続けていた。

「早く……アタシがこいつの動きを……早く殺して……」

ハルカがなにを言わんとしているかルーファスはずぐにわかったが、苦しみを噛み締めて動くことができなかった。



「駄目だよ、そんなことできない！」

「このままだとルーファスが殺されちゃうから……見ているのも嫌……早く殺して……それでアタシも苦しまずに済むから」

まん丸のハルカの瞳から大粒の涙が一筋流れた。

しかし、ハルカの抵抗も長くは持ちそうにはなかった。6

66の獣 は歯をガチガチならしながら、徐々に震える腕を動かしていく。

「まだ意識が残っていたか……されば、おまえの意識を消し去る前に、この男を目の前で殺してくれる！」

黒い風が叫び声をあげ、かまいたちのようにルーファスの魔導衣を切り裂き、頬までも赤い筋が走った。

傷付くルーファスの姿を見てハルカは叫んだ。

「早くアタシごとこいつを殺して！」

「そんなことできない！ だって、ハルカは僕の大切な人だから！」

震える手を必死に押さえるルーファス。

だが、死はそこまで迫っていた。

666の獣 が呪文の詠唱をはじめる。

「ライラライラ、暗黒星イーマより吹き荒れる死に風は……」

それでもルーファスは動くことができなかった。

「……駄目なんだ、僕にはできない」

迷いが生じるルーファスの脳裏に誰かが直接話しかけてきた。

《ルーファス迷うな、ハルカの意味を無駄にするでない！》

それは気絶してしまっているはずのカーシャだった。肉体的な意識をなくしても、ルーファスの中に入ったカーシャの一部とカーシャのアニマの意識を繋いだのだ。

《メガフレアを撃て！》

「は、はい！」

有無を言わさぬカーシャに押されてルーファスは返事をした。《ライラライラ、神々の母にして氷の女王ウラクアよ……》カーシャの呪文詠唱がはじまり、ルーファスの手が意思に反して動きはじめた。カーシャの意思がルーファスの身体を動かしているのだ。

慌てたルーファスもすぐに呪文の詠唱をはじめた。

「ライラライラ、紅蓮の業火よ全てを焼き尽くしたまえ……」

魔導を帯びた風が当たりに吹き荒れ、666の獣が起きます魔気を反発しあい相殺していく。

ルーファスの身体の周りをオレンジとブルーのmanaフレアが飛びはじめ、魔法衣と髪の毛が魔導風によって揺れた。

《ホワイトブレス！》&《メガフレア！》

ハルカは涙を零しながら微笑んだ。

吹雪と炎が渦を巻き、666の獣を一瞬にして呑み込んだ。

身体が分解していく666の獣を見て、壁にもたれかかっていたローゼンクロイツが口元を歪めた。

「聖王が魔王を倒した……ボクの勝ちだね（ふにふに）」



なにが？

ボソツと何気なくであったが、ルーファスとハルカはローゼンクロイツの発言にただならぬものを感じて、息を塊のまま呑み込んだ。

「大変だよ（ふあふあ）。クラウス王国がここに向けて魔導砲を撃つたらしい（ふにふに）」

「「えーっ!?!」」

声を合わせてルーファス&ハルカが叫んだ。

どこからその情報を仕入れたのか、きっとローゼンクロイツは電波を受信したに違いない。実際、このときクラウス王国から発射された魔導砲は、音速に迫るスピードでカーシャの居城シルバーキャッスルに向かっていた。

ルーファスの意識の中でカーシャが叫んだ。

《クロウリーが呑み込んだ制御装置を捜せ、こちらからも魔導砲を撃ち返してくれるわ!》

命令にルーファス迅速に動き、666の獣の消失した場所を床に這いつくばって、カーシャのイヤリングを捜した。

「ないよ、ないってば！（なにもないよ!）」

城の警報装置がけたたましい叫び声をあげ、ローゼンクロイツがボソツと呟いた。

「……間に合わないかも（ふあふあ）」

ローゼンクロイツのエメラルドグリーンの瞳がここにいた全員を映し出し、瞳に浮かぶ五芒星が煌く輝きを放った。

城全体が激しく揺れ、唸るような音を出した。

目を開けられないほどの光が世界を包み、闇を全て消し去ってしまった。

そして、全ては光の海の中に消えた。

ハルカは目覚めた。

「……あれ、ここって？」

見覚えのある部屋。

ベッドの上から見える光が差し込む窓の外の景色。

壁には崇拜するヘヴィメタルバンドのポスター。

自分の部屋。

「もしかして……帰って……もしかして、全部夢だったの？」

目覚めたら自分の部屋だった。

そう考えたら、もしかして今までの出来事は全部夢だったのかもしれないと思えてきた。

魔法の世界　そんな世界があるはずがない。

とても長い夢だった。

「すごく疲れてるみたい……もう少し寝よ」

そう言ってハルカは深い眠りに落ちた。

小さな身体が静かな寝息を立てる。

夢のような冒険は終わり、再び夢の中へ。

でも、本当に夢だったのだろうか？

もしも、あの出来事がハルカの体験した現実だったならば、そのことはハルカの“身体”が身に沁みて覚えていることだろう。

ベッドの上では小さな黒猫が静かね寝息を立てていた。